

村下遺跡 7 松ノ木遺跡 牛頸本堂遺跡群 10

大野城市文化財調査報告書 第216集



2024

大野城市

序

大野城市は福岡平野の南部に位置しており、北側に大城山、南側に背振山系が広がる南北に細長い形をしています。このような豊かな自然にくわえ、特別史跡大野城跡、特別史跡水城跡をはじめ数多くの遺跡が所在する歴史にも恵まれた街です。

今回報告するのは、村下遺跡〇地点、松ノ木遺跡、牛頸本堂遺跡群第18次調査地点です。村下遺跡と松ノ木遺跡は市の中央部にあり、村下遺跡はこれまで数多くの調査が行われてきた遺跡です。今回の〇地点は遺跡の西端に位置し、遺跡の広がりを知るうえで重要です。松ノ木遺跡は今回初めて発掘調査された遺跡で、弥生時代の円形の溝が確認されました。周辺で遺構などが確認されていみせんでしたが、弥生時代の終わりごろの様子を知ることができる貴重な成果です。牛頸本堂遺跡群第18次調査では、弥生時代の遺構にくわえ平安時代の終わりごろの土器生産にかかわる遺構が確認されました。古代末から中世初め頃の生産活動の復元に貢献するものといえます。

本報告書により発掘調査の成果が、今後教育や研究の面におきまして広く活用していただけることを願っております。

最後に、発掘調査に際してご理解、ご協力をいただいた地権者をはじめとする関係各位、多くのご指導を賜りました皆様に厚くお礼を申し上げます。

令和6年3月31日

大野城心のふるさと館
館長 赤司 善彦

例 言

1. 本書は、大野城市教育委員会が発掘調査を実施した村下遺跡^オ O 地点（旧市原遺跡）、松ノ木遺跡、および牛頸本堂遺跡群第 18 次調査の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、大野城市教育委員会が実施した。
3. 整理作業は、大野城市の単費事業として実施した。
4. 本書における遺構の分類番号は、S A：柵・土塁・塀、S B：掘建柱建物、S C：竪穴住居跡、S D：溝、S E：井戸、S F：道路状遺構、S H：広場、S J：甕棺墓、S K：土坑、S P：ピット、S R：祭祀遺構、S T：古墳・木棺墓・土坑墓・石棺墓、S X：性格不明遺構とした。
5. 発掘調査は、村下遺跡 O 地点を丸尾博恵・徳本洋一、松ノ木遺跡を徳本、牛頸本堂遺跡群第 18 次調査を林潤也が担当した。
6. 遺構写真は、各調査担当者が撮影した。
7. 遺物写真は、写測エンジニアリング株式会社（牛嶋茂）が撮影した。
8. 遺構図面の作成は、大野城市教育委員会が行った。
9. 遺構図の方位は牛頸本堂遺跡群第 18 次調査は座標北、その他は磁北を表す。
10. 遺物実測図は、小畑貴子・古賀栄子・小嶋のり子・篠田千恵子・眞田萌世・津田りえ
仲村美幸・氷室優・松本友里江が作成した。
11. 製図は、小嶋が作成した。
12. 拓本は、小畑・篠田・氷室・松本が作成した。
13. 観察表は、小嶋が作成した。
14. 本書に掲載した地形図は、国土地理院発行の 1 / 25,000 地形図『福岡南部』を使用した。
15. 発掘調査で出土した遺物の分類基準は、以下の文献を参考とした。
柳田康雄 1987 「2 九州地方の弥生土器 2 高三瀨式と西新町式土器」『弥生文化の研究』 4
雄山閣
柳田康雄 1991 「2 土師器の編年 2 九州」『古墳時代の研究』 6 雄山閣
中島恒次郎 1992 「大宰府における椀形態の変遷」『中近世土器の基礎研究Ⅷ』 日本中世土器
研究会
中世土器研究会編 1995 『概説 中世の土器・陶磁器』 真陽社
太宰府市教育委員会 2000 『大宰府条坊跡 XV—陶磁器分類編一』
山本信夫 1990 「統計上の土器」『乙益重隆先生九州上代文化論集』 乙益重隆先生古稀記念論
文集刊行会
16. 本書の遺物・実測図・写真はすべて大野城市が管理・保管している。
17. 本書の執筆・編集は石川健が行った。

本文目次

I. はじめに	
1. 調査体制	1
II. 位置と環境	3
III. 村下遺跡 O 地点の調査	
1. はじめに	5
2. 調査の成果	6
(1) 調査の概要	6
(2) 遺構と遺物	7
3. まとめ	8
IV. 松ノ木遺跡	
1. はじめに	9
2. 調査の成果	10
(1) 調査の概要	10
(2) 遺構と遺物	10
3. まとめ	16
V. 牛頸本堂遺跡群第 18 次調査	
1. はじめに	17
2. 調査の成果	18
(1) 調査の概要	18
(2) 遺構と遺物	19
3. まとめ	57

挿図目次

第 1 図 周辺遺跡分布図 (S=1/25,000)	4
第 2 図 村下遺跡と調査地の位置図 (S=1/5,000)	5
第 3 図 村下遺跡 O 地点遺構配置図 (S=1/100)	7
第 4 図 ピット出土遺物実測図 (S=1/3)	8
第 5 図 松ノ木遺跡調査地の位置図 (S=1/2,000)	9

第6図	松ノ木遺跡遺構配置図 (S=1/200)	10
第7図	竪穴状遺構実測図 (S=1/60)	11
第8図	竪穴状遺構出土遺物実測図 (S=1/3)	11
第9図	周溝状遺構実測図 (S=1/60)	12
第10図	周溝状遺構出土遺物実測図 (S=1/3)	13
第11図	その他の出土遺物 (15はS=1/2、その他はS=1/3)	14
第12図	牛頸本堂遺跡群と第18次調査地点の位置 (S=1/5,000)	17
第13図	牛頸本堂遺跡群第18次調査遺構配置図 (S=1/200)	18
第14図	SC01 実測図 (S=1/60)	19
第15図	SC01・02・03 出土遺物実測図 (16・17はS=1/2、その他はS=1/3)	20
第16図	SC02 実測図 (S=1/60)	21
第17図	SC03 実測図 (S=1/60)	22
第18図	SB01 実測図 (S=1/60)	23
第19図	SB01～07 出土遺物実測図 (31・38・41はS=1/2、その他はS=1/3)	24
第20図	SB02 実測図 (S=1/60)	25
第21図	SB03 実測図 (S=1/60)	26
第22図	SB04 実測図 (S=1/60)	27
第23図	SB05 実測図 (S=1/60)	28
第24図	SB06 実測図 (S=1/60)	29
第25図	SB07 実測図 (S=1/60)	29
第26図	SD01 実測図 (S=1/100、土層図はS=1/40)	30
第27図	SD01 出土遺物実測図 (S=1/3)	31
第28図	SX01・02 実測図 (S=1/40)	31
第29図	SX03 実測図 (S=1/30)	32
第30図	SX03 出土遺物実測図 (1) (84はS=1/4、その他はS=1/3)	34
第31図	SX03 出土遺物実測図 (2) (S=1/3)	35
第32図	SX03 出土遺物実測図 (3) (S=1/3)	36
第33図	SX05 実測図 (S=1/40)	37
第34図	SX07 実測図 (S=1/30)	37
第35図	SX07・08 出土遺物実測図 (S=1/3)	38
第36図	SX09 実測図 (S=1/30)	39
第37図	SX12 実測図 (S=1/60)	39
第38図	SX12・13・15 出土遺物実測図 (S=1/3)	40
第39図	SX13・14 実測図 (S=1/60)	41
第40図	SX15 実測図 (S=1/30)	42

第41図	ピット出土遺物実測図(1)(151はS=1/1、その他はS=1/3)	43
第42図	ピット出土遺物実測図(2)(S=1/3)	46
第43図	その他の出土遺物(197はS=1/1、その他はS=1/3)	47
第44図	掘立柱建物の柱穴と柱間変異の分散図	58
第45図	土師器と黒色土器の口径・器高と高台径の分散図	59
第46図	本堂遺跡周辺における土器製作関連遺跡	61

表 目 次

表1	村下遺跡既往調査区一覧	6
表2	村下遺跡O地点出土遺物観察表	8
表3	松ノ木遺跡出土遺物観察表	15
表4	牛頸本堂遺跡群第18次調査出土遺物観察表①	48
表5	牛頸本堂遺跡群第18次調査出土遺物観察表②	49
表6	牛頸本堂遺跡群第18次調査出土遺物観察表③	50
表7	牛頸本堂遺跡群第18次調査出土遺物観察表④	51
表8	牛頸本堂遺跡群第18次調査出土遺物観察表⑤	52
表9	牛頸本堂遺跡群第18次調査出土遺物観察表⑥	53
表10	牛頸本堂遺跡群第18次調査出土遺物観察表⑦	54
表11	牛頸本堂遺跡群第18次調査出土遺物観察表⑧	55
表12	牛頸本堂遺跡群第18次調査掘立柱建物の柱穴と柱間変異	56

図 版

図版1	(1) 村下遺跡O地点北西部全景(南東から)
	(2) 村下遺跡O地点南東部全景(北西から)
	(3) 村下遺跡O地点出土遺物
図版2	(1) 松ノ木遺跡調査区北半部全景(西から)
	(2) 松ノ木遺跡調査区南半部全景(北西から)
	(3) 松ノ木遺跡竪穴状遺構完掘状況(北西から)
図版3	(1) 松ノ木遺跡周溝状遺構完掘状況(南西から)
	(2) 松ノ木遺跡出土遺物
図版4	(1) 本堂遺跡群第18次調査区全景(南西から)
	(2) 本堂遺跡群第18次調査区北半部全景(南西から)

- 図版 5 (1) 本堂遺跡群第 18 次調査 SC01 (南から)
(2) 本堂遺跡群第 18 次調査 SC02 (南西から)
- 図版 6 (1) 本堂遺跡群第 18 次調査 SC01 炭化物検出状況
(2) 本堂遺跡群第 18 次調査 SC03 炭化物検出状況
(3) 本堂遺跡群第 18 次調査 SC03 (西から)
- 図版 7 (1) 本堂遺跡群第 18 次調査 SB01 : SP159
(2) 本堂遺跡群第 18 次調査 SB01 : SP160
(3) 本堂遺跡群第 18 次調査 SB01 : SP161
(4) 本堂遺跡群第 18 次調査 SB03 : SP220
(5) 本堂遺跡群第 18 次調査 SB03 : SP224
(6) 本堂遺跡群第 18 次調査 SB03 : SP267
(7) 本堂遺跡群第 18 次調査 SP01 遺物出土状況
(8) 本堂遺跡群第 18 次調査 SP10 遺物出土状況
- 図版 8 (1) 本堂遺跡群第 18 次調査 SX03 半裁状況 (東から)
(2) 本堂遺跡群第 18 次調査 SX03 遺物出土状況 (北東から)
(3) 本堂遺跡群第 18 次調査 SX03 (南西から)
- 図版 9 (1) 本堂遺跡群第 18 次調査 SX07 粘土検出状況 (東から)
(2) 本堂遺跡群第 18 次調査 SX15 検出状況 (北西から)
(3) 本堂遺跡群第 18 次調査 SX15 土層 (北東から)
- 図版 10 本堂遺跡群第 18 次調査 出土遺物 ①
- 図版 11 本堂遺跡群第 18 次調査 出土遺物 ②
- 図版 12 本堂遺跡群第 18 次調査 出土遺物 ③

I. はじめに

本書で報告する、村下遺跡O地点調査、松ノ木遺跡、牛頸本堂遺跡群第18次調査、それぞれの調査時、および整理、報告作業を行った令和5年度の調査・整理体制は以下のとおりである。

1. 調査体制

[平成8（1996）年度]（村下遺跡O地点調査）

大野城市教育委員会

教育長	堀内 貞夫
教育部長	香野 信儀
社会教育課 課長	赤星 健彦
係長	舟山 良一
主任技師	向 直也
	徳本 洋一（調査担当）
技師	石木 秀啓
技師	丸尾 博恵（調査担当）

[平成9（1997）年度]（松ノ木遺跡調査）

大野城市教育委員会

教育長	堀内 貞夫
教育部長	香野 信儀
社会教育課 課長	赤星 健彦
文化財担当係長	舟山 良一
主任技師	向 直也
	徳本 洋一（調査担当）
	石木 秀啓
技師	丸尾 博恵
嘱託	西村 晴香

[平成18（2006）年度]（牛頸本堂遺跡群第18次調査）

大野城市教育委員会

教育長	古賀 宮太
教育部長	小嶋 健
ふるさと文化財課長	舟山 良一
文化財担当係長	中山 宏

主査等 石木 秀啓、徳本 洋一、丸尾 博恵
林 潤也（調査担当）、早瀬 賢
囑託 井上 愛子、北川 貴洋、城戸 義廣、岡田 裕之

[令和5（2023）年度]（整理・報告）

市 長 井本 宗司
地域創造部長 日野 和弘
大野城市心のふるさと館
館長 赤司 善彦
文化財担当課長 石木 秀啓
文化財担当係長 林 潤也、上田 龍児
主任主事 下川 みお
主任技師 龍 友紀、山元 瞭平
会計年度任用職員 澤田 康夫、石川 健、深町 美佳、山村 智子、尾川 絢香
清水 康彰、藤田 香
小畑 貴子、古賀 栄子、小嶋 のり子、眞田 萌世、篠田 千恵子、
津田 りえ、仲村 美幸、氷室 優、松本 友里江

Ⅱ．位置と環境

大野城市は福岡平野の南に位置し、南北に細長く中央部でくびれた形をしている。市域は東側を月隈丘陵に連なる乙金山・四王寺山、南側を牛頸山に挟まれる。また、三郡山塊・宝満山を源とする御笠川が市域中央部を北西に流れ牛頸川と合流した後、博多湾に注ぐ。この御笠川左岸の沖積平野に村下遺跡と松ノ木遺跡は位置する。一方、牛頸本堂遺跡群は牛頸山から北に派生する丘陵上に位置する。

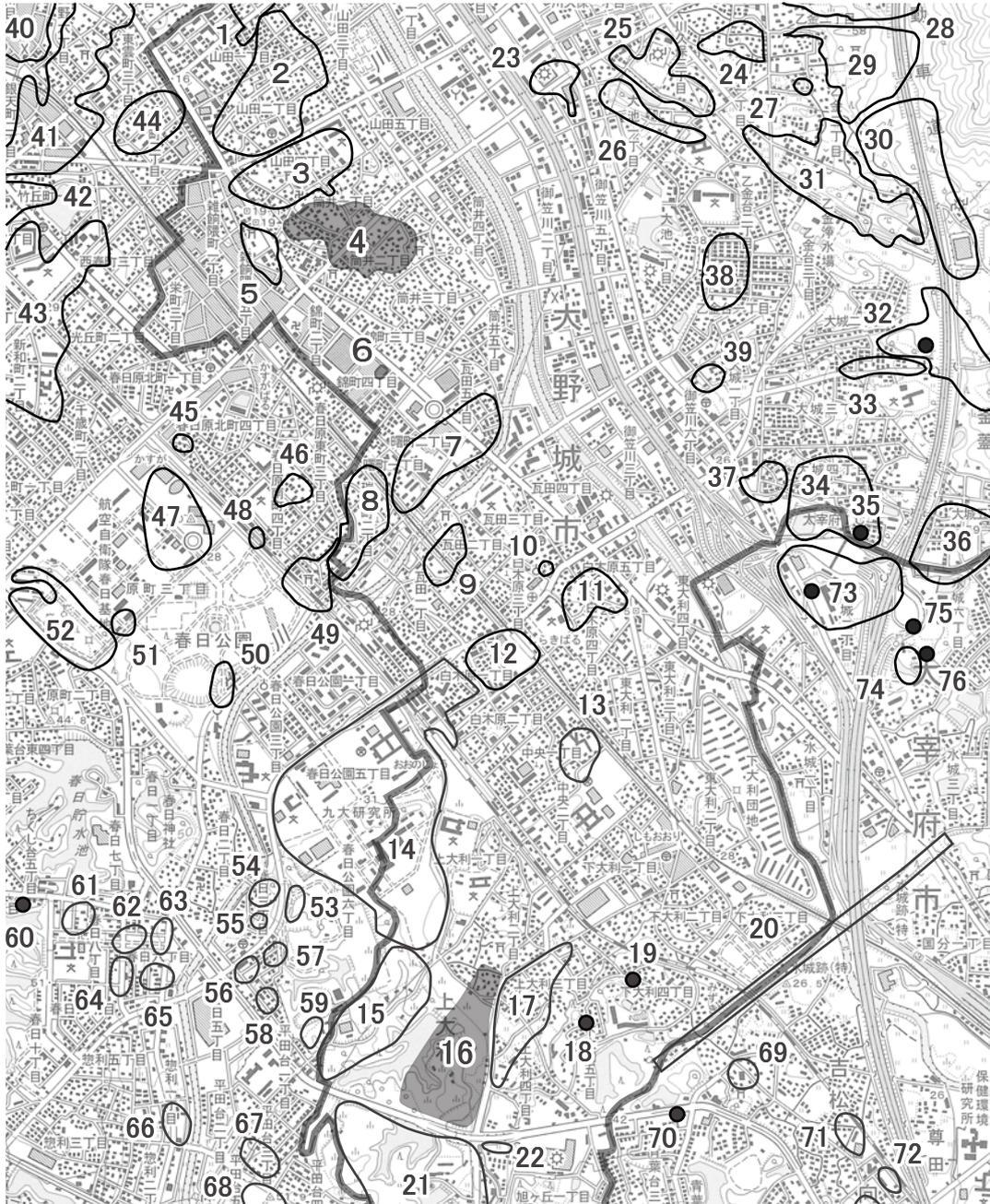
遺跡周辺の様相をみると、旧石器時代は釜蓋原遺跡・雉子ケ尾遺跡・松葉園遺跡など市北東部や出口遺跡・横峰遺跡などで遺物が確認されており、北東部の乙金山・四王寺山や南部の牛頸山からのびる丘陵地帯が主たる生活の場であったことがわかる。

縄文時代では、草創期の遺跡は市内で確認されていないが、早期には乙金山・四王寺山麓の薬師の森遺跡、雉子ケ尾遺跡、釜蓋原遺跡等で押型文土器が出土するほか、平野微高地上にも石勺遺跡が確認されている。平野部微高地上での活動の痕跡がみられ、活動範囲が徐々に広がっている。

弥生時代には市東部の御陵前ノ椽遺跡や塚口遺跡、中・寺尾遺跡で前期の甕棺墓・土坑墓・木棺墓が調査されており、市南部丘陵地でも前期後半の墓地が調査されている。集落跡は川原遺跡、仲島本間尺遺跡や薬師の森遺跡などで確認されている。前期末頃には石勺遺跡など平野部で集落遺跡が増加する。これらの遺跡は中期を通じて営まれるが、石勺遺跡や瑞穂遺跡では墓地もみられる。市東部の中・寺尾遺跡や森園遺跡でも集落と墓地が形成される。後期には市東部や平野部の遺跡で中期以降継続して集落が営まれるほか、榎町遺跡や村下遺跡など新たな集落もみられる。

古墳時代には福岡平野や那珂川流域を中心に首長墓級の前方後円墳が分布する。市域では明確な前方後円墳は確認されていないが、御陵古墳群で小円墳群が築かれる。集落は仲島遺跡や石勺遺跡、村下遺跡などの弥生時代後期以来の遺跡に加え、瑞穂遺跡、原ノ畑遺跡で確認される。中期は5世紀前半の笹原古墳の築造後、5世紀後半には古野古墳群等で群集墳の形成が始まる。集落遺跡は仲島遺跡、石勺遺跡、中・寺尾遺跡、森園遺跡等で確認されている。6世紀後半以降は群集墳が急増するが、市域でも月隈丘陵から乙金山山麓に善一田古墳群、王城山古墳群などが築造される。集落は仲島遺跡の他、薬師の森遺跡などで確認される。このうち仲島遺跡は、集落規模が大きく多数の掘立柱建物が確認されており拠点的な集落と考えられる。6世紀中頃以降牛頸窯跡群で須恵器生産が行われるが、乙金山・四王寺山麓でも須恵器生産が始まり、薬師の森遺跡では鉄器や須恵器の生産に関わる集落が形成される。その後7世紀中頃から後半にかけて市域で遺構や遺物の減少がみられる。

飛鳥・奈良時代に入ると、大宰府が成立し水城東西両門から官道がのびるが、井相田C遺跡、谷川遺跡などで官道側溝、池ノ上遺跡・御供田遺跡で盛土状遺構や土橋状遺構などが確認されている。また、市中央部畑ノ原遺跡等で集落が営まれる。9世紀になると周辺では集落が減少し、仲島遺跡も含め御笠川周辺の集落の多くがこの頃に廃絶する。また牛頸窯跡群も生産が衰退・終了に向かう。その後、本堂遺跡群や上園遺跡周辺で10・11世紀代に集落形成が活発になり、宝松遺跡、御笠の森遺跡などで11世紀以降集落が形成される。



大野城市

- 1 川原遺跡
- 2 御笠の森遺跡
- 3 宝松遺跡
- 4 村下遺跡
- 5 雑餉隈遺跡
- 6 松ノ木遺跡
- 7 石勺遺跡
- 8 瑞穂遺跡
- 9 国分田遺跡
- 10 古賀遺跡
- 11 原ノ畑遺跡
- 12 後原遺跡
- 13 ハザコ遺跡
- 14 御供田遺跡
- 15 梅頭遺跡群
- 16 本堂遺跡群
- 17 上園遺跡
- 18 出口窯跡・遺跡
- 19 谷川遺跡
- 20 水城跡

- 21 野添遺跡群
- 22 上大利小水城跡
- 23 ヒケシマ遺跡
- 24 松葉園遺跡
- 25 森園遺跡
- 26 中・寺尾遺跡
- 27 花園遺跡
- 28 王城山遺跡・古墳群
- 29 古野遺跡・古墳群
- 30 原口遺跡・古墳群
- 31 薬師の森遺跡
- 32 雉子ヶ尾遺跡
- 33 雉子ヶ尾古墳
- 34 釜蓋原古墳群
- 35 笹原古墳
- 36 釜蓋原遺跡
- 37 金山遺跡
- 38 银山遺跡
- 39 原門遺跡

福岡市

- 40 麦野A遺跡
- 41 麦野C遺跡
- 42 南八幡遺跡群
- 43 雑餉隈遺跡群
- 44 井相田B遺跡群

春日市

- 45 駿河D遺跡
- 46 駿河E遺跡
- 47 駿河A遺跡
- 48 駿河B遺跡
- 49 原ノ口遺跡
- 50 先ノ原春日公園内遺跡
- 51 先ノ原遺跡
- 52 立石遺跡
- 53 向谷遺跡
- 54 向谷北遺跡
- 55 向谷西遺跡
- 56 向谷南遺跡
- 57 向谷古墳群

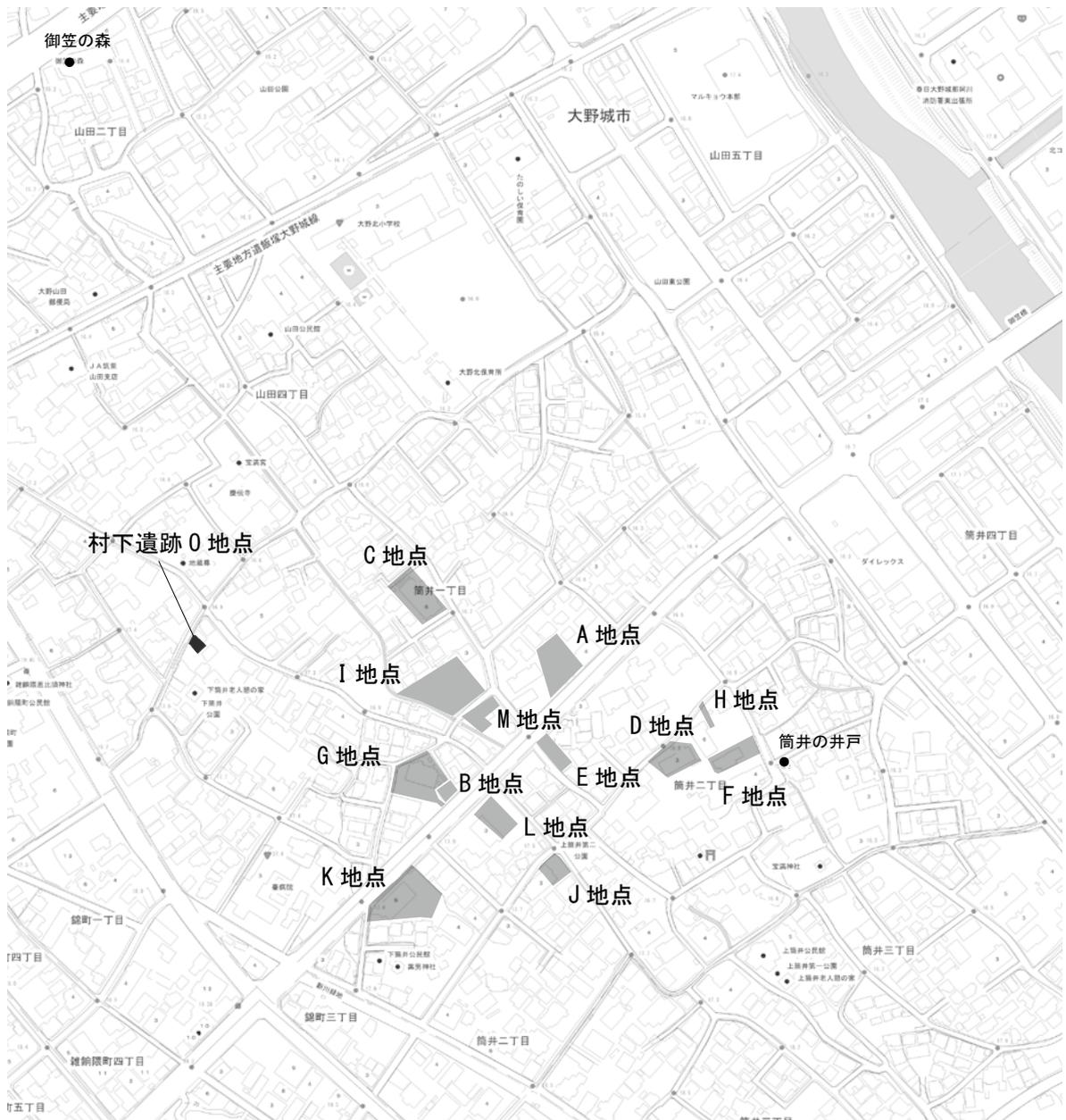
- 58 春日平田北遺跡
- 59 春日平田遺跡
- 60 大牟田窯跡
- 61 惣利窯跡群
- 62 惣利遺跡
- 63 惣利北遺跡
- 64 惣利西遺跡
- 65 惣利東遺跡
- 66 門入遺跡
- 67 春日平田遺跡群
- 68 春日平田西遺跡
- 太宰府市**
- 69 島本遺跡
- 70 神ノ前窯跡群
- 71 原口遺跡
- 72 久郎利遺跡
- 73 成屋形古墳群・遺跡群
- 74 裏ノ田遺跡
- 75 裏ノ田窯跡
- 76 裏ノ田古墳

第1図 周辺遺跡分布図 (S=1/25,000)

Ⅲ. 村下遺跡 O 地点の調査

1. はじめに

以下で報告する村下遺跡 O 地点は、大野城市筒井一丁目および二丁目に広がる村下遺跡の西端部に位置する（第 2 図）。村下遺跡は御笠川西岸の沖積平野上に位置していたと考えられるが、調査地周辺は宅地化が進んでおり、細かな地形は不明な部分が多い。これまで本遺跡では、昭和 62 年に行われた A 地点の調査以降、平成 29 年の M 地点の調査までの 13 次にわたる調査が行われている（表 1）。



第 2 図 村下遺跡と調査地の位置図 (S=1/5, 000)

表 1 村下遺跡既往調査区一覧

地点名	調査回数	調査年月日	報告書作成刊行
A地点	1	1987 (S62) 4～5	大野城市文化財調査報告書第88集
B地点	2	1990 (H2) 7	大野城市文化財調査報告書第88集
C地点	3	1992 (H4) 7～9	大野城市文化財調査報告書第91集
D地点	4	1995 (H7) 4～5	未刊・今後刊行予定
E地点	5	1996 (H8) 5	大野城市文化財調査報告書第172集
F地点	6	2000 (H12) 11～2001 (H13) 1	未刊・今後刊行予定
G地点	7	2001 (H13) 7～8	大野城市文化財調査報告書第172集
H地点	8	2002 (H14) 4～6	未刊・今後刊行予定
I地点	9	2005 (H17) 1～2	未刊・今後刊行予定
J地点	10	2008 (H20) 12	未刊・今後刊行予定
K地点	11	2014 (H26) 4～5	大野城市文化財調査報告書第141集
L地点	12	2016 (H28) 9～10	大野城市文化財調査報告書第165集
M地点	13	2016 (H28) 12～2017 (H29) 3	大野城市文化財調査報告書第161集
O地点	市原遺跡 として調査	1997 (H9) 3	本報告

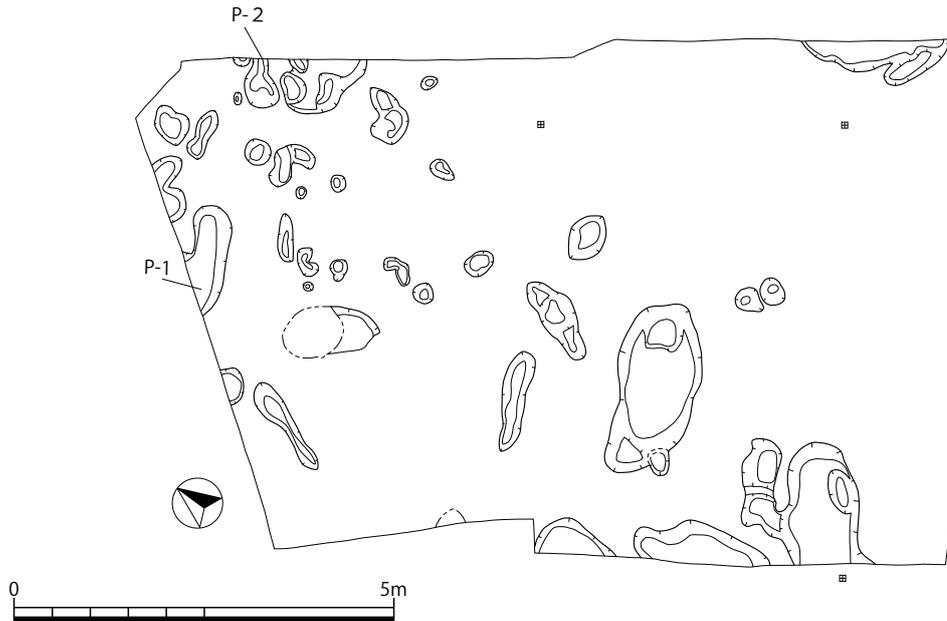
なお、今回報告を行う調査地の名称について、若干説明をしておく。本調査地は所在地の小字名にもとづき市原遺跡として発掘調査が行われたが、村下遺跡の調査が進むにしたがい村下遺跡の範囲と市原遺跡が重複する形になった。以下では、調査地について混乱を避けるために村下遺跡の一部として報告する。ただし、調査時の各種記録類などは市原遺跡となっている。また、今回報告の調査後、村下遺跡では既にF地点～M地点の調査が行われており、N地点の調査も予定されている。このような事情を勘案し、本調査地の名称は村下遺跡O地点とした。調査で出土した遺物はパンケース1箱であった。

2. 調査の成果

(1) 調査の概要 (第3図)

村下遺跡O地点は、大野城市筒井1丁目770-4、5、8に所在する。共同住宅の建設が計画され、平成2年8月3日に試掘を行った結果、遺構が検出された。この結果に基づき、事業地311㎡のうち108㎡について発掘調査を実施した。

発掘調査地は、福岡平野の平坦地にあたり、御笠川西岸の沖積平野上に位置する。調査は平成9年3月3日～3月20日の間に実施した。表土の下に旧耕作土(20cm)、黒色土(20～30cm)が堆積しており、その下位、現地表から-80～-90cmに灰白色砂層を確認した。この灰白色砂層を遺構検出面として調査した結果、不整形のピットが多数確認された。いずれも削平を受けており、深さ10cmほどの浅いものであったが、縄文時代のものと思われる土器片、古墳時代の須恵器や江戸時代以降の陶磁器片などが出土した。



第3図 村下遺跡O地点遺構配置図 (S=1/100)

(2) 遺構と遺物

調査地の北東から北西部にかけて不整形のピットが多数確認された。一方、調査区南東部は比較的遺構の密度が希薄である。以下遺物の出土した遺構を中心に報告する。

1) ピット

P-1 (第3図)

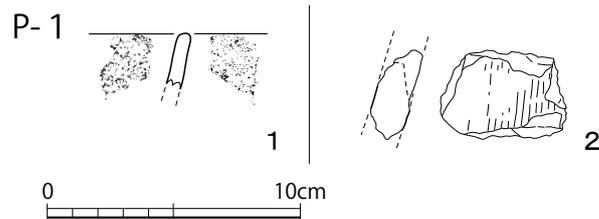
調査範囲の北西部に位置し、一部調査範囲外に広がる。平面プランは略東西方向に長軸をとる不整形を呈し、調査区北壁沿いはやや北側に膨らむ。調査区北壁から東端部までは112cmを測り、最大幅は調査区北壁沿いで88cmを測る。床面は、遺構検出面からの深さが最大で12cmである。調査区北壁側に向かってやや低くなる。出土遺物は弥生土器、縄文土器の小片が出土しているが、そのほとんどは細片で図化は不能であった。

出土遺物 (第4図)

縄文土器 (1) 縄文土器の口縁部片と思われるものであるが、器面の摩耗が著しくかつ細片のため詳細は不明である。

P-2 (第3図、図版1)

調査区北西部に位置し、一部調査区の東側に延びる。P-1 から東側に約1.5m離れた位置である。平面形は西側がやや不整形に膨らみ、東側が幅20cmで東側調査区外に延びる。西側の不整形に膨らむ部分の最大幅は北東-南西方向に60cm、北西-南東方向40cmを測る。床面は遺構検出面から8cm程の深さを測り、不整形に膨らむ西側部分の中央部がやや低くなる。出土遺物には石炭 (図版1)、器面に粘土紐を張り付けた土器片が出土しているが、小片のため図化はできなかった。



第4図 ピット出土遺物実測図 (S=1/3)

2) その他の出土遺物 (第4図、図版1)

上記のピットから出土した遺物の他に、包含層からは少数の遺物が出土している。以下に示す土器片以外に、須恵器・陶磁器の小片が出土している。

出土遺物

弥生土器 (2) 弥生土器の胴部片と思われるもので、外面にハケメがわずかに残る。器面の摩耗が激しく詳細は不明である。

表2 村下遺跡O地点出土遺物観察表

遺物番号	種類	器種	出土地点	法量 (cm・g) ①口径②器高③底径④高台径 ⑤最大径※(復元値)〈残存値〉	形態・技法・文様の特徴	A:胎土 B:焼成 C:色調			備考
						A	B	C	
1	縄文土器?	不明	P-1	②(2.2)	内外面調整不明	A:1mm以下の白色・褐色砂粒をやや多く、雲母を含む B:良好 C:内7.5YR 5/4 に近い褐色～7.5YR4/2 灰褐色 外7.5YR6/4 に近い褐色～7.5YR5/1 褐灰色			
2	弥生土器	不明	P-1	②(3.5)	外面ハケメ 内面調整不良	A:2mm以下の白色砂粒を多く、長石、石英を含む B:良好 C:内外2.5Y 7/1 灰白色			

3. まとめ

今回報告した村下遺跡O地点では、不整形のピットが複数確認されたが、いずれも後世の削平を大きく受けており、遺構の残存状況は良くなかった。出土した遺物も、資料化するには細片がほとんどで、遺構の時期を確定できる状況にはなかった。

一方で、O地点はこれまで継続的に調査されてきた村下遺跡の西端に位置しており、また報告することはできなかったが、近世以降の磁器細片や石炭などが出土している。今後、周辺の調査により村下遺跡の広がりへの把握が進むとともに、遺跡西側に近接する雑餉隈遺跡との関係や街道との関連性なども明らかになることを期待したい。

IV. 松ノ木遺跡の調査

1. はじめに

以下で報告する松ノ木遺跡は、大野城市錦町四丁目に位置する（第5図）。遺跡は御笠川西岸に位置しているが、周辺は市街地化が既に進んでおり細かな地形は不明な部分が多い。

調査対象地は商業施設の立体駐車場建設が予定されていることから、平成9年10月に試掘を行った。その結果、遺構が確認されたため、本調査を行うこととなった。調査で出土した遺物はパンケース1箱であった。



第5図 松ノ木遺跡調査地の位置図 (S=1/2,000)

2. 調査の成果

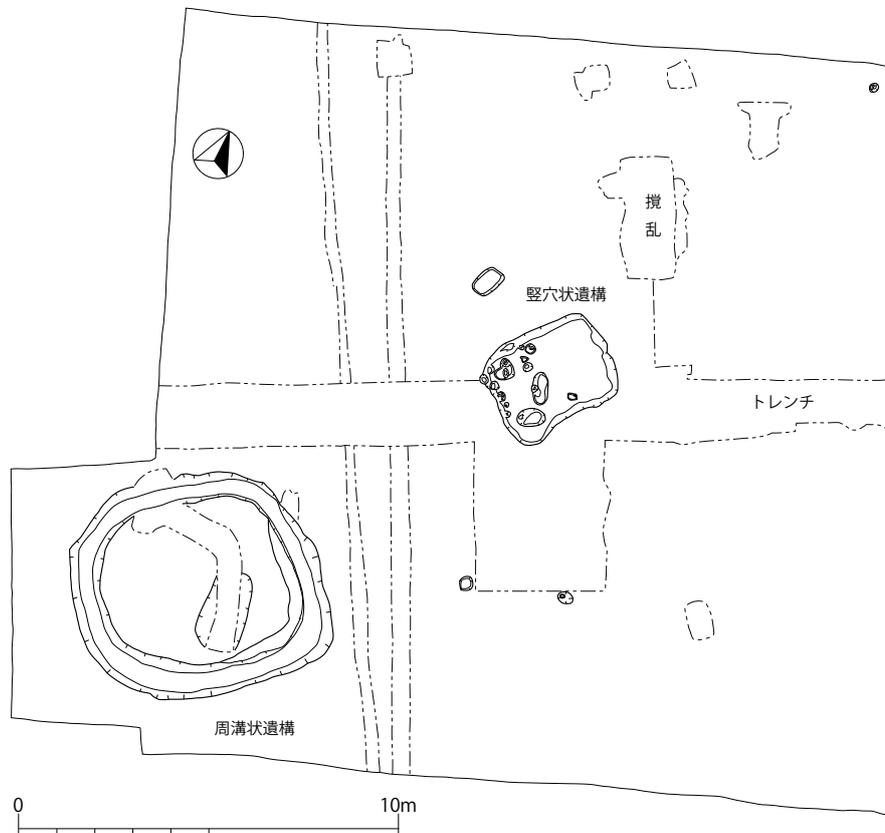
(1) 調査の概要（第6図）

松ノ木遺跡は、大野城市錦町四丁目5-1、5-2に所在する。上記のように商業施設の立体駐車場の建設が計画されたため、平成9年10月1日に試掘を行った。その結果、遺構が検出されたため、事業対象地10,559㎡のうち遺構が確認された範囲とその周辺415㎡について発掘調査を実施した。調査地現地表面の標高は20.6mである。

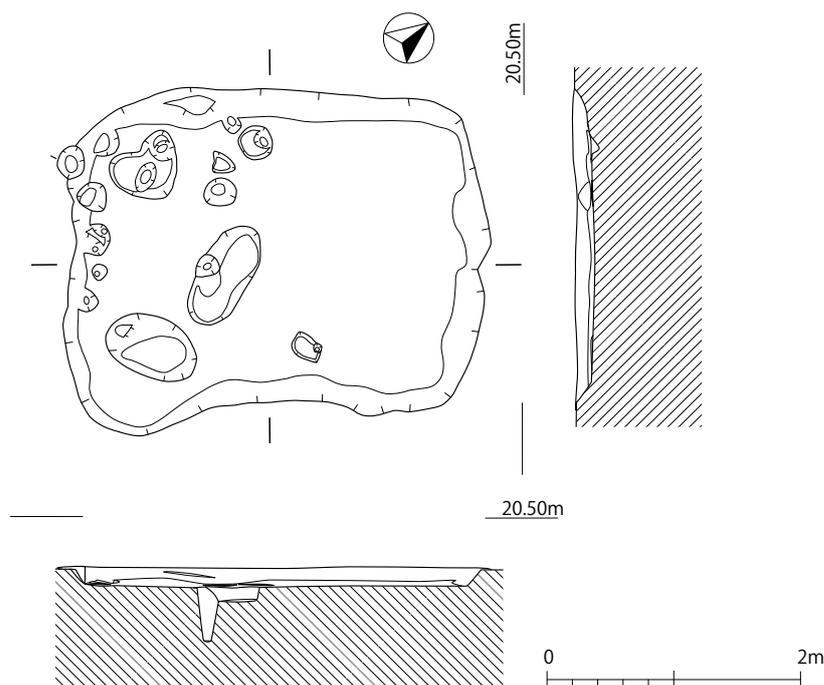
発掘調査地は、御笠川西岸の沖積平野上に位置する。調査は、平成10年2月4日～2月19日の間に実施した。その結果、宅地造成による削平と攪乱を受けていたが、調査区中央部で竪穴状遺構、調査区南隅で周溝状遺構をそれぞれ1基確認した。周溝状遺構からは弥生土器が出土した。竪穴状遺構からは遺物量は少ないが、土師器が出土している。

(2) 遺構と遺物

調査地の中央部で竪穴状遺構が確認された。また、調査区南隅で円形に溝がめぐる周溝状遺構を検出した。その他にも竪穴状遺構の北西側や南側、あるいは調査区北東隅でピットや土坑状の遺構が確認されたが出土遺物はなかった。以下、遺物の出土した竪穴状遺構と周溝状遺構を中心に報告する。



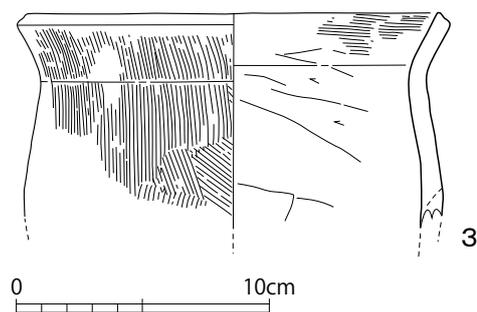
第6図 松ノ木遺跡遺構配置図 (S=1/200)



第7図 豎穴状遺構実測図 (S=1/60)

1) 豎穴状遺構 (第7図、図版2)

調査範囲の略中央部に位置する。平面プランは北東—南西方向に長軸をとり、東側長辺の中央部がややくぼんだ隅丸方形を呈する。長軸方向は最大で3.4m、短軸方向は2.7mを測る。床面はほぼ平坦で、検出面からの深さは最大で16cmを測る。また、遺構の南側壁面を中心として、遺構の南隅にピットが集中して認められる。しかし、これらのピットの分布には規則性が見られず、柱穴であるかどうかは不明である。以下で報告する資料以外に遺物は出土していない。



第8図 豎穴状遺構出土遺物実測図 (S=1/3)

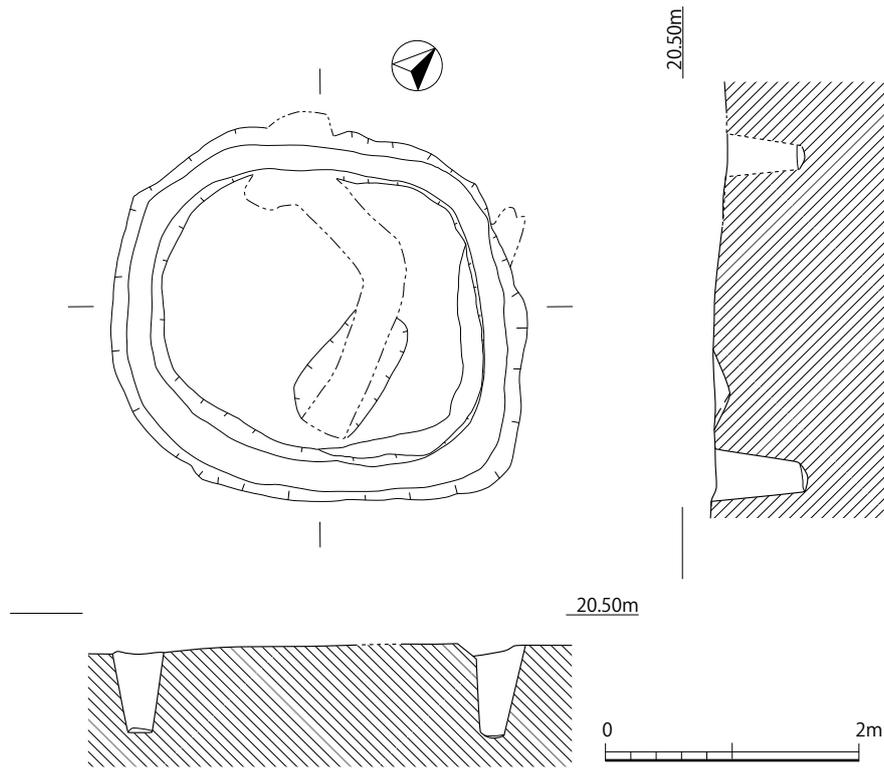
出土遺物 (第8図、図版3)

土師器

甕 (3) 口縁部から胴部にかけての破片である。胴部からゆるく屈曲し、口縁部が外反する。外面は縦方向のハケメで胴部最大径付近は不定方向のハケメである。内面はケズリであるが、口縁部下位は横方向のハケメである。

2) 周溝状遺構 (第9図、図版3)

調査区の南隅に位置し、やや角張った円形の溝である。周溝内北西部から南東部にかけて後世の攪乱がL字状に認められるが、それ以外にピットなどの遺構はみられない。北西—南東方向で2.9m、北東—南西方向で3.3mを測る。溝の深さは南東部で最も残りが良く遺構検出面から77cm程、遺構の北西部で58cm程の深さを測る。溝の底面は中央部が最も深く、溝壁面に向かって緩や



第9図 周溝状遺構実測図 (S=1/60)

かなカーブを描く。

出土遺物 (第10図、図版3)

弥生土器

鉢 (4) 脚付の鉢で、脚部は大半を欠損する。頸部屈曲部から口縁部にかけてやや湾曲する。頸部には斜行する丁寧な磨きを施す。

壺 (5) 二重口縁壺で、口縁端部を欠損するが胴部まで残存する。二重口縁部の屈曲は緩く稜をなし、内面は強いナデである。頸部内面に一部斜行する工具痕が残る。

2) その他の出土遺物 (第11図、図版3)

上記の遺構から出土した遺物の他に、包含層からも少数の遺物が出土している。以下に示す遺物以外に、黒曜石の石核片や表面の摩耗した円礫などが出土している。また、出土地が不明であるが、弥生土器の器台端部片、安山岩の剥片なども出土している。

包含層出土遺物

土師器

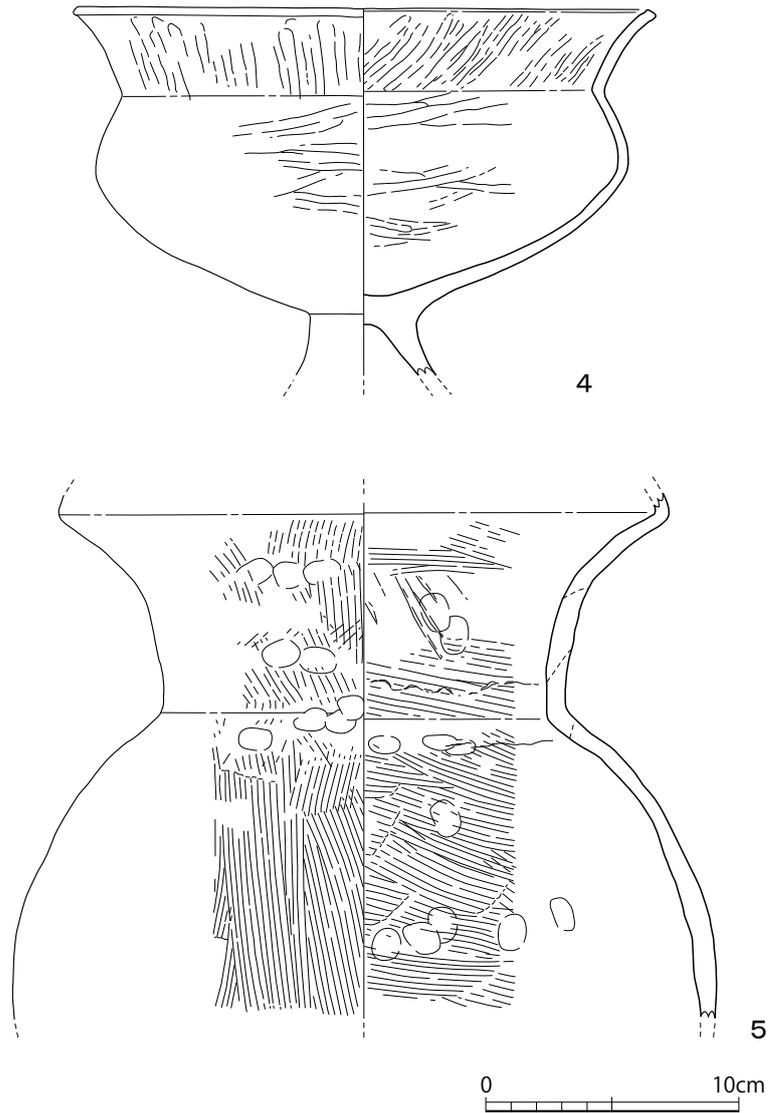
皿 (6) 底部片で、糸切り痕が残る。底径は7.2cmに復元できる。

瓦質土器

鉢 (7) 口縁部片である。内面は不定方向のハケメで、口縁部外面はハケメの後ナデである。

磁器

椀 (8) 青磁椀の底部片である。高台内部は削りが浅く底部は肉厚である。高台部畳付けとその内



第 10 図 周溝状遺構出土遺物実測図 (S=1/3)

側は露胎で、底部内面中央に花文を有する。龍泉窯系青磁碗 I 類である。

石製品 (9) 敲石ないしは磨石である。縁辺部が複数箇所敲打によって剥離している。表面はなめらかである。

出土遺構不明遺物

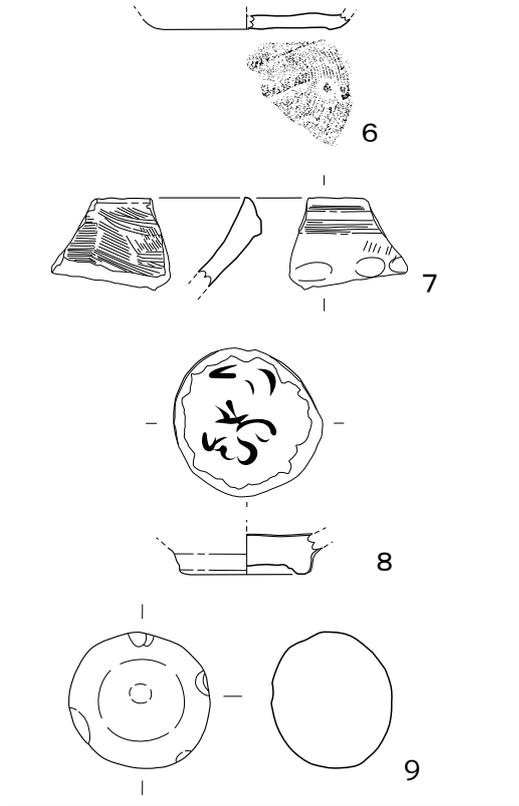
弥生土器

甕 (10・11) いずれも「く」字形に口縁部が屈曲する甕である。10 は口縁部のみの破片で、口縁部内・外面はナデ、口縁部下位の内面はハケメである。11 は口縁部から胴部下位まで残る。口縁端部がわずかにつまみ上げたような形を呈する。屈曲部外面は稜を形成する。口縁部外面と胴部下半に煤の付着がみられる。

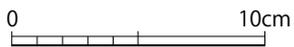
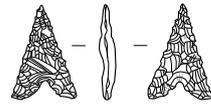
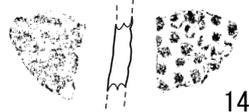
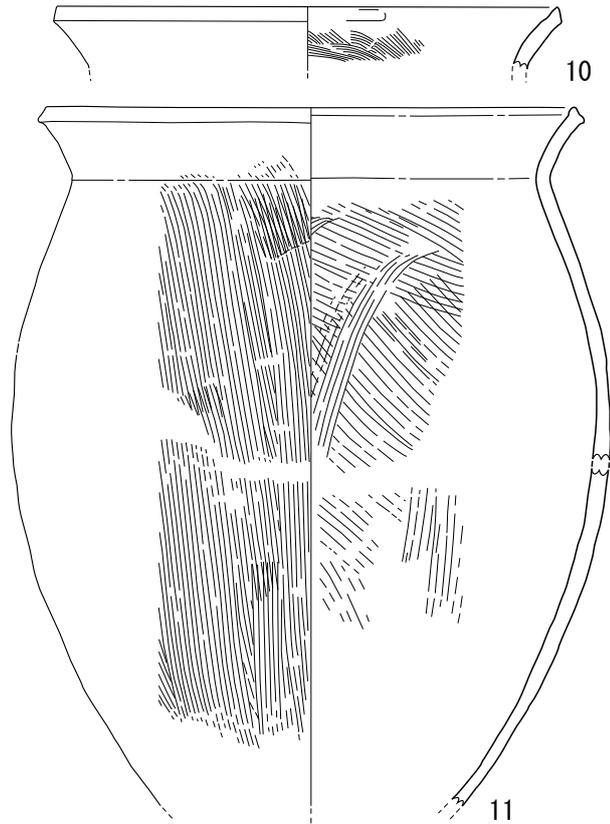
器台 (12) 12 は器台の裾部であろう。内面には横方向のハケメ、外面は縦方向のハケメで指頭圧痕が残る。

ミニチュア土器 (13) 底部片で器形は不明である。底面はナデ、内面は指オサエの後ナデで仕上げる。

検出面



出土遺構等不明遺物



第11図 その他の出土遺物（15はS=1/2、その他はS=1/3）

底径は2.6cmである。

縄文土器

鉢（14）楕円形押型文土器の小片で、内面はナデである。焼成は良好である。

石製品

石鏃（15）黒曜石製の石鏃である。基部は凹基。

表3 松ノ木遺跡出土遺物観察表

遺物番号	種類	器種	出土地点	法量(cm・g)		形態・技法・文様の特徴	A:胎土 B:焼成 C:色調			備考
				①口径②器高③底径④高台径⑤最大径※(復元値)〈残存値〉						
3	土師器	甕	竪穴状遺構	①(17.1) ②(8.55)		口縁部外面～体部外面ハケメ 体部内面ケズリ 口縁部内面ヨコハケ	A:3mm以下の白色砂粒、長石、石英、雲母を含む B:良好 C:内外5YR 6/8 橙色			
4	弥生土器	脚付鉢	周溝状遺構	①23.0 ②(14.6) ⑤21.0 頸部径19.1		胴部内外面ミガキ 口縁部内外面ミガキ 脚基部内外面調整不明	A:2mm以下の白色砂粒、長石、石英、雲母を含む B:良好 C:内7.5YR 6/6 橙色 外5YR6/6 橙色～5YR2/1 黒褐色		外面黒斑	
5	弥生土器	二重口縁壺	周溝状遺構	②(20.7) ⑤(27.8) 屈曲部径(24.1) 頸部径(16.0)		内外面ハケメ一部指オサエ	A:3mm以下の白色砂粒、長石、石英、雲母を含む B:良好 C:内7.5YR 7/3 にぶい 橙色 外7.5YR6/2 灰褐色～7.5YR2/1 黒色		外面黒斑	
6	土師器	皿	検出面	②(1.1) ③(7.2)		底部外面糸切り 他はナデ 底部外面板状圧痕あり	A:微細な白色砂粒、雲母を含む B:良好 C:内10YR6/3 にぶい黄橙色 外10YR 6/2 灰黄褐色			
7	瓦質土器	鉢	検出面	②(3.7)		内面～口縁部外面ハケメ 外面指オサエ	A:微細な白色砂粒、2mm以下の石英を含む B:良好 C:内N5/ 灰色 外10YR6/2 灰黄褐色～10YR5/1 褐灰色			
8	青磁	椀	検出面	②(1.6) ③(5.2)		内面～高台部外面施釉 高台部内面ナデ 見込み模様あり	A:精良 B:良好 C:胎土N8/ 灰白色 外10Y 5/2 オリーブ灰色		龍泉窯系青磁 椀 I 類	
9	石製品	敲石/磨石	検出面	全長5.1 幅5.35 厚さ4.9 重さ197.6		表面なめらか				
10	弥生土器	甕	不明	①(20.0) ②(2.5)		口縁部外面ヨコナデ 口縁部内面ハケメ	A:3mm以下の白色砂粒、石英を含む B:良好 C:内外7.5YR 7/4 にぶい 橙色			
11	弥生土器	甕	不明	①(21.5) ②(27.8) ⑤(23.55) 頸部径(18.8)		体部内外面ハケメ 口縁部内外面ヨコナデ	A:1mm以下の白色砂粒、長石、石英、雲母を含む B:良好 C:内面7.5YR7/3 にぶい 橙色～7.5YR3/1 黒褐色 外7.5YR 7/4 にぶい 橙色～7.5YR1.7/1 黒色		内面下位、外面煤付着	
12	弥生土器	器台	不明	②(2.6)		口縁部端部ヨコナデ 他はハケメ	A:2mm以下の白色砂粒、石英を含む B:良好 C:内外2.5YR 6/8 橙色			
13	弥生土器	ミニチュア土器	不明	②(1.7) ③2.6		ナデ成形 内面指オサエ	A:2mm以下の白色砂粒、長石をやや多く含む B:良好 C:内5YR6/6 橙色 外7.5YR 7/4 にぶい 橙色			
14	縄文土器	鉢	不明	②(2.95)		外面押し型文	A:微細な白色砂粒、石英、角閃石、雲母を含む B:良好 C:内外7.5YR 6/3 にぶい 褐色			
15	石製品	石鏃	不明	全長2.5 幅1.7 最大厚0.4 重さ1.0					黒曜石製	

3. まとめ

松ノ木遺跡の調査では、竪穴状遺構と周溝状遺構が確認された。これら遺構の時期については以下のとおりである。

竪穴状遺構：土師器の甕が出土した。1点のみの出土であるが、古墳時代後期から古代の遺構と考えることができるであろう。

周溝状遺構：弥生時代の脚付鉢や二重口縁壺が出土している。二重口縁壺の口縁部屈曲部はやや緩やかではあるが屈曲部を形成する。また、頸部がやや太く、胴部から屈曲してやや外傾気味に頸部がつく。脚付鉢は深さのある杯部に外反する口縁部がつく。このような器形は、柳田の後期4様式の高杯として比定されている三雲遺跡出土の脚付鉢に類似する。二重口縁壺は柳田の分類によれば後期3様式の高三瀧式と下大隈式の移行期的な時期に比定できる。そのため、脚付鉢がやや新しいと考えられる。よって、周溝状遺構の時期は後期後半のものと考えよう。

周溝状遺構は、近隣の遺跡では村下遺跡L地点で確認されている（藤川他 2018）。この周溝状遺構の最下層からは後期の土器が出土しており、中層から上層にかけては弥生時代終末期の土器が確認されている。そのため、終末期まで溝が機能していたものと考えられている。松ノ木遺跡で確認された周溝状遺構については、上記のように後期後半ごろの時期と考えることができ、時期的にも村下遺跡L地点の遺構の使用期間と近いものといえる。この種の遺構はその性格を含め不明な点が多い。今後の類例の増加に期待したい。

また、包含層から出土した遺物には、龍泉窯系青磁碗や糸切り底の土師器皿、瓦質土器の鉢など、12世紀中頃以降の遺物が含まれる。平安時代末以降においても本遺跡が生活の場であったものと考えられる。さらに、残念ながら出土した遺構などについては不明であるが、弥生時代後期の遺物に加え、押型文土器や黒曜石製石鏃などが出土している。包含層出土の敲石あるいは磨石なども押型文土器と同じ縄文時代早期にさかのぼる遺物である可能性が高い。縄文時代早期の遺物が確認されている近隣の遺跡としては、本遺跡の南約400mに位置する石勺遺跡がある。牛頸川や御笠川によって形成された沖積地の微高地上が縄文時代早期の集団の活動の場であったことを知るうえで貴重な成果といえるであろう。

【文献】

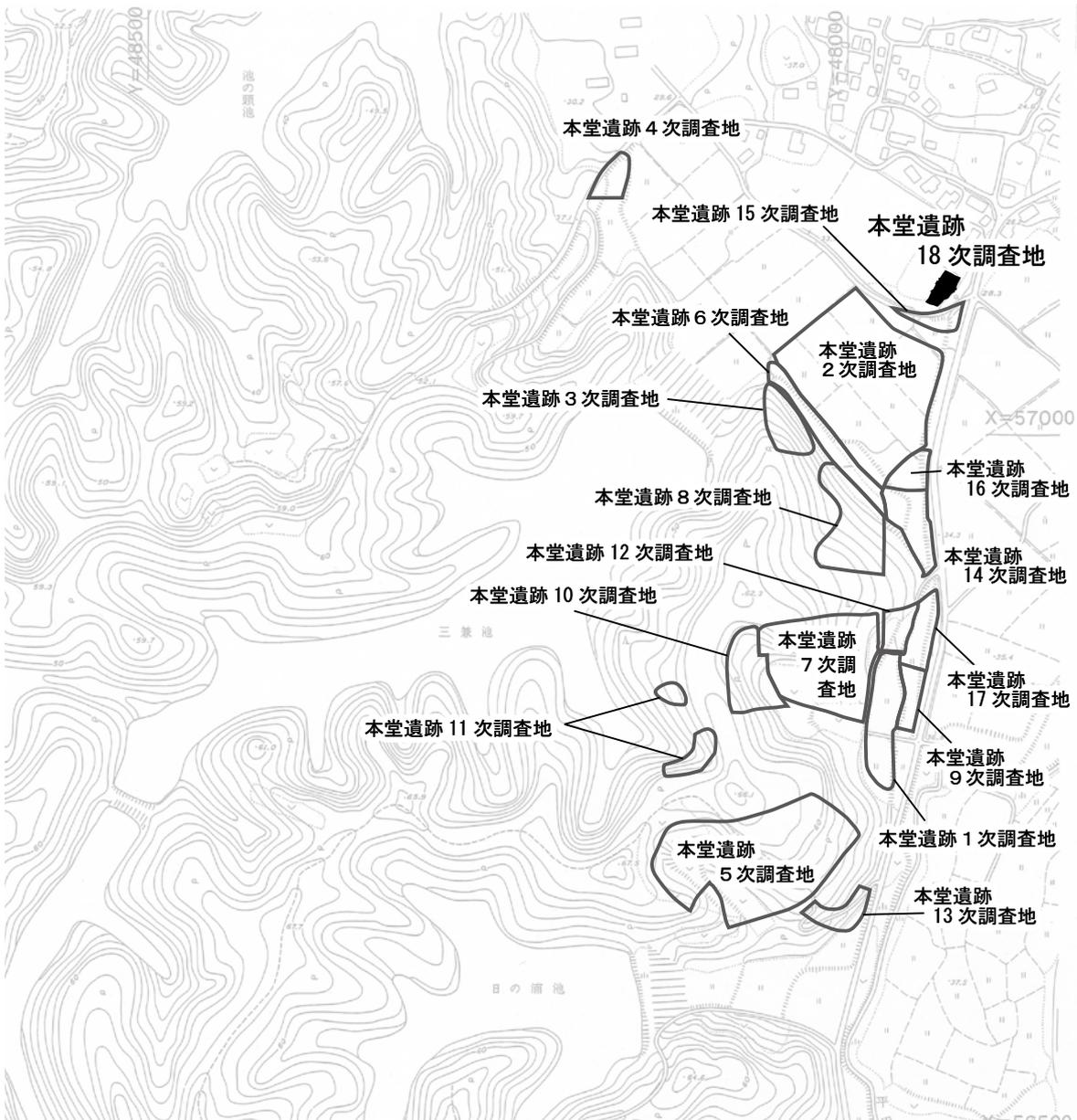
藤川貴久・柴田剛・澤田康夫 2018 『村下遺跡4－L地点の調査－（大野城市文化財調査報告書第165集）』大野城市教育委員会

V. 牛頸本堂遺跡群第 18 次調査

1. はじめに

牛頸本堂遺跡群は、大野城市大字上大利から上大利 2 丁目に広がる遺跡である。本遺跡群はこれまで、上大利北土地区画整理事業に伴って 17 回の調査が行われており（第 12 図）、旧石器時代から鎌倉時代までの複合遺跡であることが明らかとなっている。

第 18 次調査は、対象地での共同住宅の建設が予定されたことにより平成 18 年 12 月 11 日に試掘調査を行った。その結果を踏まえ、遺跡が見つかった範囲の中で建物建設予定部分のみ発掘調査を実施した。調査で出土した遺物はパンケースで約 8 箱であった。



第 12 図 牛頸本堂遺跡群と第 18 次調査地点の位置 (S=1/5, 000)

ン2基、隅丸方形プラン1基である。いずれも出土した遺物は少ない。掘立柱建物跡は、1間×2間を基調とする。柱穴のサイズが大きく二分でき、径60～100cmの比較的大きな一群で構成される建物と40cm以下の径の柱穴で構成される建物に区分できる。土坑は15基検出されたが、そのうちSX03からは多量の黒色土器碗と土師器小皿が出土しており、SX07やSX15からは多量の粘土が検出された。また、調査地内南側の攪乱部分以外と調査地北半部において高い密度でピットを検出した。

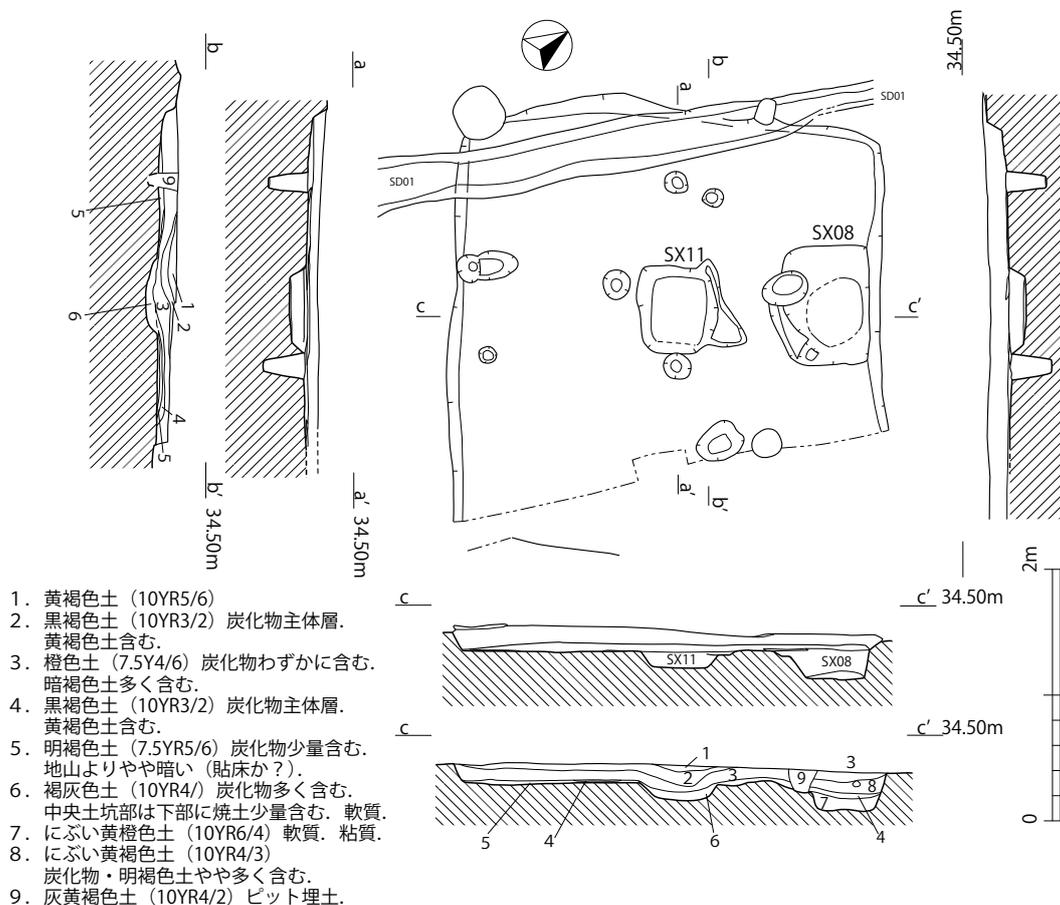
(2) 遺構と遺物

調査地の北半部で2基、中央部で1基の竪穴状遺構が確認された。また、調査区中央部から北半部で掘立柱建物が確認された。その他にも調査区中央部から北半部を中心にピットが多数確認されている。以下、遺物の出土した遺構を中心に報告する。

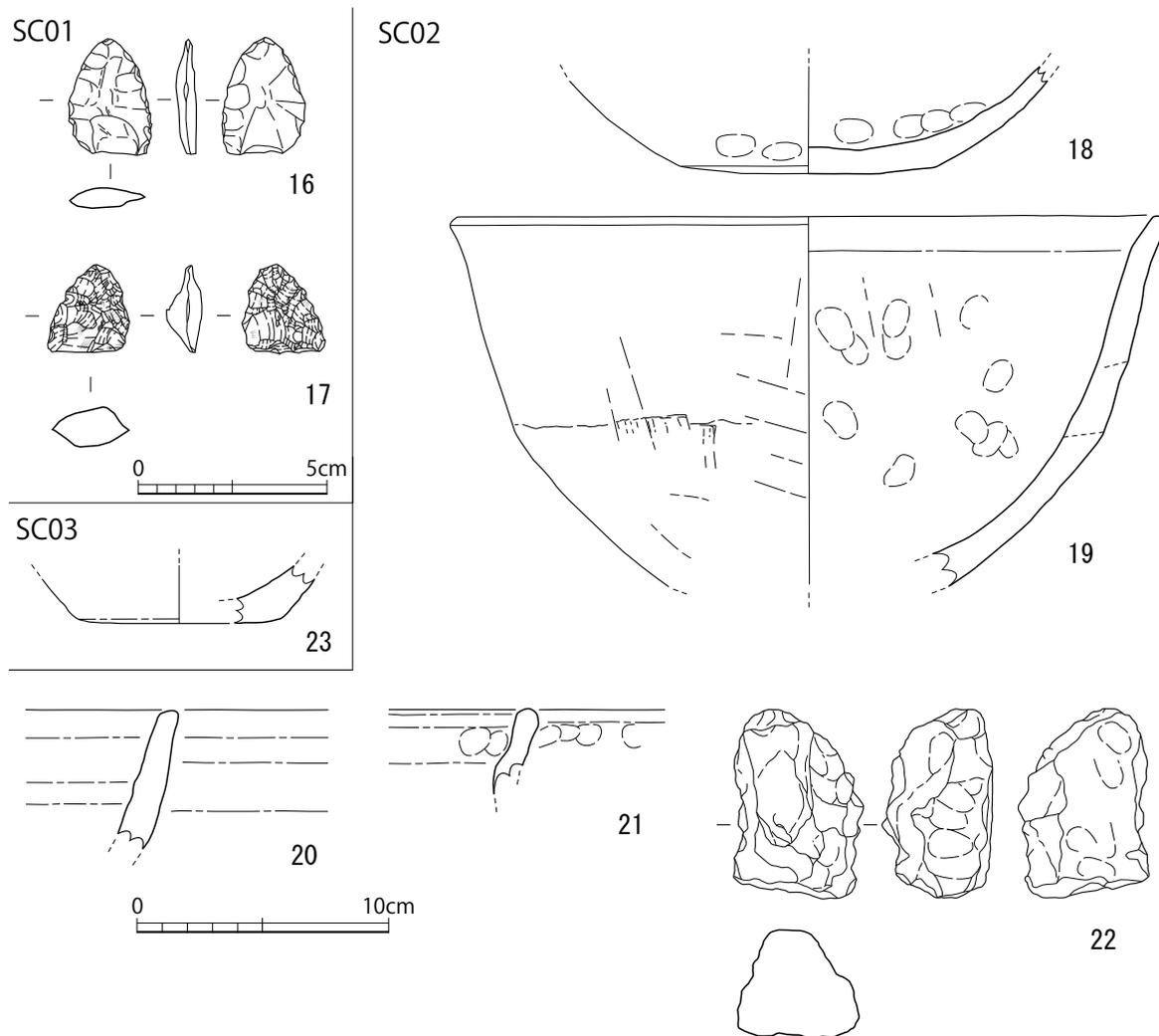
1) 竪穴状遺構

SC01 (第14図、図版5・6)

調査範囲の北西部に位置する。遺構の東側は攪乱により削平されており、西側は一部SD01によりきられている。平面プランは、遺構東部が攪乱で消失しているため確定はできないものの、略北西-南東方向に長軸をとる方形プランを呈するものと推定される。長軸方向は残存部で最大3.4m、短軸方向も3.4mを測る。床面はほぼ平坦で、検出面からの深さは最大で21cmを測る。



第14図 SC01 実測図 (S=1/60)



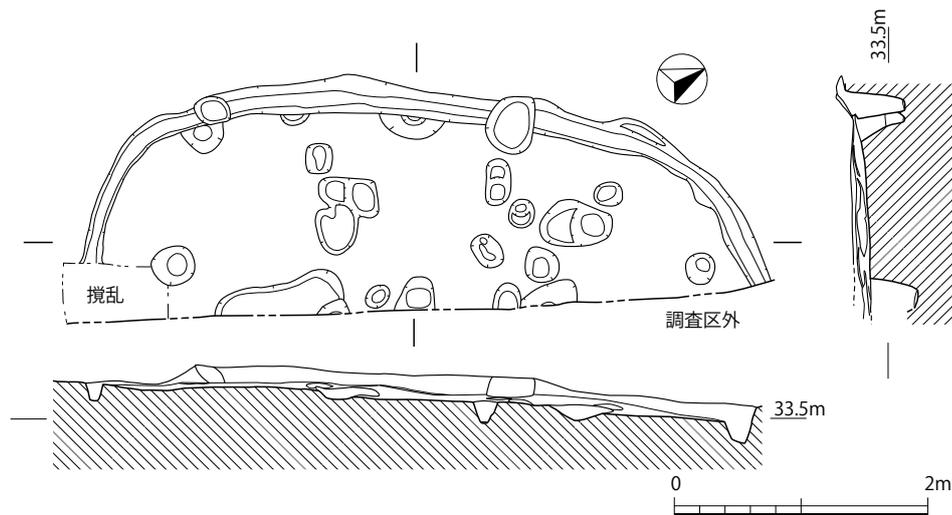
第 15 図 SC01・02・03 出土遺物実測図 (16・17 は S=1/2、その他は S=1/3)

また、遺構の北西—南東方向の中軸線上にピット 2 基を確認できる (a-a' 間)。これらの床面からの深さは、北西側ピットが 32.4cm、南東側のピットが 33.0cm とほぼ同じ深さである。そのため、これらが住居跡に伴う柱穴の一部である可能性がある。ただし、そのほかのピットについては深さが上記の 2 基のピットに比べ浅く、柱穴と判断できるものはみられない。炉跡については、遺構中央の SX11 に炭化物や焼土を含む堆積を確認できる。この土坑の範囲が炉の可能性はある。出土遺物は以下で報告する資料の他に、弥生土器、黒曜石・安山岩の剥片が出土している。また埋土上層や遺構検出時に須恵器、土師器、黒色土器、瓦器の破片が出土している。小片が多くまた器面の摩耗がひどいため図化できなかった。

出土遺物 (第 15 図)

石製品

石鏃 (16・17) 16 は安山岩製の石鏃である。基部は平基である。17 は黒曜石製の石鏃未成品。全長 2.3cm、幅 2.1cm、重さ 3.6 g である。



第 16 図 SC02 実測図 (S=1/60)

SC02 (第 16 図、図版5)

調査範囲の北東隅に位置する。遺構の東側は調査区外にのびる。平面プランは、遺構東半部が調査区外であるが、略北東-南西方向に軸をとる隅丸方形プランを呈するものと推定される。北東-南西方向は残存部で最大 5.5m、北西-南東方向は最も膨らむ部分で 1.9m を測る。床面は中軸線上で北側に向かって 28cmほど緩やかに低くなる。検出面からの深さは最大で 20cmを測る。壁溝と推定される溝は、東西方向の軸線上で幅 21.0cm、深さ 48.0cm、北東部軸線付近で幅 21.6cm、深さ 28.6cm、南西部軸線付近で幅 14.0cm、深さ 14.4cm程である。

また、壁溝の内側にはピットが多数確認されているが、遺構の東側の大部分が調査区外のためもあり、これらのピットのいずれが柱穴であるか不明である。炉跡については、床面で被熱した部分や炭化物の集中する範囲などが確認できておらず判然としない。出土遺物は以下で報告する資料の他に弥生土器に加え、黒色土器の小片が 1 点出土している。細片かつ器面の摩耗が著しく図化できなかった。

出土遺物 (第 15 図、図版 10)

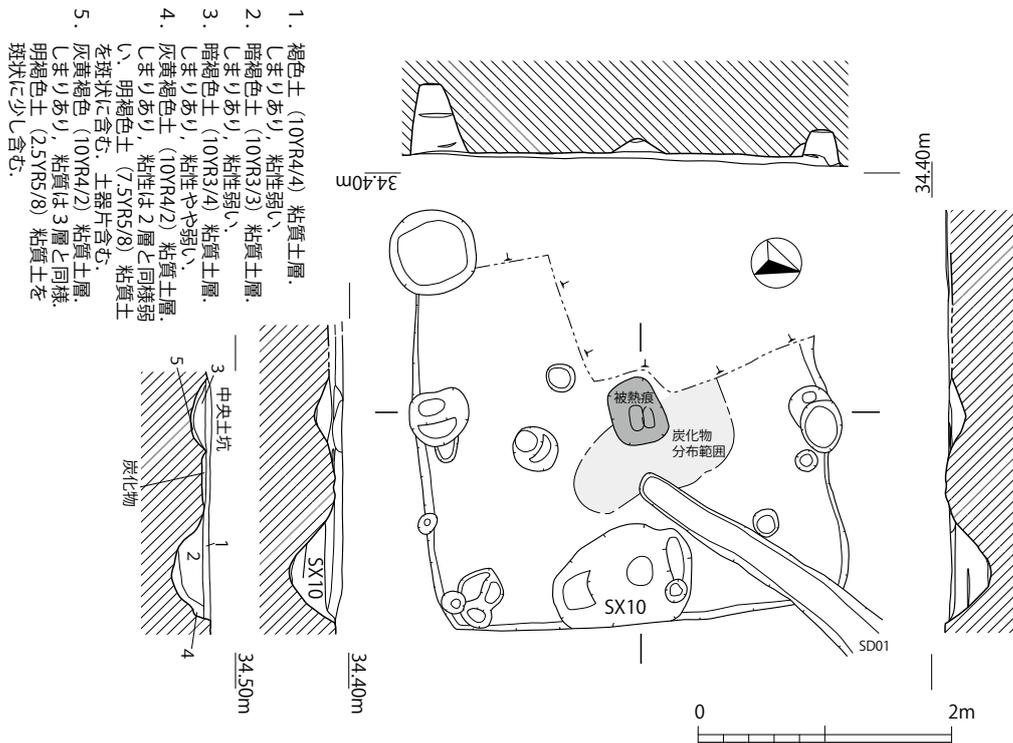
弥生土器

壺 (18) やや丸底気味を呈する平底の底部片である。底部内面および胴部下部外面に指頭圧痕が残る。内外面とも器面の荒れが著しく調整は不明である。

鉢 (19・20) 19 は口縁部から底部付近まで残存する。器面が荒れており調整は不明瞭であるが、外面下半はハケメの後ナデで仕上げる。内面は指頭圧痕が広範に残る。口径は 28.5cmに復元できる。残存器高は 14.8cmである。20 も同様の器形を呈する鉢形土器の口縁部片である。内外面ともナデで仕上げる。

手づくね土器 (21) 口縁部片で、器形は不明である。内外面に指頭圧痕が残る。

焼成粘土塊 (22) 住居跡埋土の上面から出土した焼成粘土塊である。重量 140.3g で粘土の形を成形するためか四方に指オサエの痕跡が認められる。



第17図 SC03 実測図 (S=1/60)

SC03 (第17図、図版6)

調査範囲の南半部、やや西側に位置する。遺構の西側隅は攪乱により削平され、また北隅はSD01により、南西隅はピットにきられている。平面プランは、略北西—南東方向に軸をとる方形プランを呈するものと推定される。東壁は残存部で3.12m、南壁は南西端がピットのため残存しないが、残存長で2.7mを測る。床面はほぼ平坦であるが、北壁側に比べ南壁側が4cmほど低く緩やかに傾斜している。検出面からの深さは最大で7.6cmを測る。また、南北両壁のほぼ中央部壁際のピットを含め、床面には複数のピットが確認されているが、規則的な配置は確認できず柱穴は不明である。炉跡については、床面で被熱した部分が竪穴状遺構の中央部で確認されており、またその周辺には炭化物の分布が確認されている。そのため、遺構の中央部に炉があったものと考えられる。出土遺物は以下で報告する資料の他に、図化できなかつたが、突帯文土器の小片や黒曜石の剥片に加え、遺構東半部から須恵器や土師器の小片が出土している。これらの須恵器・土師器の小片については、SD01によってきられている部分から出土しているため、混入したものと判断した。

出土遺物 (第15図、図版10)

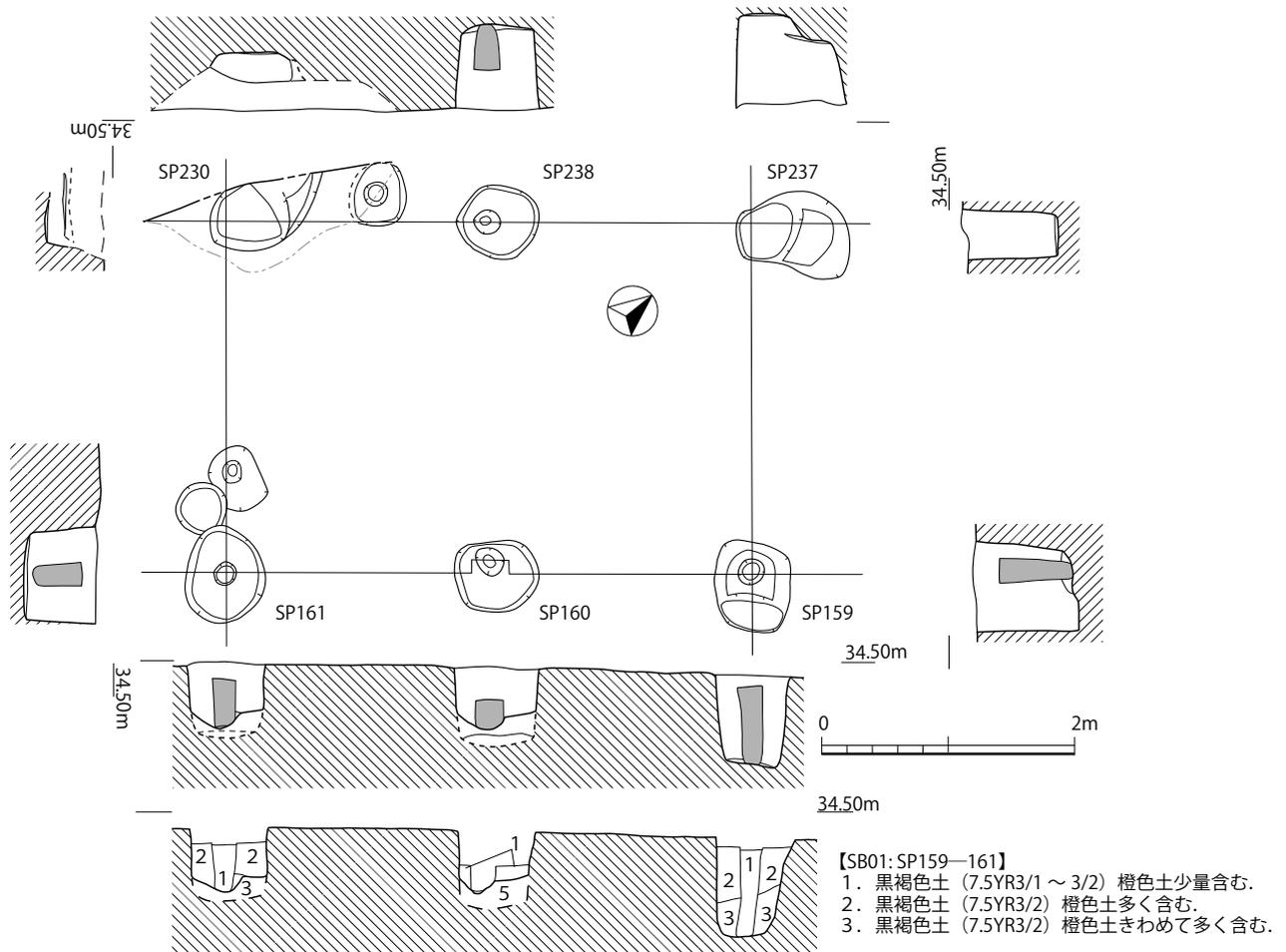
弥生土器

壺 (23) 底部片で、やや丸みを帯びる平底である。にぶい黄橙色を呈し砂粒を多く含む。底径は8.0cmに復元できる。

2) 掘立柱建物跡

SB01 (第18図、表12、図版7)

調査区北部、調査区西壁に接して位置する。北東—南西に軸をとる、1間×2間の建物である。



第 18 図 SB01 実測図 (S=1/60)

梁行 2.8m、桁行 4.15 ~ 4.16m である。掘方は隅丸方形に近い形態や楕円形に近いものなどがある。SP237 は 91 × 71cm と他の掘方に比べ大きいが、そのほかの掘方は 60 ~ 77cm である。深さは SP230 が遺構検出面から 45.3cm と最も浅く、他は 50.3 ~ 76.8cm である。また、SP237 と SP230 以外は、柱痕が検出されている。SP161 で検出された柱痕が 17.7 × 19.1cm で最も小さく、SP160 が 22.6 × 22.4cm と最も大きなサイズである。出土遺物は以下で図示したもの以外に、須恵器甕小片、土師器、黒色土器、弥生土器の小片、黒曜石・安山岩の剥片などが出土している。土器小片の大部分は器面の摩耗が著しく細片である。

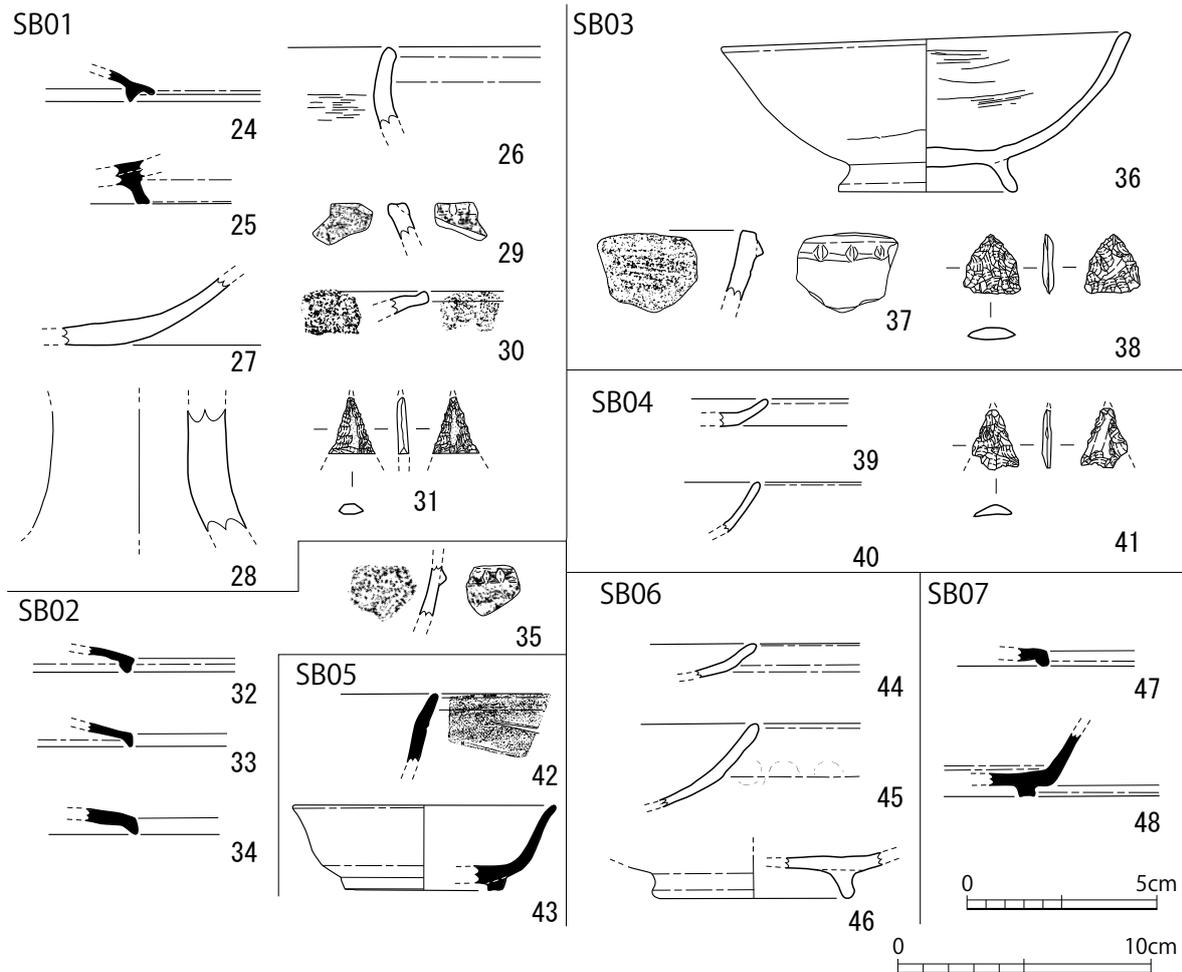
出土遺物 (第 19 図)

須恵器

杯 (24・25) 24 は杯 G の蓋口縁部の小片である。口縁端部はやや丸みを持つ。25 は杯 B の高台部小片である。外に向くやや高い高台がつく。

土師器

甕 (26) 小形の甕の口縁部片である。外面は摩耗しており調整不明であるが、内面は横方向のハケメがみられる。



第 19 図 SB01 ～ 07 出土遺物実測図 (31・38・41 は S=1/2、その他は S=1/3)

弥生土器

壺 (27) 底部片である。丸底気味の平底を呈する。

支脚 (28) 支脚の体部と推測される。外面はハケメの後丁寧なナデで仕上げる。内面は残存部の上半は丁寧なナデで、下半部は雑な仕上げである。

鉢 (29) 口縁端部外面に刻目突帯文を施す、口縁部小片である。内外面とも器面の荒れがひどく調整不明である。

縄文土器

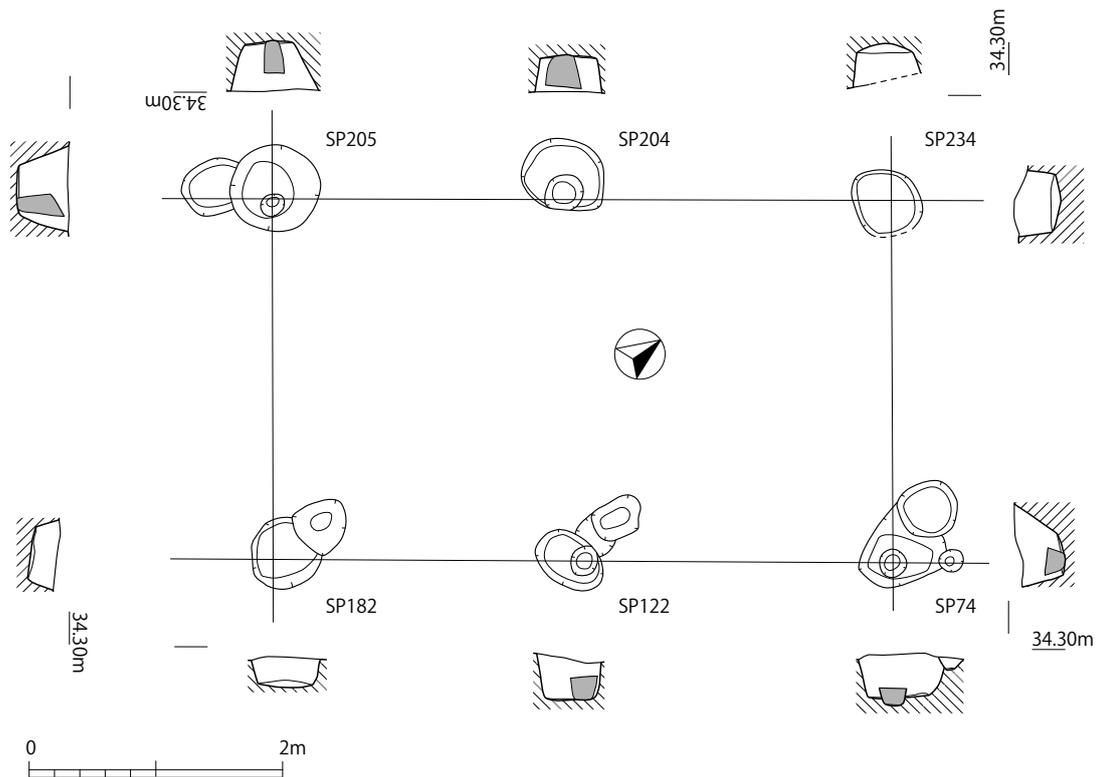
浅鉢 (30) 委縮した玉縁状口縁の浅鉢小片である。器面の摩耗が著しく調整などは不明である。

石製品

石鏃 (31) 黒曜石製の石鏃で、先端部および基部を欠損する。表裏ともに自然面を一部残す。

SB02 (第 20 図、表 12)

調査区北部の中央に位置する。北東—南西に軸をとる、1 間×2 間の建物である。梁行 2.87～3.0m、桁行 4.9m である。掘方には円形や楕円形がある。SP122 は 49.4×54.0cm で最も小さく、SP205 は 72.8×69.0cm で最も大きい。深さは SP182 が遺構検出面から 24.6cm と最も浅く、他



第 20 図 SB02 実測図 (S=1/60)

は 30.7 ～ 76.8cm である。また、SP182 と SP234 以外の掘方では柱痕が確認されている。柱痕のサイズは SP205 の径が最小で 18.4 × 17.6cm、SP204 の径が最も大きく 29.8 × 27.7cm である。これら柱痕の深さは SP205 が 38.0cm と最も残りが良い。出土遺物は以下で図示したもの以外に、須恵器の杯蓋と甕の小片、土師器、弥生土器の小片、黒曜石の剥片などが出土している。土器の大部分は器面の摩耗が著しく細片である。

出土遺物 (第 19 図)

須恵器

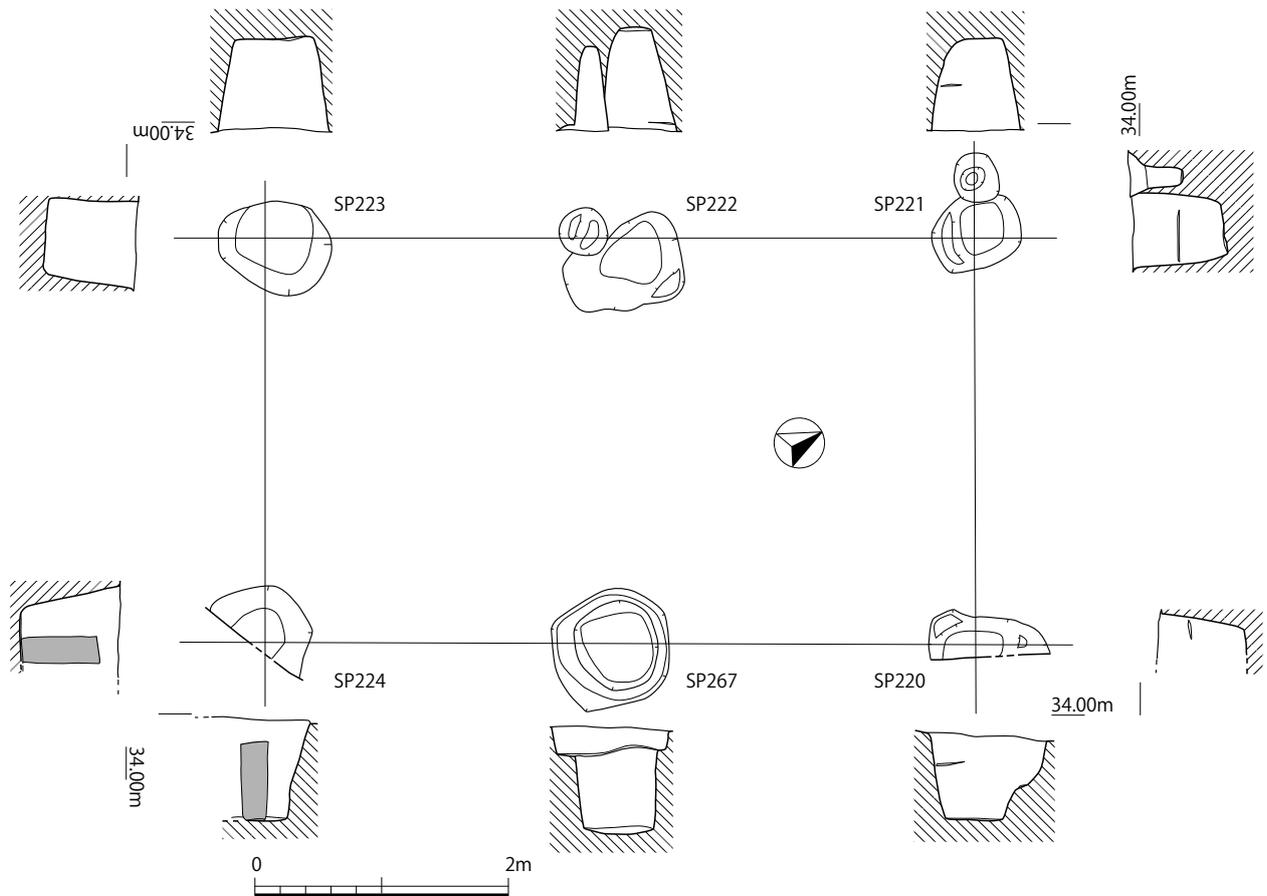
杯 (32 ～ 34) いずれも杯蓋の口縁部小片で、身受けのかえりはなく端部がわずかに下方に折れる。32 は屈曲部がやや厚みをもつ。33・34 も端部がわずかに折れるが、屈曲部の内面に稜はない。

弥生土器

鉢 (35) 刻目突帯文土器の小片で、胴部の一部であろう。内外面とも器面の風化が著しく調整は不明である。

SB03 (第 21 図、表 12、図版 7)

調査区北部東壁沿いに位置し、東側の柱穴は一部調査区外となる。北東—南西に軸をとり、1 間 × 2 間の建物である。梁行 3.22 ～ 3.23m、桁行 5.6m である。掘方には円形や楕円形がある。SP221 が 62.1 × 71.1cm で最も小さく、SP222 が 79.9 × 96.6cm で最も大きい。深さは SP182 が遺構検出面から 71.0cm と最も浅く、他は 76.3 ～ 83.7cm である。また、SP224 で柱痕が確認されている。柱痕のサイズは径 21.5 × 21.9cm、深さ 63.1cm である。出土遺物は以下で図示したも



第 21 図 SB03 実測図 (S=1/60)

の以外に、須恵器杯 B 高台部の小片や詳細不明の細片、土師器・弥生土器の甕棺小片、黒曜石の剥片などが出土している。土器小片の大部分は器面の摩耗が著しい。

出土遺物 (第 19 図、図版 10)

土師器

椀 (36) 体部は丸みを持ち、高台は外に向き、やや高い。高台内にへら切り痕がみられる。口径 16.2cm、器高 6.4cm、底径 7.1cm である。

弥生土器

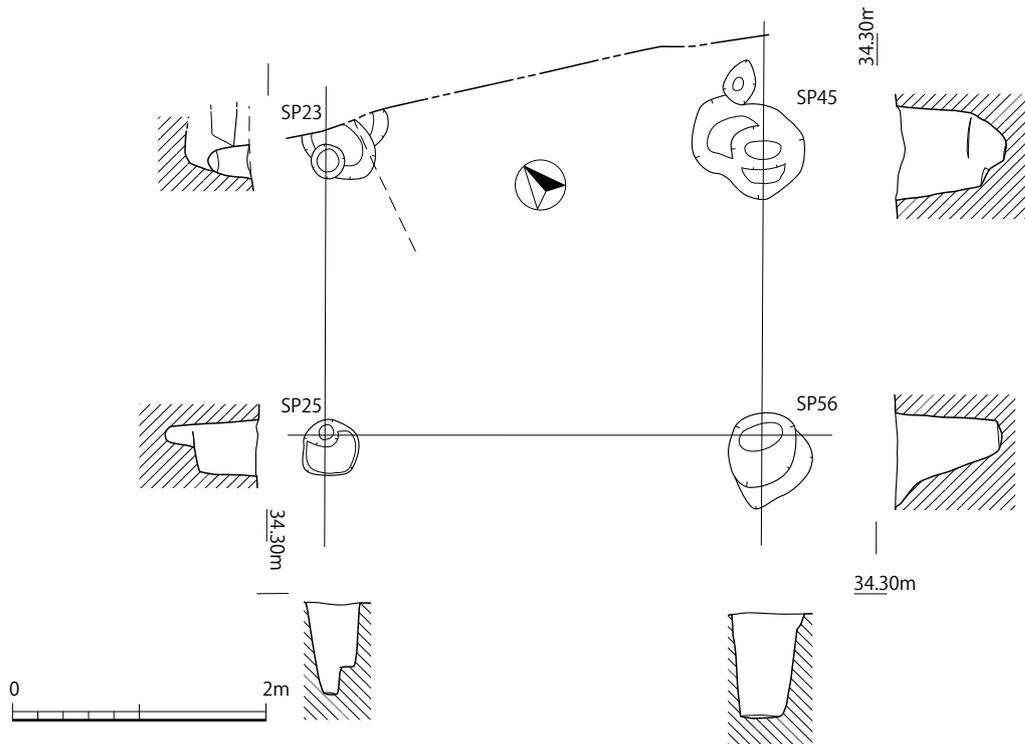
鉢 (37) 口縁端部直下に刻目突帯文をめぐらす。口縁端部のみナデで、内外面の調整は横方向の条痕である。

石製品

石鏃 (38) 黒曜石製の石鏃である。基部は平基である。最大長 1.6cm、最大幅 1.5cm を測る。

SB04 (第 22 図、表 12)

調査区北壁沿いやや西よりに位置し、調査区外北側に建物のはのびると推定される。北東-南西に軸をとり、1 間×1 間が確認されている。梁行 3.45m、桁行 2.3m である。掘方は円形や楕円形、隅丸方形に近い形態などがある。SP25 が 44.8 × 44.9cm で最も小さく、SP45 が 89.8 × 82.4cm で



第 22 図 SB04 実測図 (S=1/60)

最も大きい。深さは SP23 が遺構検出面から 52.5cm と最も浅く、他は 73.9 ～ 87.7cm である。出土遺物は以下で図示したもの以外に、須恵器杯蓋の小片に加え詳細不明の細片、土師器・弥生土器・瓦器の小片と黒曜石の小片などが出土している。

出土遺物 (第 19 図)

土師器

皿 (39・40) 39 は小皿の口縁から底部にかけての小片である。底部から短く立ち上がる。40 は小皿の口縁部から体部にかけての小片である。内外面とも器面の荒れのため調整不明である。

石製品

石鏃 (41) 黒曜石製の石鏃である。先端部と基部を欠損する。

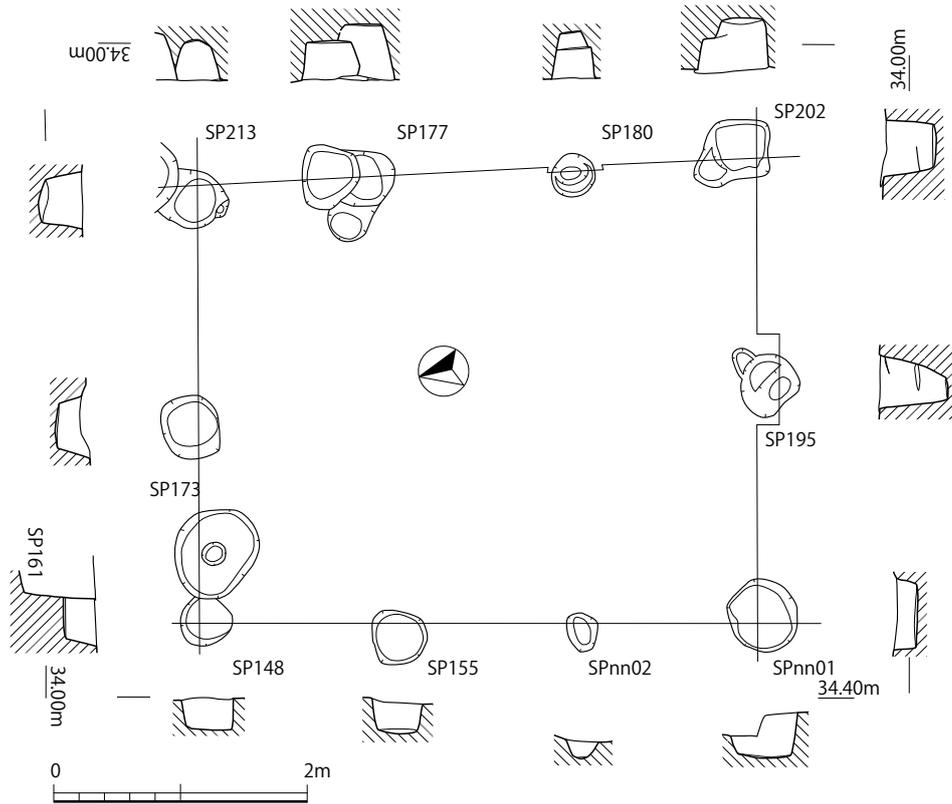
SB05 (第 23 図、表 12)

調査区中央部やや西より、SB01 南東隅に接して位置する。北西－南東に軸をとる、2 間×3 間が確認されている。梁行 3.47 ～ 3.7m、桁行 4.4m である。掘方は円形や楕円形、隅丸方形、不整形などがある。SPnn02 が 31.4 × 25.0cm で最も小さく、SPnn01 が 59.0 × 56.3cm で最も大きい。深さは SPnn02 が遺構検出面から 15.4cm と最も浅く、他は 26.5 ～ 54.8cm である。出土遺物は以下で図示したもの以外に、須恵器・土師器・弥生土器・黒色土器と黒曜石の小片などが出土している。

出土遺物 (第 19 図、図版 10)

須恵器

杯 (42・43) 42 は杯身の口縁部片である。口縁下位外面にヘラ記号がみられる。43 は杯 B の身で、



第 23 図 SB05 実測図 (S=1/60)

底部のやや内側に低い高台が付く。体部は底部から直線的に立ち上がるが、口縁下で緩く外に反る。

SB06 (第 24 図、表 12)

調査区中央部に位置する。北東—南西に軸をとる建物で、2間×3間が確認されている。梁行4.02～4.09m、桁行6.9mである。掘方は円形や楕円形がある。SP187が30.4×29.0cmで最も小さく、SP41が38.3×35.6cmで最も大きい。深さはSP32が遺構検出面から16.4cmと最も浅く、他は22.6～47.5cmである。出土遺物は以下で図示したもの以外に、須恵器杯Bの蓋と身の小片に加え、須恵器・土師器・弥生土器・黒色土器・瓦器の細片と焼成粘土塊片などが出土している。

出土遺物 (第 19 図、図版 10)

土師器

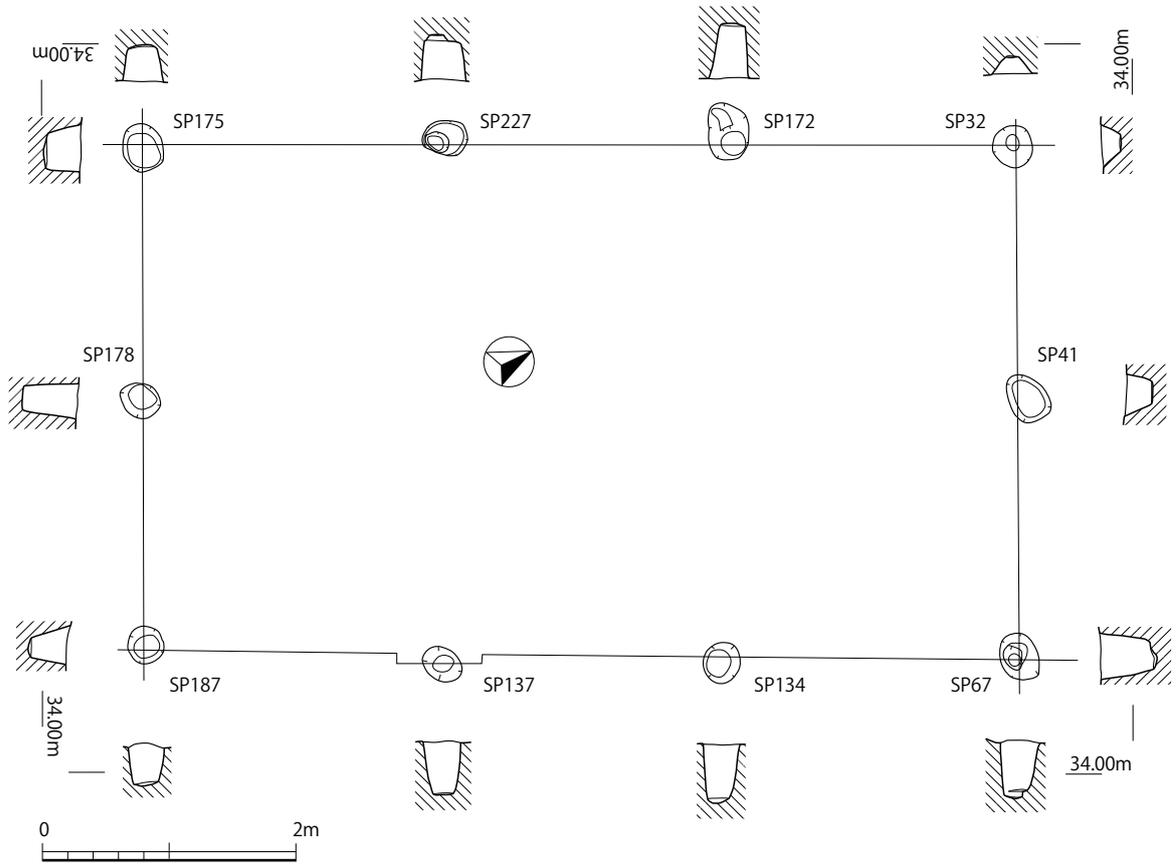
皿 (44) 小皿の口縁部から体部の小片で、底部と体部外面の境に稜がわずかにみられる。

杯 (45) 底部から体部の破片で、ゆるく立ち上がり体部に稜がのこる。

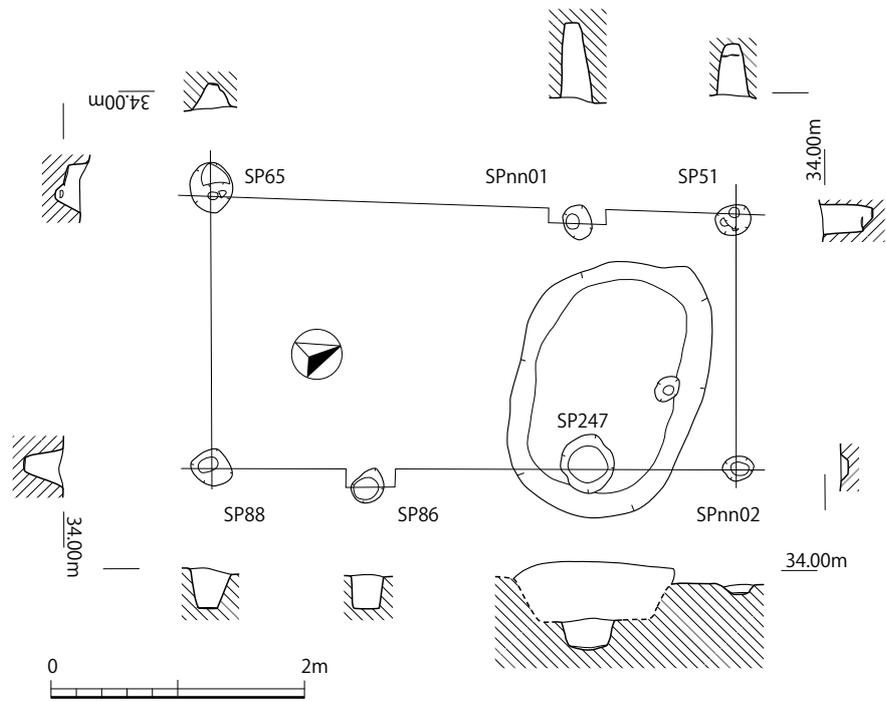
椀 (46) 椀の底部片で外に開くやや低い高台がつく。

SB07 (第 25 図、表 12)

調査区北部中央やや東より、SC02の西側に位置する。北東—南西に軸をとる建物で、1間×3間が確認されている。梁行2.04～2.16m、桁行4.15mである。掘方は円形や楕円形などがある。SPnn01が27.8×23.3cmで最も小さく、SP247が47.3×42.8cmで最も大きい。深さはSPnn02が遺構検出面から8.3cmと最も浅く、他は26.6～70.9cmである。出土遺物は以下で図示



第 24 図 SB06 実測図 (S=1/60)



第 25 図 SB07 実測図 (S=1/60)

したもの以外に、須恵器・土師器・弥生土器・黒色土器・瓦器の細片と砂岩質の砥石の小片、黒曜石の剥片などが出土している。

出土遺物（第 19 図）

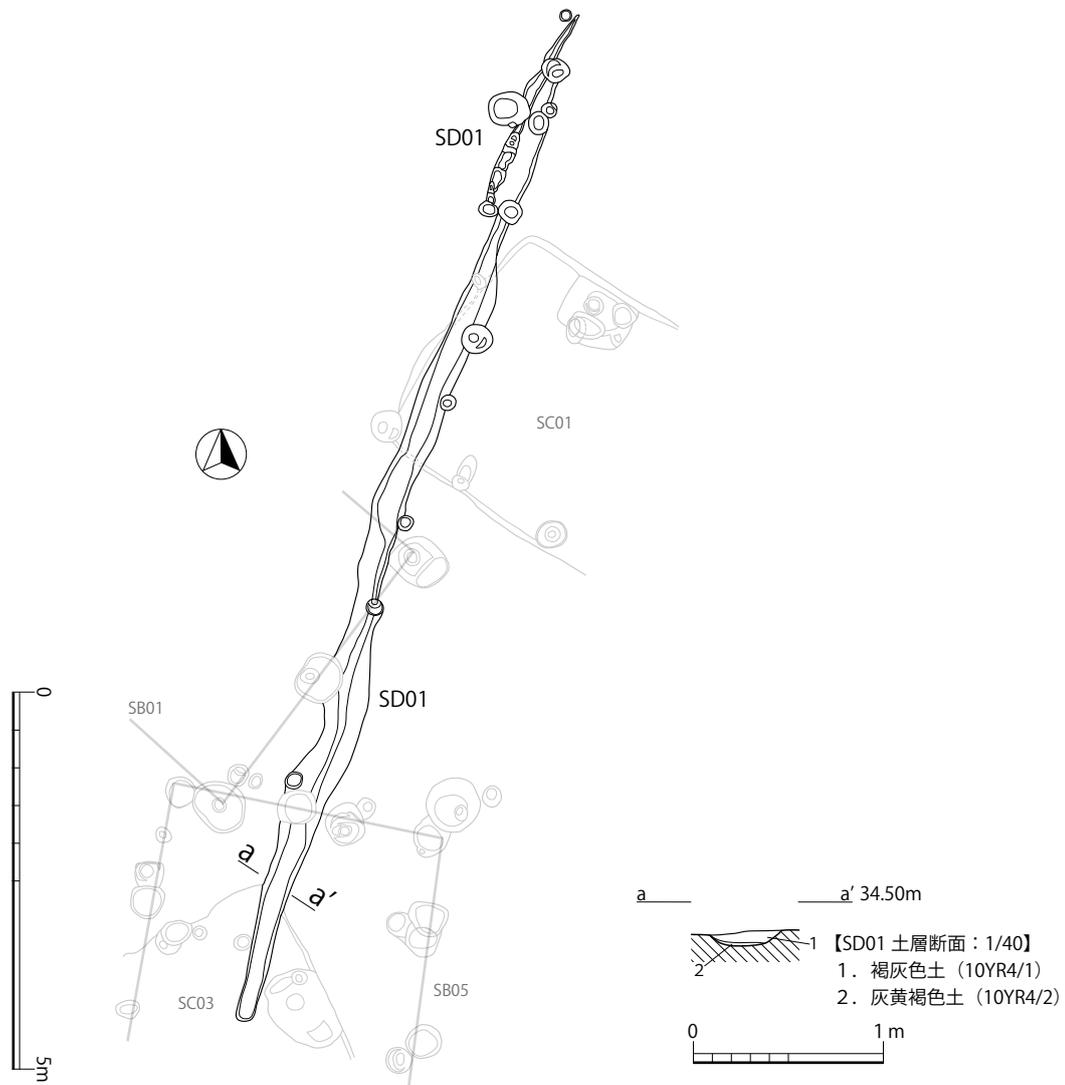
須恵器

杯（47・48）47 は杯蓋の口縁部小片である。かえりはなく口縁端部が短く下方に折れる。48 は杯 B の身で、底部のやや内側に低い高台が付く。体部は直線的に開く。

3) 溝

SD01（第 26 図）

調査区北西部から中央部にかけて北東から南西方向に直線的に伸びる溝である。調査区北西部では SC01 の西壁および南壁を切り、中央部では SC03 の北隅を切る。溝の南端はこの SC03 中央部で途切れる。溝の北端は調査区の北西隅近くで次第に消失する。溝幅は最大で約 50cm を測る。床面は、遺構検出面から 6 cm ほどの深さで非常に浅い。また、溝の北端部と南端部で溝床面のレベルに差はなくほぼ平坦である。



第 26 図 SD01 実測図 (S=1/100、土層図は S=1/40)

出土遺物（第 27 図）

須恵器

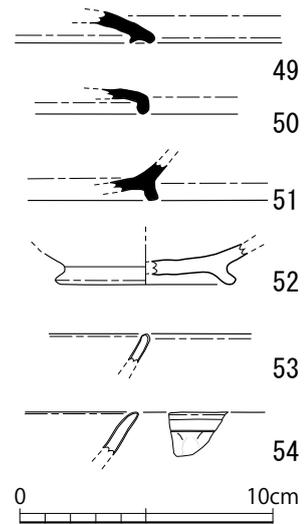
杯（49・50・51）49 は杯蓋で口縁部のかえりは小さい。50 も杯蓋だがかえりはなく、端部が短く下方に折れる。口縁端部は丸く仕上げる。51 は杯 B の底部片で、底部と体部の境に高台が付く。

土師器

椀（52）椀の底部で、短く外に向く高台が付く。高台径は 7.1cm に復元できる。

磁器

白磁（53・54）53 は椀の口縁部片で内外面に釉がかかる。54 も椀の口縁で、口縁部外面に 1 条沈線がめぐり、その下位に蓮弁様のふくらみを有するが小片のため詳細は不明である。



第 27 図 SD01 出土遺物
実測図（S=1/3）

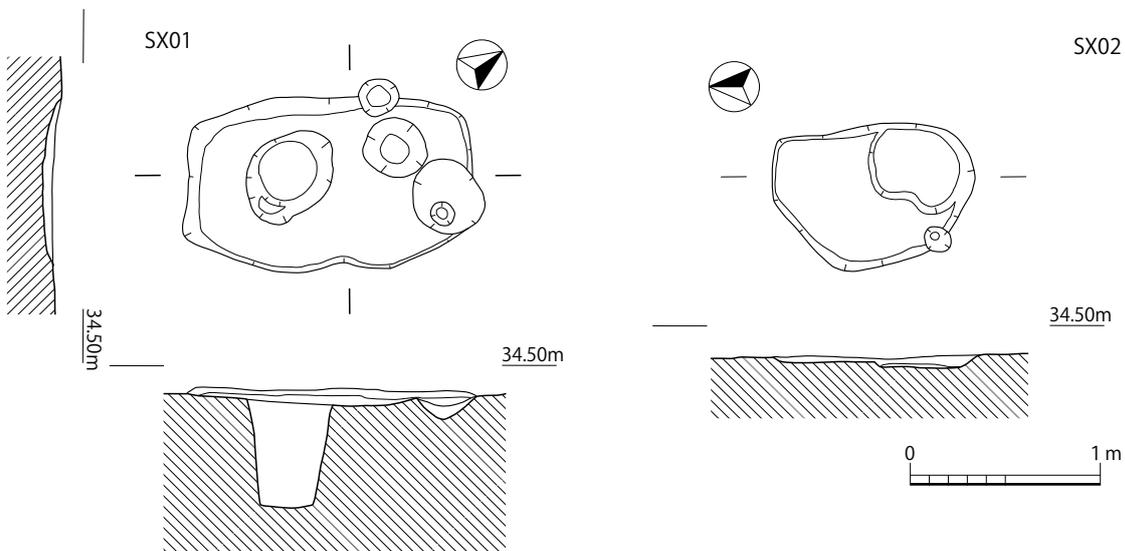
4) 性格不明土坑

SX01（第 28 図）

調査区北半部の西壁付近に位置する。長軸を略北東—南西にとる。遺構の北東隅は別のピットによって切られており不明であるが、略長方形の平面プランを呈する。遺構内は複数のピットが重複している。長軸方向は最大 1.54m、短軸方向は最大 0.93m を測る。床面は、重複しているピットのため不明な部分もあるが、南西側がやや高い浅いすり鉢状を呈し、遺構中央部が最も深くなる。遺構検出面からの深さは最大で 9.3cm である。遺物は弥生土器・瓦器の小片などが出土しているが、いずれも細片で図化できなかった。

SX02（第 28 図）

調査区北半部の西壁付近、SX01 の北に位置する。長軸を略南北にとり東側を長辺、西側を短辺とする台形に近い平面プランを呈する。長軸方向は最大 1.07m、短軸方向は最大 0.79m を測る。



第 28 図 SX01・02 実測図（S=1/40）

床面は、遺構の南東側が一段低くなっているが、そのほかの部分ほぼ平坦である。遺構検出面からの深さは最大で3.6cm、一段低い部分は6.7cmである。遺物は土器の細片が出土しているが、器面の荒れが激しく詳細は不明である。

SX03 (第29図、図版8)

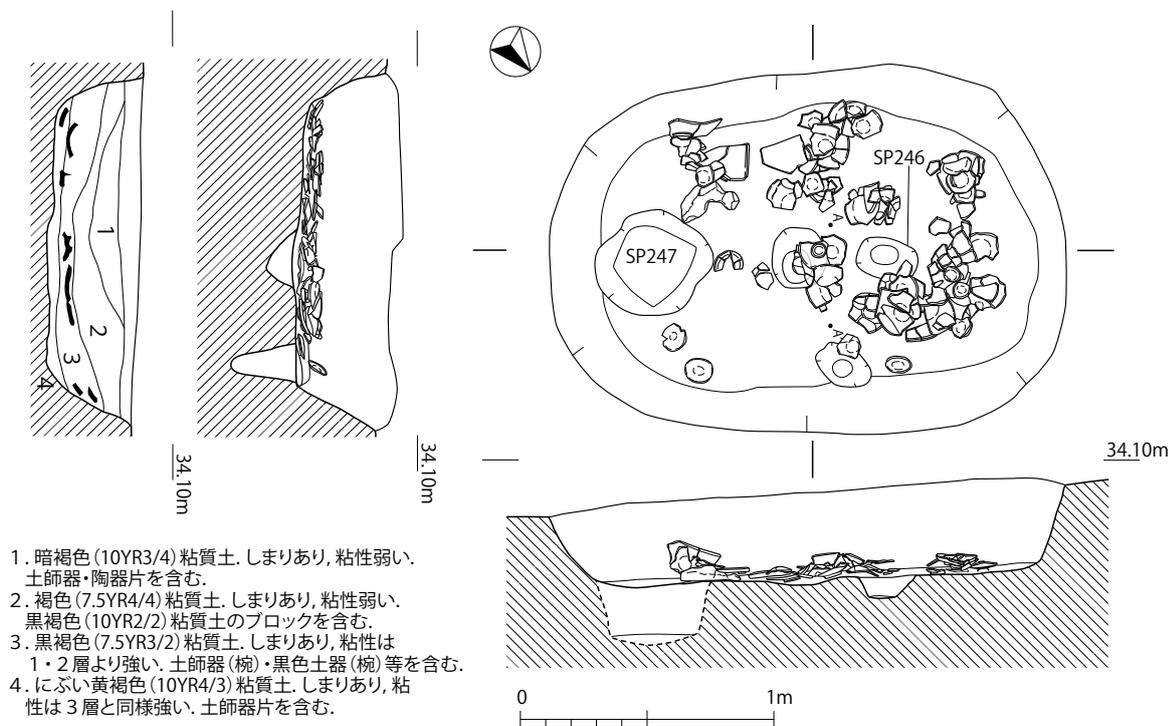
調査区北壁近くの中央からやや東より、SC02の西側に位置する。長軸を略北西-南東方向にとる隅丸方形の平面プランを呈する。長軸方向は最大4.0m、短軸方向は最大2.95mを測る。床面はほぼ平坦である。遺構検出面からの深さは最大で83.1cmである。

遺構内埋土は4層に分かれるが、3層および4層から土師器と黒色土器が多く出土した。遺構床面から出土した遺物は、遺構の南東隅でやや少ないものの、それ以外は遺構北西端付近、西壁付近で多く出土している。この範囲内で、遺物は複数の群にまとまる可能性がある。また、遺構の南西部、SP247の西側から床面に接して粘土塊が出土している。土坑内は複数のピットが重複しているが、遺物の出土状況を見る限り、南東側に位置するSP247以外は本土坑より古いものと考えられる。遺物は、以下で図示するものの他に、須恵器・土師器・弥生土器・黒色土器の小片、黒曜石小片などが出土している。

出土遺物 (第30～32図、図版10～12)

土師器

皿 (55～70) 55から70は小皿である。このうち、55は口径9.0cmと口径が最も小さく、56は器高が0.85cmと本遺構出土個体群の中で最も小さい。一方、69はこの一群の資料中でも器高が2.0cmと最も高い。70は皿とした方がよく、器高は他の資料と同様であるが、口径・底径が他に



第29図 SX03 実測図 (S=1/30)

比べ大きい。これら4個体以外は、口径10.0～11.1cm、器高1.1～1.65cm、底径7.0～8.3cmの範囲に比較的まとまる。底部外面に糸切り痕はみられず、いずれもヘラ切りである。

杯(71～81)すべて丸底杯で、77以外は底部付近に指頭圧痕がみられる。また原形となる土器の底部と体部の境が稜として残存するものや、口縁部下位の器壁が薄くなるものなどがあり、押し出し技法によって成形されている。77は口径12.2cmと11点中最も小さいサイズで、その他は口径14.8～16.6cm、器高2.9～4.2cmの範囲に収まる。77を除いた資料の平均値は口径15.6cm、器高3.6cmである。

椀(82・83)82はやや直立気味の高台がつく。体部中位に指頭圧痕がみられ、わずかに稜が残る。83は外に向く低い高台がつく。体部中位に稜がわずかにみられる。いずれも丸みを帯びた体部であるが、やや浅い器形である。

移動式カマド(84)移動式カマドの破片で、裾部を欠く。体部中央でやや胴がはり、若干すぼまりながら上端部にいたる。焚口の底は剥離し、貼り付け部の痕跡がみられる。把手も剥離しており、焚口部の上辺と同じレベルに張り付けた痕跡が残る。上端部内面には指頭圧痕がみられる。内外面ともにナデである。また、内面は全体的に二次被熱しているが、上端部から10cmほどの幅で特に被熱が著しく器壁が黒色化している。さらに、土坑中で接触していた椀の高台の跡が内面中位に円形に残存する。

黒色土器

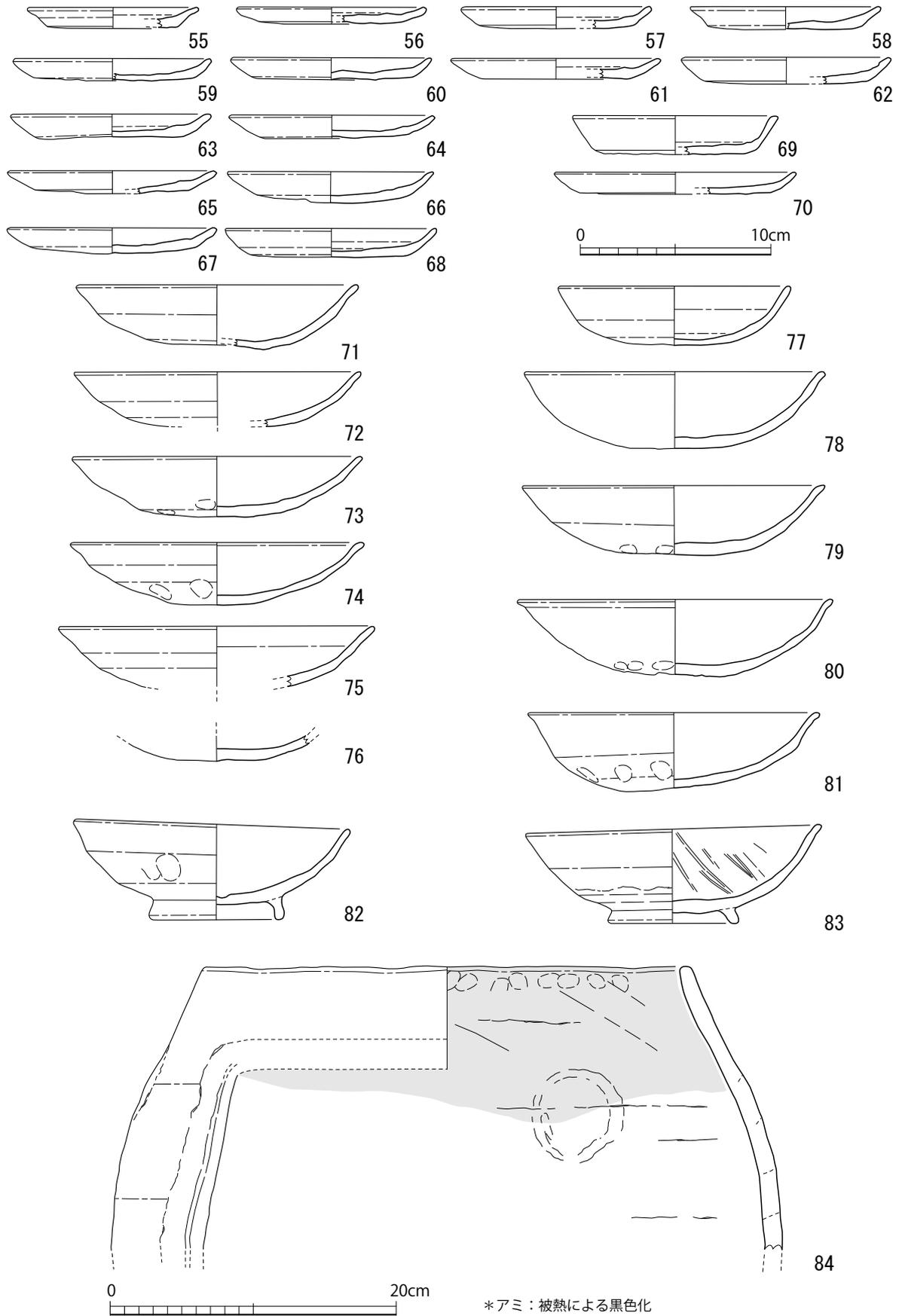
椀(85～119)85～88・94・95・96・98は黒色土器A類、89～93・100～104・107～114・116・117は黒色土器B類の椀である。その他は黒色化が不十分で、口縁部周辺あるいは全体的に灰色を呈し、いずれとも判断がつかない。黒色土器A類はいずれも丸い体部で、86・94・96などは口縁端部がやや外反する。87や98は口縁部と体部の間で緩く折れ稜を形成する。高台はやや低く外に向かって開く。この中で88は形態的に特異で、口縁部外面にナデによる面が形成されており、内面に沈線が1条めぐる。高台も他のものに比べ高く、高台径も大きい。

黒色土器B類も丸みを持つ体部で、やや低い高台が外に向かって開く点で黒色土器A類と形態的に類似する。口縁端部は101・102・104・108・109等でわずかに外反する。102や104、105等は上でみた黒色土器A類中にはない断面逆三角形の委縮した高台がつく。

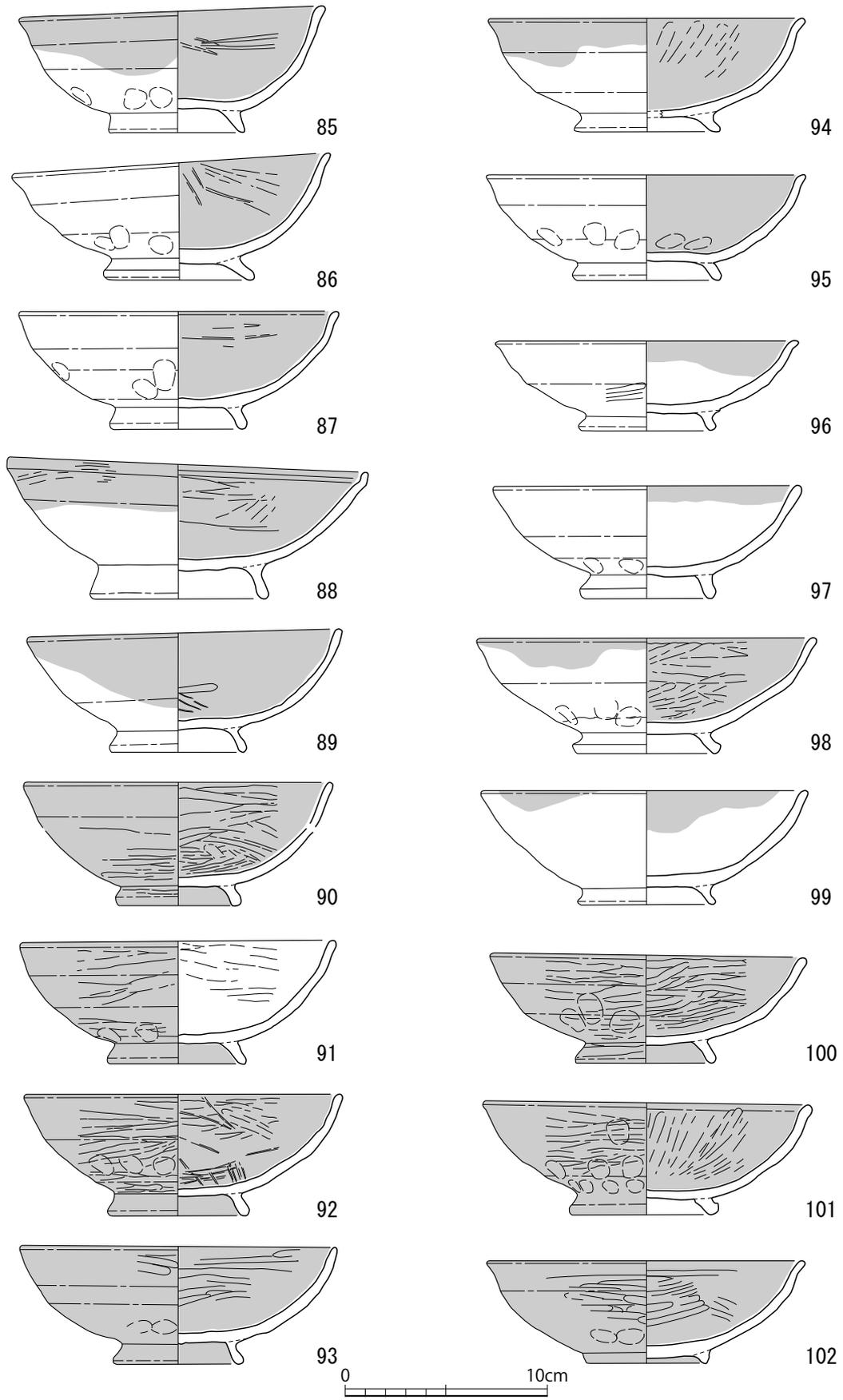
これらの中で、96は他に比べ器高が極端に低く、浅い器高で土師器の杯に近い値である(3.まとめ 第45図・上図参照)。また、口縁部の形態が特異な88は口径17.9cm、器高7.1cm、高台径8.9cmである。本遺構出土黒色土器の他の資料の法量から逸脱したサイズである。これら以外の黒色土器は口径15.0～16.8cm、器高5.3～6.4cm、高台径6.2～7.5cmの範囲にまとまる。

SX05(第33図)

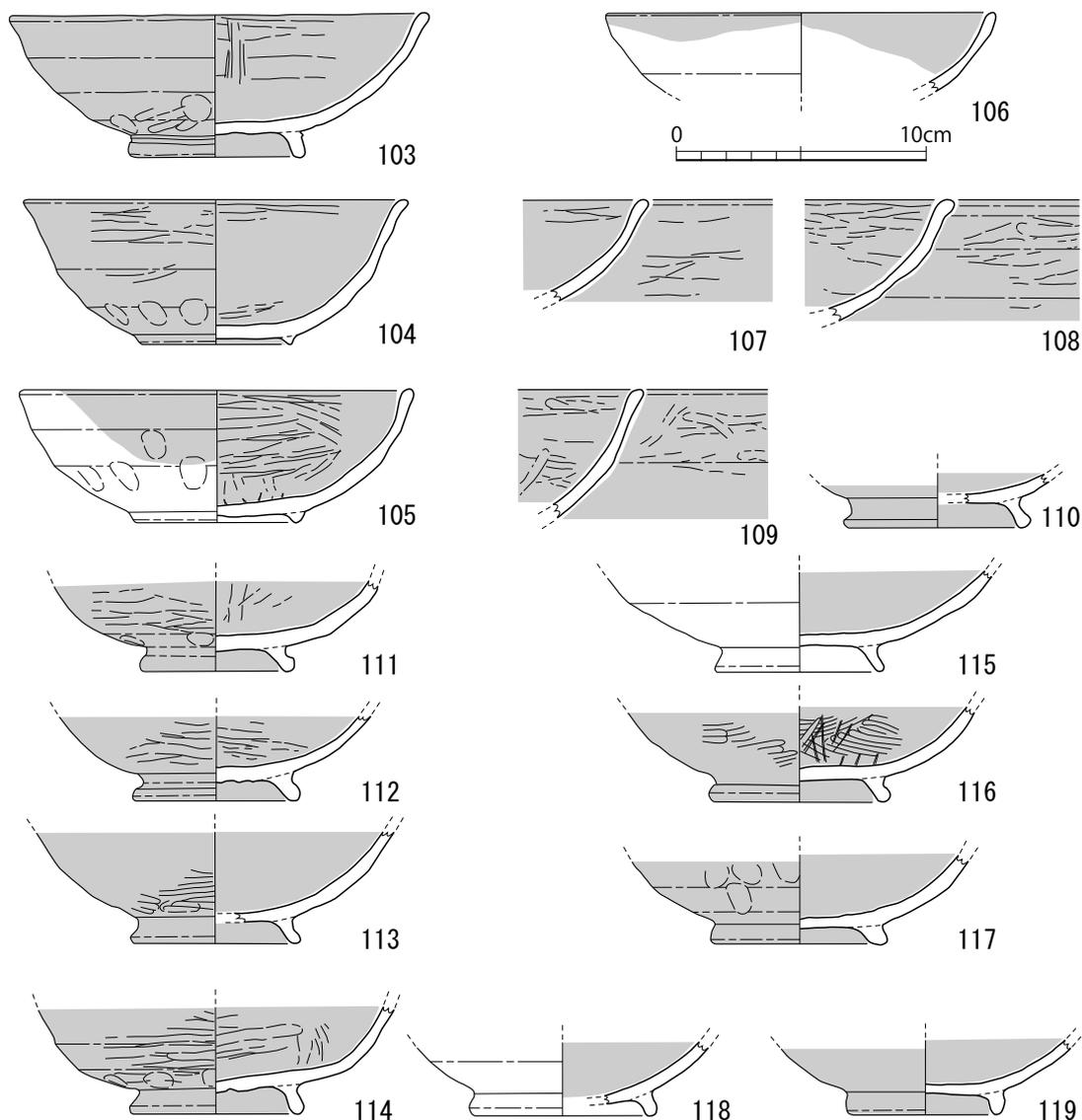
調査区の北半部やや東より、SC02の南西側に位置する。長軸を略東西方向にとる平面が不整形の土坑である。長軸方向は最大1.29m、短軸方向は最大0.56mを測る。床面西側は平らであるが、東側半分はやや凹凸がある。北西から南東に向かって9.2cm程低くなる。遺構検出面からの深さは最大で14.2cmを測る。遺物は須恵器の小片が出土しているが図化できなかった。



第30図 SX03 出土遺物実測図(1) (84はS=1/4、その他はS=1/3)



第 31 图 SX03 出土遺物実測図 (2) (S=1/3)



第 32 図 SX03 出土遺物実測図 (3) (S=1/3)

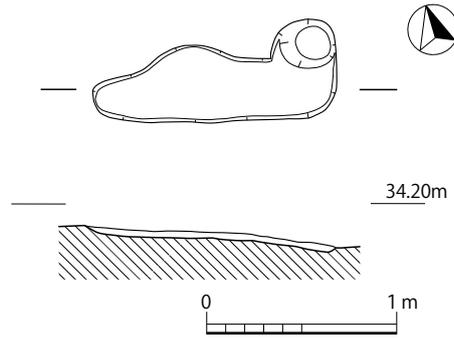
SX07 (第 34 図、図版9)

調査区の中央部やや東より、SB02 と SB03 の中間に位置する。略南北方向に軸をとる円形に近いプランの土坑である。長軸方向は最大 2.88m、短軸方向は最大 2.35m を測る。床面は南北方向では遺構中央部がやや低くなっている。遺構検出面からの深さは最大で 42.0cm を測る。また、遺構の中央部西側壁近くの床面から土師器椀が出土しており、その他に土坑の中央部から東側にかけて粘土塊が出土している。出土遺物は、以下で図示するものの他に、須恵器、弥生土器の小片が出土している。また、出土した粘土は、灰白色を呈し 1mm 程の白色砂粒を含む。精製前の粘土の可能性はある。

出土遺物 (第 35 図)

須恵器

杯 (120) 杯蓋の口縁部片である。口縁端部をわずかに折り、屈曲部外面中央部はナデによって浅



第 33 図 SX05 実測図 (S=1/40)

い凹線状を呈する。

土師器

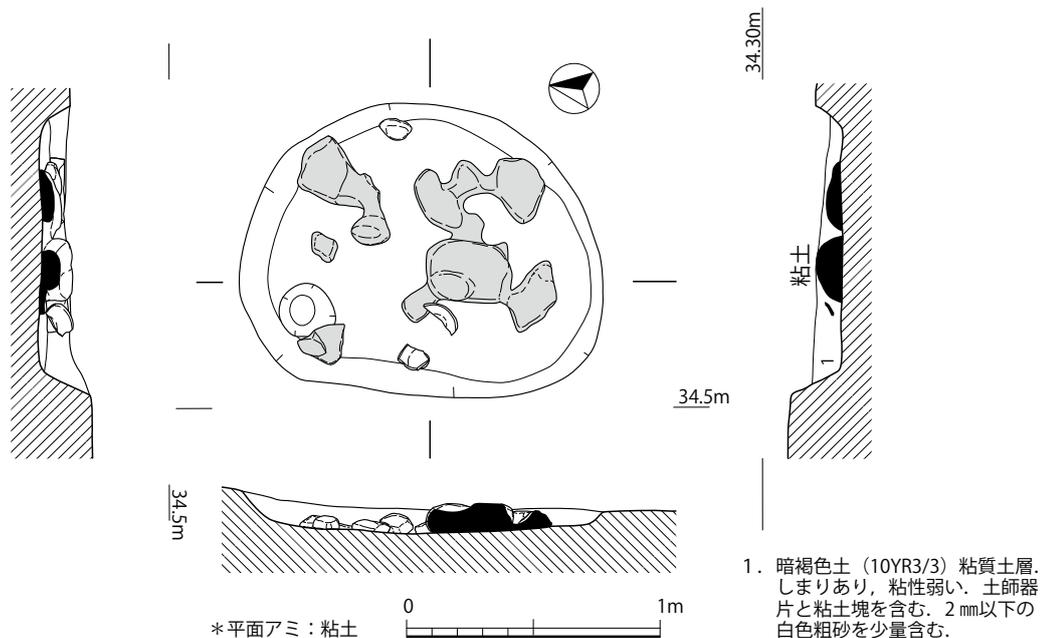
皿 (121 ~ 123) 121 から 123 は小皿で、121 の口径は 9.6cm に復元でき、器高は 1.1cm である。122 は口径 10.4cm、底径は 8.6cm に復元でき、器高は 0.95cm である。123 は口径 10.6cm、底径 8.2cm に復元できる。器高は 1.2cm である。121 と 123 の底部はヘラ切りである。

杯 (124・125) 124 は杯の底部で、外面はヘラ切りである。内面には指頭圧痕が残る。125 も杯の底部片で、底部外面はヘラ切りである。また板状圧痕が外面に残る。体部の下位まで回転ヘラ切りの痕跡がみられ、稜を残す。

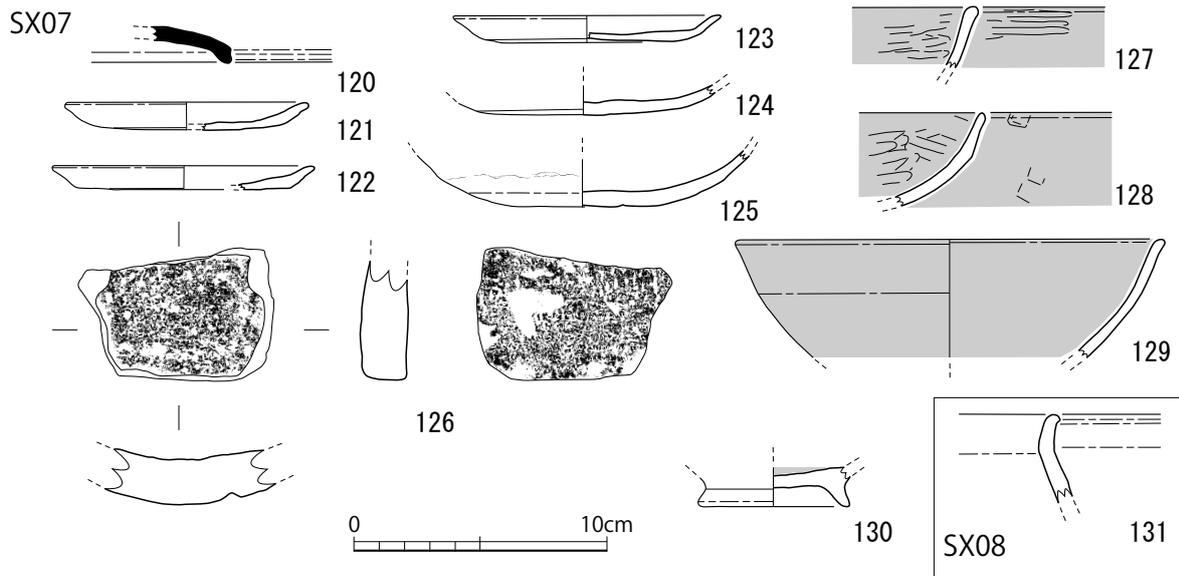
瓦 (126) 平瓦片である。凹面は布目圧痕が残り、凸面には一部に縄目叩きが残る。

黒色土器

椀 (127 ~ 130) 127 から 129 は黒色土器 B 類の椀で、127 は内外面にミガキを施す。128 は外面ナデで内面にミガキを施す。129 の口径は 17.0cm である。130 は椀の底部である。内面が黒色化する。高台径は 6.0cm である。



第 34 図 SX07 実測図 (S=1/30)



第 35 図 SX07・08 出土遺物実測図 (S=1/3)

SX08 (第 14 図、図版5)

調査区北西部の SC01 北壁沿いに位置する。略北西—南東方向に軸をとる。やや東西方向に長く、南側の壁が膨らむ方形プランを呈する。長軸方向は最大 0.96m、短軸方向は最大 0.8m を測る。床面はほぼ平らで、遺構検出面からの深さは最大で 44.0cm を測る。遺物は、以下の他に、縄文土器、土師器片、黒曜石小片が出土しているが図化できなかった。

出土遺物 (第 35 図)

弥生土器

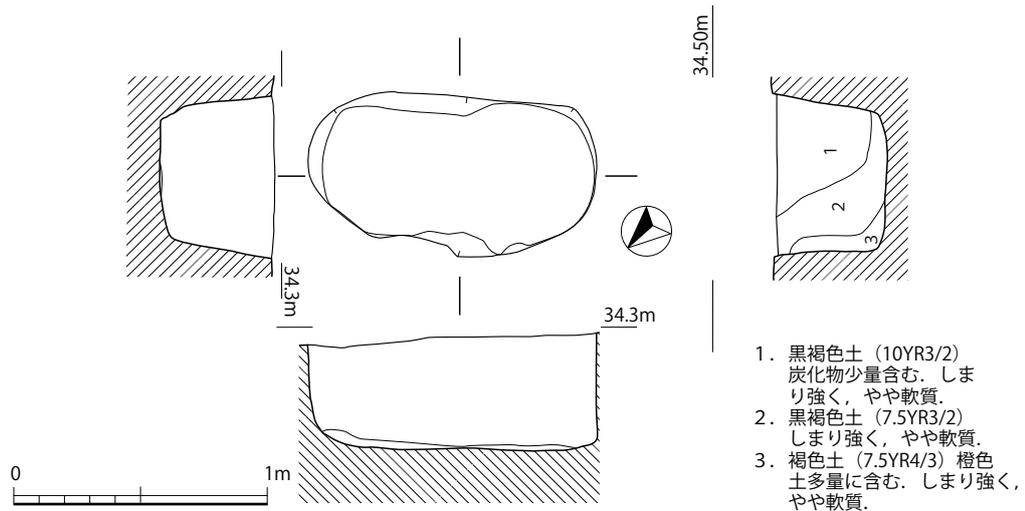
甕 (131) 小形の甕の口縁部片で、胴部から短い口縁部が外に屈曲する。口縁部内面にハケメ状の調整痕が残る。

SX09 (第 36 図)

調査区南部、SC03、SB05 の南西約 2m に位置する。略北東—南西方向に長軸をとる楕円形の平面プランを呈する。長軸方向は最大 2.29m、短軸方向は最大 1.32m を測る。北西側の壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面はほぼ平らで、遺構検出面からの深さは最大で 94.2cm を測る。この土坑からは遺物は出土していない。

SX10 (第 17 図、図版6)

調査区南半部の SC03 東壁沿いに位置する。略北西—南東方向に軸をとる。平面プランは北西部の南壁がやや変則的にくぼむ楕円形に近い形を呈する。長軸方向は最大 1.15m、短軸方向は最大 0.82m を測る。遺構の南北端に段がつき、そこから土坑中央部に向かってすり鉢状に低くなる。遺構検出面からの深さは最大で 43cm を測る。出土遺物は、縄文土器片が出土しているが、器面の風化が著しく細片のため図化できなかった。SC03 の土層断面にもとづくと、本土坑が SC03 に先行する。



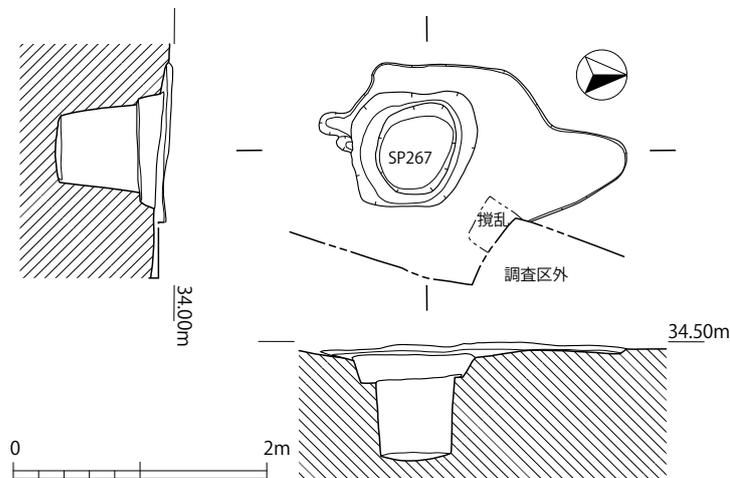
第 36 図 SX09 実測図 (S=1/30)

SX11 (第 14 図、図版5)

調査区北西部の SC01 の中央部に位置する。SC01 と中軸が略一致しており、北西—南東方向にやや長い方形プランを呈する。土坑北壁は北東方向に一段浅い部分がみられる。長軸方向は最大 0.71m、短軸方向は最大 0.66m を測る。床面はほぼ平らで、南北方向では遺構中央部がやや低くなっている。遺構検出面からの深さは最大で 34.0cm を測る。この土坑内に炭化物や焼土を含む層を確認できる。土器の小片が出土しているが、細片のため図示することはできなかった。

SX12 (第 37 図)

調査区北半部の東壁沿いに位置する。遺構の中央部分で SB03 の SP267 と重複しており、また一部攪乱のため遺構東側の立ち上がり不明である。遺構の北側は半円形に張り出し、南側も舌状に小さく張り出す不整形を呈する。南北方向は最大 2.88m、東西方向は最大 2.35m を測る。床面は南北方向で遺構中央部に向かって緩やかに低くなる。遺構検出面からの深さは最大で 12.5cm を測る。出土遺物は、以下で図示するものの他に、弥生土器、黒色土器の小片、黒曜石小片が出土している。



第 37 図 SX12 実測図 (S=1/60)

出土遺物（第 38 図）

須恵器

杯（132～135）132 から 134 は杯蓋の口縁部小片である。132 はかえりがあり、133 は口縁端部をわずかに下方に折る。134 は口縁端部の屈曲がほとんどなく、端部を丸く仕上げる。135 は杯身の底部から体部にかけての破片である。高台は短く直立する。

SX13（第 39 図）

調査区の中央部の東壁沿いに位置する。略北東—南東方向に軸をとる。遺構の東側が調査区外に延び、また南西部は攪乱で失われているため、平面形は不明である。また、遺構の中央部は SB03 の SP224 と重複する。北東—南西方向は最大 2.08m、北西—南東方向は最大 0.93m を測る。床面はほぼ平坦で、遺構検出面からの深さは最大で 8.4cm を測る。出土遺物は、以下で図示するもの他に、須恵器、土師器、黒色土器、縄文土器の小片が出土している。いずれも器表面の風化が著しい。

出土遺物（第 38 図、図版 12）

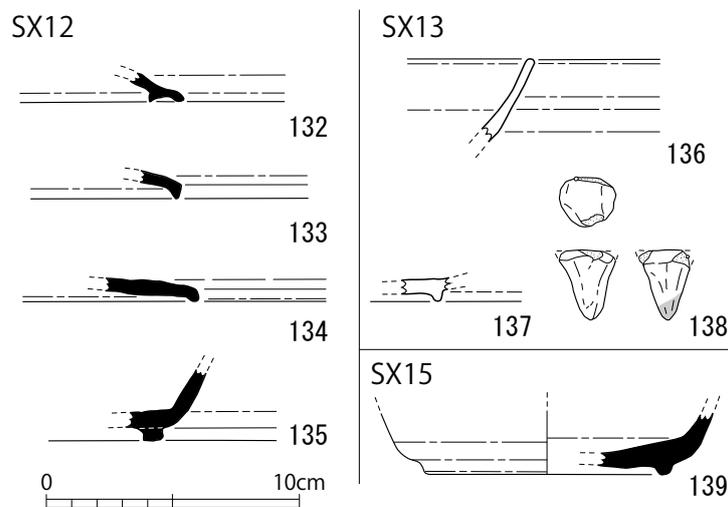
瓦器

椀（136・137）136 は椀の口縁部片で、ミガキはみられないが器面が平滑に仕上げられる。内外面に炭素が吸着する。137 は椀の底部小片で、低い高台がつく。器面があられているが外面に炭素が吸着する。

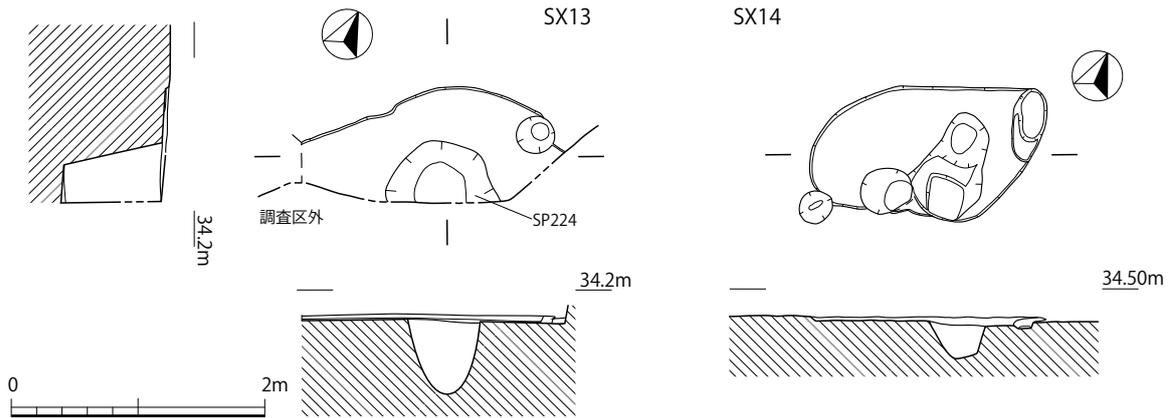
土製品（138）窯道具様の円錐形をした土製品であろうか。円錐頂部がわずかに被熱する。

SX14（第 39 図）

調査区の中央部、SX07 の南西 2m に位置する。略東西方向に長軸をとる。土坑の中央部から南部にかけて複数のピットが重複する。平面プランは、土坑西側が半円形を呈し、東側はややいびつな方形に近い形態を呈する。東西の長軸方向は最大 1.89m、南北方向は最大 1.08m を測る。床面は、中央付近のピット群をはさんで西側が東側に対して 4～6cm ほど高い。遺構検出面からの深さ



第 38 図 SX12・13・15 出土遺物実測図 (S=1/3)



第 39 図 SX13・14 実測図 (S=1/60)

は土坑東側で最大で 8.3cm を測る。出土遺物は土器の細片が出土しているが、器表面の風化が著しく詳細は不明である。

SX15 (第 40 図、図版 9)

調査区の南半部、SX09 の南東 3.2m に位置する。略南北方向に長軸をとる。土坑の南部分は北側に比べ 10cm 程低くなっている。土坑の東側中央はピットに切られている。また、土坑北西部分の上面は溝状の攪乱で消失している。平面プランは、南北にやや長く南が膨れる方形を呈する。南北方向は最大 1.23m、東西方向は最大 1.05m を測る。床面は、土坑中央部で一段低くなるが、一段低い床面はほぼ平らである。遺構検出面からの深さは土坑北側で最大で 5.0cm、南側で 17.2cm を測る。図示した遺物の他に、遺構検出面以下、全面に粘土が充填していた。

出土遺物 (第 38 図)

須恵器

杯 (139) 杯身の底部で、低い高台が付く。焼成不良で還元が不十分である。底径は 10.0cm に復元できる。

5) ピット出土遺物

SP01 出土遺物 (第 41 図、図版 7)

石製品

石庖丁 (140) 頁岩製の石庖丁である。2ヶ所穿孔するが、穿孔部は製品の中央になく片側に偏っている。背部に刻み状の打ち欠きが見られる。

SP02 出土遺物 (第 41 図)

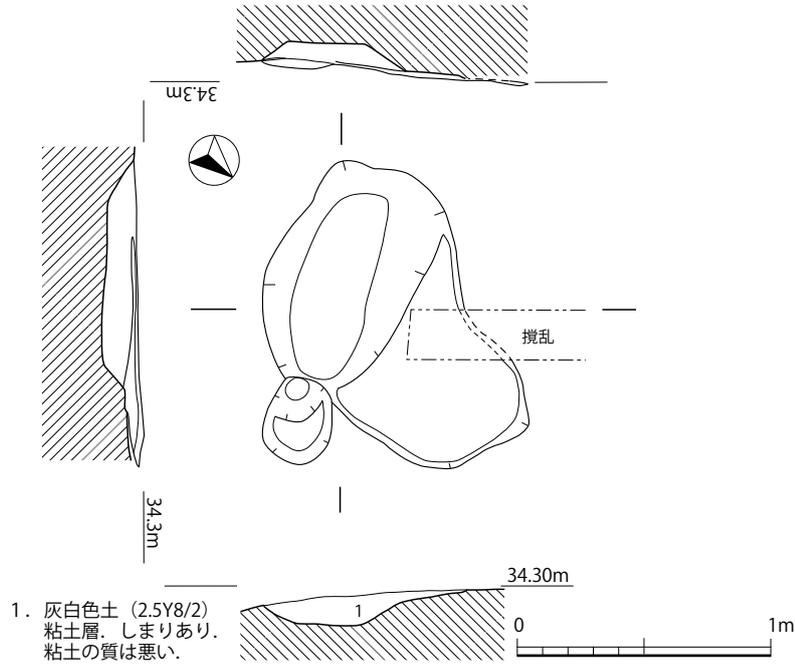
土師器

皿 (141) 小皿である。口径は 11.0cm に復元でき、器高は 1.3cm である。底部はヘラ切りで、内外面ナデである。

SP04 出土遺物 (第 41 図)

須恵器

杯 (142) 杯身の口縁から体部にかけての破片で、口径は 15.2cm に復元できる。



第 40 図 SX15 実測図 (S=1/30)

SP10 出土遺物 (第 41 図、図版 7・12)

土師器

皿 (143・144) 143 と 144 は小皿で、底部はへら切りである。143 の口縁部内外面には赤色の顔料が付着している。

SP12 出土遺物 (第 41 図)

土師器

皿 (145) 小皿で、口径は 9.2cm に復元でき、器高は 0.9cm である。底部はへら切り後ナデである。

SP17 出土遺物 (第 41 図)

黒色土器

椀 (146) 黒色土器 B 類で、口径は 15.8cm に復元できる。内外面ともミガキである。

SP21 出土遺物 (第 41 図)

須恵器

蓋 (147) 蓋の口縁部片である。杯蓋にしては器壁が厚く、かえり部分も厚みがある。

瓶子 (148) 瓶の頸部から肩にかけての破片で、頸部から内面は回転ナデで肩部はケズリである。

SP22 出土遺物 (第 41 図、図版 12)

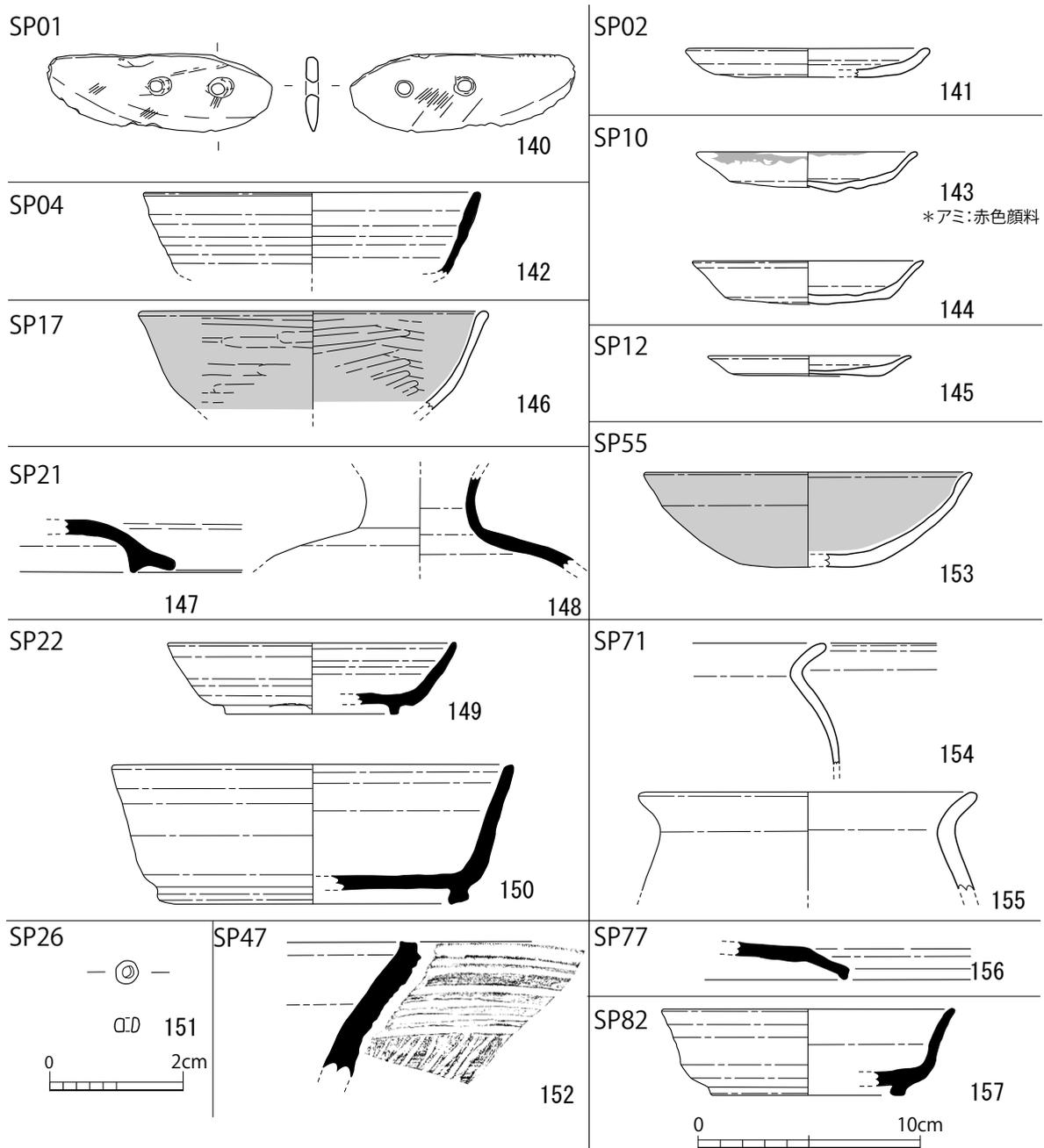
須恵器

杯 (149・150) 杯 B の身である。149 は体部が外方に開き器高が低い。底部やや内側に低い高台がつく。150 は体部が直線的に外方へ開き、低い高台がつく。

SP26 出土遺物 (第 41 図、図版 12)

ガラス製品

小玉 (151) 青緑色半透明の小玉である。径 0.38cm、厚さ 0.2cm である。



第41図 ピット出土遺物実測図(1) (151はS=1/1、その他はS=1/3)

SP47 出土遺物 (第41図)

須恵器

甕 (152) 口縁部片である。口縁部外面に横走沈線を複数めぐらし、その下位に斜線文を施す。

SP55 出土遺物 (第41図)

黒色土器

椀 (153) 黒色土器B類の椀である。丸みを持つ体部から口縁部にかけて、原形である丸底杯の底部と体部の境がわずかに稜として残る。

SP71 出土遺物（第 41 図）

土師器

甕（154・155）154 の口縁部は強く外反し、胴部は丸みを持って膨らむ。155 はあまりふくらまない胴部から外反する口縁に至る器形である。

SP77 出土遺物（第 41 図）

須恵器

杯（156）杯蓋の口縁から体部にかけての小片で、口縁のかえりはなく、端部が下方にわずかに折れる。

SP82 出土遺物（第 41 図）

須恵器

杯（157）杯 B の身で、底部と体部の境が丸みを持ち、体部は外方に開く。底部やや内側に低い高台が付く。

SP125 出土遺物（第 42 図、図版 12）

土製品

棒状土製品（158）棒状土製品の破片で両端部を欠損する。断面には粘土を巻いた際の間隙が中央部に残る。

SP128 出土遺物（第 42 図）

弥生土器

壺（159）底部の小片で、内外面ナデである。

SP132 出土遺物（第 42 図、図版 12）

土師器

甕（160）口縁部から胴部の破片で、丸く膨らむ胴部から強く外反する口縁に至る。

SP142 出土遺物（第 42 図）

石製品

削器（161）安山岩製の削器であろう。刃部が明瞭に作り出されているが、片面に自然面が広く残る。

SP162 出土遺物（第 42 図）

瓦器

椀（162）瓦器椀であるが、高台が剥離している。外面を中心に炭素が吸着する。

SP196 出土遺物（第 42 図、図版 12）

瓦器

椀（163）底部から口縁にかけて浅く開き、低く委縮した高台がつく。焼け歪みで器形がゆがんでいる。

SP244 出土遺物（第 42 図、図版 12）

土師器

高杯（164・165）164・165 とともに高杯の脚部基部の破片である。164 は脚部から屈曲して杯部にいたる。外面に顔料が残存する。脚部内面に絞り痕がみられる。165 は低く開く脚部からゆる

く湾曲して杯部にいたる。

甕（166）球胴形の胴部をした甕である。頸部から口縁部を欠損する。内面は斜方向と横方向のハケメである。胴部上半外面には煤が付着する。

SP246 出土遺物（第 42 図）

土師器

椀（167）椀の口縁部片である。口縁端部がわずかに外反し、その下で器壁が若干厚くなる。

SP248 出土遺物（第 42 図）

須恵器

杯（168）杯蓋でつまみが基部から剥離する。外面にヘラ記号がみられる。

SP255 出土遺物（第 42 図）

須恵器

甕（169）小形の甕の口縁部片である。内外とも回転ナデで自然釉がかかる。

6) その他の出土遺物

遺構から出土した遺物の他に、包含層からも少数の遺物が出土している。SX03 周辺上層から出土した遺物、その他の遺構検出面・包含層出土遺物の順に述べる。また、以下に示す遺物以外に、黒曜石の石核片や表面の摩耗した円礫などが出土している。また、出土地は不明であるが、弥生土器の器台端部片、安山岩の剝片なども出土している。

SX03 周辺上層出土遺物（第 43 図）

須恵器

杯（170～173）170 は杯 G 蓋の口縁部片である。171～173 は杯身の底部片で、171 は底部のやや内側に外に向く高台がつく。172 は底部と体部の境が不明瞭で、外に向く高台がつく。173 は底部やや内側に低い高台がつく。

甕（174～176）174 と 175 は小形の甕口縁部片である。174 はナデで口縁部外面が面をなす。175 は粘土貼り付けにより口縁部外面に面を形成する。口縁部下位はカキメである。176 は胴部から短く外反して口縁にいたる。口縁部内外面は回転ナデ、その下位はタタキである。

土師器

杯（177）押し出し技法による杯である。体部外面に稜があり口縁部下で器壁が一端薄くなる。

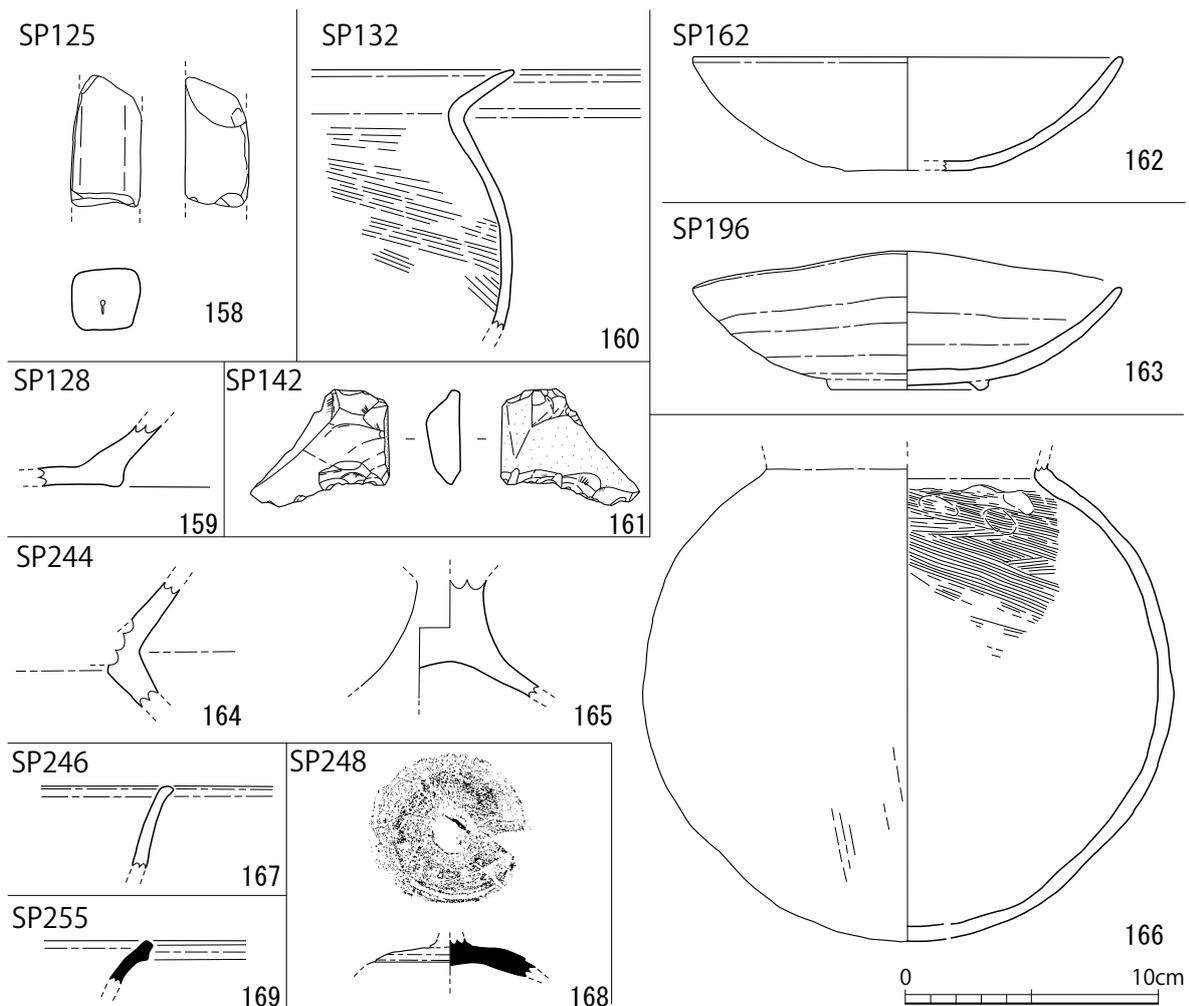
瓦器

椀（178・179）178 は椀の口縁部片で、口縁部外面に重ね焼きの痕跡がみられる。179 は椀の底部で、内面はミガキである。

包含層出土遺物（第 43 図）

須恵器

杯（180～184）180 と 181 は杯蓋である。180 は扁平な宝珠形のつまみをもつ。181 は口縁部小片でかえりはなく、端部を短く下方に折り、丸く仕上げる。182 から 184 は杯身の底部である。182 と 183 はいずれも底部と体部の境が不明瞭で、低い高台がつく。184 も底部と体部の境は明瞭ではないが、底部やや内側に高台がつく。



第 42 図 ピット出土遺物実測図 (2) (S=1/3)

鉢 (185・186) 185 は小形の鉢であろう。口縁端部が短く外反する。内外面とも回転ナデである。186 は平坦な底部から体部が直線的に開く鉢の底部片である。

土師器

鍋 (187) 口縁部片で外面に強く煤が付着し、内面は器面が荒れている。

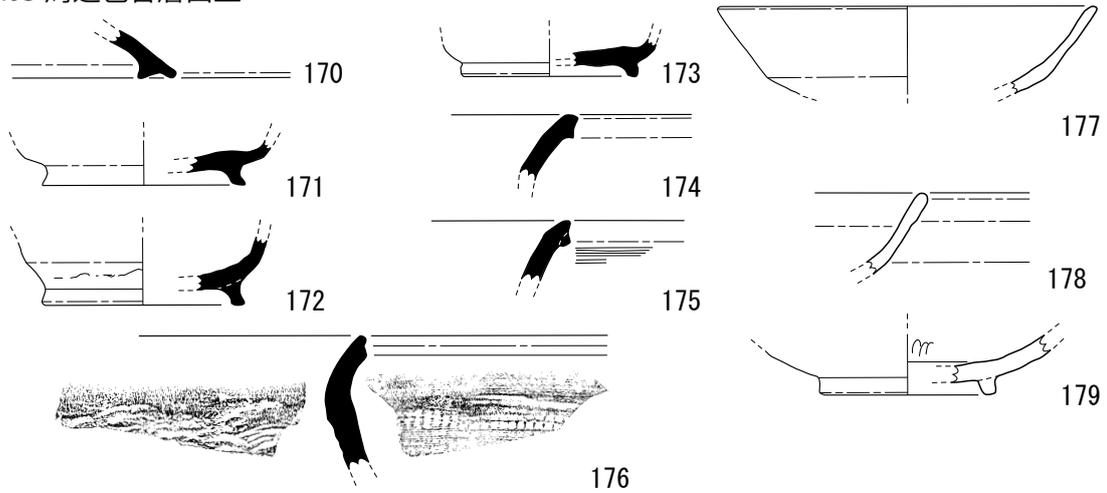
瓦器

椀 (188) 椀底部で断面逆三角形の低い高台がつく。内面は器面が荒れるが丁寧なナデである。

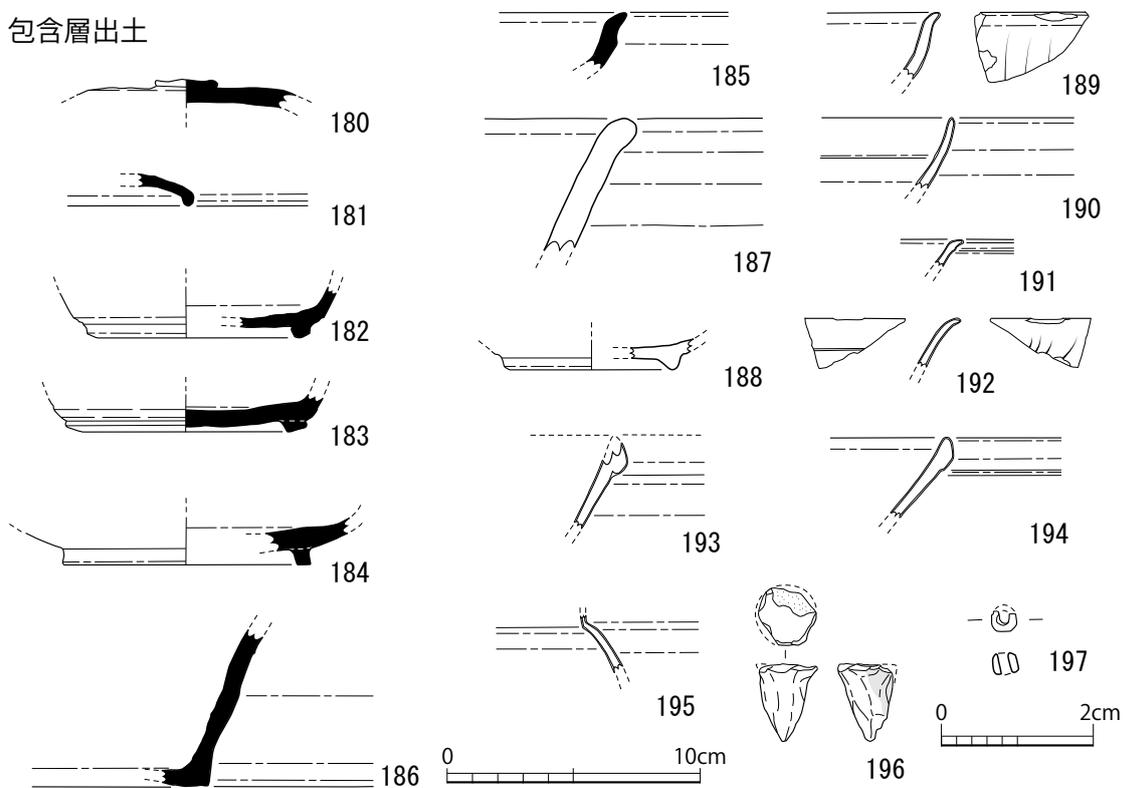
磁器

椀 (189 ~ 194) 189・190 は青磁椀である。189 は口縁部片で端部がわずかに外反する。体部外面に細い縦方向の櫛目文を施す。同安窯系椀 I 類であろう。190 も口縁部片で、内面に圈線状の沈線が 1 条めぐり、内外面に施釉する。191 ~ 194 は白磁椀である。191 は口縁部小片で、端部がわずかに外反する。口縁部外面が凹線状にくぼむ。192 も口縁部片で、端部が短く外反し上端部がわずかに水平になる。体部内面に沈線が 1 条めぐり、外面には縦篋文が施される。193 と 194 はともに玉縁状の口縁部片で、白磁 IV 類である。194 は気泡が目立つ。

SX03 周辺包含層出土



包含層出土



第 43 図 その他の出土遺物 (197 は S=1/1、その他は S=1/3)

陶器

壺 (195) 壺の肩部小片である。肩はあまり張らず胴部にいたる。内外面に施釉し、釉は灰色がかかったオリーブ色である。素地はにぶい黄色味を帯びる。

土製品 (196) 円錐形の土製品で、器種あるいは用途など詳細は不明。外面にわずかに被熱痕がみられる。全体がナデで成形される。

ガラス製品

小玉 (197) 一部欠損するが、径は 0.35cm で色は半透明青緑色である。

表4 牛頭本堂遺跡群第18次調査出土遺物観察表①

遺物番号	種類	器種	出土地点	法量(cm・g)	形態・技法・文様の特徴	A:胎土 B:焼成 C:色調	備考
				①口径②器高③底径④高台径 ⑤最大径※(復元値)<残存値>			
16	石製品	石鏃	SC01 上層 (I区)	全長3.05 幅2.1 最大厚0.5 重さ3.9			安山岩製
17	石製品	石鏃	SC01 4区 上面	全長2.3 幅2.1 最大厚0.9 重さ3.6			黒曜石製
18	弥生土器	壺	SC02壁溝 (南側)	②(3.8) ③(10.2)	内外面ナデ? 底部内外面指オサエ	A:4mm以下の長石を含む B:良好 C:内10YR8/3 浅黄褐色 外10YR8/2 灰白色	
19	弥生土器	鉢	SC02壁溝 (南側)	①(28.5) ②(14.75)	内外面ナデ・指オサエ	A:5mm以下の白色砂粒、長石、微細な石英を含む B:良好 C:内外10YR8/2 灰白色~10YR4/1 褐灰色	内面工具痕あり 内外面下位黒斑 粘土紐痕あり
20	弥生土器	鉢	SC02壁溝 (南側)	②(5.55)	内外面ナデ	A:3mm以下の長石を含む B:良好 C:内10YR8/1 灰白色~10YR6/1 褐灰色 外10YR8/2 灰白色~10YR5/2 灰黄褐色	
21	弥生土器	不明	SC02壁溝 (北側)	②(3.8)	内外面ナデ 内外面指頭圧痕あり	A:3mm以下の白色砂粒を多く含む B:やや良好 C:内10YR7/1 灰白色~10YR8/3 浅黄褐色 外10YR8/2 灰白色~10YR8/3 浅黄褐色	
22	焼成粘土塊	粘土塊	SC02上面 南半	残存長7.55 残存幅5.1 最大厚4.35 重さ140.3	指オサエ成形	A:2mm以下の白色砂粒、長石を含む C:7.5YR8/4 浅黄褐色~2.5YR6/8 橙色、7.5YR3/1 黒褐色	
23	弥生土器	壺	SC03	②(2.3) ③(8.0)	内外面ナデ	A:2mm以下の白色砂粒、石英を多く含む B:良好 C:内外10YR7/2 にぶい黄褐色	
24	須恵器	蓋	SB01:SP237	②(1.1)	内外面回転ナデ	A:微細な白色・黒色粒を含む B:良好 C:内外N4/ 灰色~N3/ 暗灰色	
25	須恵器	杯身	SB01:SP160 上層	②(1.75)	外面回転ナデ 内面ナデ	A:微細な白色・黒色粒を含む B:良好 C:内N7/ 灰白色 外N5/ 灰色	
26	土師器	小形甕	SB01:SP159 柱痕	②(3.25)	外面調整不明 口縁部内面下位ハケメ	A:3mm以下の長石、石英を多く、微細な雲母を少し含む B:良好 C:内10YR8/4 浅黄褐色~10YR2/1 黒色 外7.5YR7/4 にぶい橙色~7.5YR6/6 橙色	内面煤付着
27	弥生土器	壺	SB01:SP161 柱痕	②(2.7)	外面調整不明 内面ナデ	A:5mm以下の白色砂粒、長石、石英、微細な雲母を含む B:良好 C:内7.5YR7/4 にぶい橙色 外10YR8/3 浅黄褐色	
28	弥生土器	支脚	SB01:SP237	②(4.8)	外面ハケメ後ナデ 内面ナデ	A:3mm以下の長石を多く含む B:良好 C:内10YR7/3 にぶい黄褐色 外7.5YR5/2 灰褐色	
29	弥生土器	鉢	SB01:SP238 上段	②(1.7)	内外面調整不明 口縁部刻み目突帯貼り付け	A:1mm以下の白色砂粒を多く含む B:良好 C:内10YR6/1 褐灰色 外10YR3/1 黒褐色	
30	縄文土器	浅鉢	SB01:SP160 堀方	②(0.9)	内外面調整不明	A:2mm以下の白色砂粒を多く含む B:良好 C:内外10YR6/3 にぶい黄褐色	
31	石製品	石鏃	SB01:SP238 上段	残存長1.55 最大幅1.3 最大厚2.5 重さ0.3	表裏面ともに風化面残す		黒曜石製
32	須恵器	蓋	SB02:SP205 柱痕	②(1.0)	内外面回転ナデ	A:微細な白色粒子を含む B:良好 C:内外N5/ 灰色	
33	須恵器	蓋	SB02:SP234	②(0.95)	内外面回転ナデ	A:1mm以下の白色粒子を少し含む B:良好 C:内N4/ 灰色 外2.5Y7/1 灰白色	
34	須恵器	蓋	SB02:SP205 堀方	②(1.0)	内外面回転ナデ	A:1mm以下の白色砂粒を含む B:不良 C:内外7.5Y6/4 にぶい褐色	
35	弥生土器	鉢	SB02:SP74	②(1.9)	内外面調整不明 外面刻み目突帯貼り付け	A:2mm以下の白色砂粒、長石、石英を多く含む B:良好? C:内10YR7/3 にぶい黄褐色 外7.5YR3/1 黒褐色~7.5YR6/3 にぶい褐色	器面荒い
36	土師器	椀	SB03:SX06-①	①16.2 ②6.35 ④7.1	底部外面へラ切り 内面ミガキ? 体部外面ナデ	A:3mm以下の白色・黒色砂粒を含む B:良好 C:内10YR8/2 灰白色 外7.5YR8/3 浅黄褐色	内面黒斑あり 歪みあり
37	弥生土器	鉢	SB03:SX06	②(2.3)	内外面条痕 外面刻み目突帯貼り付け	A:2mm以下の白色砂粒、長石、角閃石を含む B:良好 C:内10YR5/2 灰黄褐色 外10YR3/2 黒褐色	
38	石製品	石鏃	SB03:SP222	全長1.6 最大幅1.5 厚さ0.3 重さ0.6			黒曜石製

表5 牛頭本堂遺跡群第18次調査出土遺物観察表②

遺物 番号	種類	器種	出土地点	法量 (cm・g) ①口径②器高③底径④高台 径 ⑤最大径※(復元値)〈残 存値〉	形態・技法・文様の特徴	A:胎土 B:焼成 C:色調			備考
39	土師器	小皿	SB04:SP45	②(1.09)	内外面回転ナデ	A:1mm以下の白色砂粒を含む B:良好 C:内外10Y8/2 灰白色			
40	土師器	小皿	SB04:SP45	②(2.0)	内外面調整不明	A:1mm以下の白色砂粒、3mm以下の石英 を含む B:良好 C:内外10Y8/2 灰白色			
41	石製品	石鏃	SB04:SP56	全長1.6 最大幅1.1 厚さ0.25 重さ0.3				黒曜石製	
42	須恵器	杯身	SB05:SP195	②(2.65)	外面下位ヘラ削り? 他は回転ナデ	A:1mm以下の白色砂粒を含む B:やや軟 質 C:内10YR7/2 にぶい黄橙色 外N6/ 灰色		外面ヘラ記号あり	
43	須恵器	杯身	SB05:SP202 上段	①(10.4) ②3.4 ④(6.3)	内外面回転ナデ	A:2mm以下の白色・黒色砂粒、長石を含む B:良好 C:内N5/ 灰色 外N7/ 灰白色～ N4/ 灰色		外面降灰	
44	土師器	小皿	SB06:SP175	②(1.4)	内外面調整不明	A:2mm以下の長石、石英を少し含む B:良 好 C:内10YR8/3 浅黄橙色 外7.5YR7/3 にぶい橙色～10YR8/3 浅黄橙色			
45	土師器	杯	SB06:SP67	②(3.3)	底部ヘラ切り痕 ナデ 内面ナデ	A:微細な白色砂粒を少し含む B:やや軟 質? C:内外7.5YR7/3 にぶい橙色～ 10YR8/3 浅黄橙色			
46	土師器	椀	SB06:SP187	②(1.8) ④(8.0)	外面回転ナデ? 内面調整不明	A:3mm以下の白色砂粒、長石を多く含む B:やや良好 C:内外10YR8/3 浅黄橙色			
47	須恵器	蓋	SB07:SP51	②(0.7)	内外面回転ナデ	A:微細な白色・黒色砂粒を含む B:良好 C:内7.5Y7/1 灰白色 外N6/ 灰色			
48	須恵器	杯身	SB07:SP51	②(2.5)	内外面回転ナデ	A:微細な白色・黒色砂粒を含む B:良好 C:内N5/ 灰色 外N4/ 灰色～N7/ 灰白色		内面一部灰融着 外面降灰	
49	須恵器	杯蓋	SD01	②(1.3)	内外面回転ナデ	A:微細な白色砂粒を少し含む B:良好 C:内外N5/ 灰色			
50	須恵器	杯蓋	SD01	②(1.0)	内外面回転ナデ	A:微細な白色砂粒を少し含む B:良好 C:内外面N7/ 灰白色			
51	須恵器	杯身	SD01	②(1.45)	内外面回転ナデ	A:1mm以下の白色砂粒を少し含む B:良 好 C:内2.5YR5/2 灰赤色 外N4/ 灰色～ 2.5Y5/2 灰赤色			
52	土師器	椀	SD01	②(1.6) ④(7.1)	底部外面ナデ 外面回転ナデ 内面調整 不明	A:2mm以下の白色砂粒、長石を多く含む B:やや不良 C:内外10YR8/1 灰白色			
53	白磁	椀	SD01	②(1.2)	内外面施釉	A:精良 B:良好 C:釉5Y7/2 灰白色 胎 土5Y8/1 灰白色			
54	白磁	椀	SD01	②(2.2)	内外面施釉 外面蓮弁文か	A:精良 B:良好 C:釉5Y7/2 灰白色 胎 土5Y8/2 灰白色			
55	土師器	小皿	SX03西半	①(9.0) ②1.1 ③(8.0)	底部外面ナデ 他は回転ナデ	A:2mm以下の白色砂粒、雲母を多く含む B:良好 C:内外10YR8/1 灰白色			
56	土師器	小皿	SX03西半	①(10.0) ②0.85 ③(7.15)	外面調整不明 内面ナデ	A:2mm以下の白色砂粒、石英を多く含む B:良好 C:内外10YR8/2 灰白色			
57	土師器	小皿	SX03上面	①(10.0) ②1.15 ③(8.1)	内外面ナデ	A:2mm以下の白色砂粒、石英を多く含む B:良好 C:内外10YR7/1 灰白色			
58	土師器	小皿	SX03	①(10.0) ②1.2 ③(8.0)	底部内外面ナデ 他は調整不明	A:微細な白色砂粒を多く含む B:良好 C:内外10YR7/2 にぶい黄橙色			
59	土師器	小皿	SX03	①10.4 ②1.2 ③8.2	内外面回転ナデ	A:3mm以下の白色砂粒、長石、石英を多く 含む B:良好 C:内外10YR8/2 灰白色～ 10YR6/1 褐灰色			
60	土師器	小皿	SX03	①10.5 ②1.15 ③8.3	底部外面ヘラ切り後ナデ 底部内面ナデ 他は調整不明 底部外面板状圧痕あり	A:3mm以下の白色砂粒、長石、石英、雲母 を多く含む B:良好 C:内10YR8/2 灰白 色～10YR5/1 褐灰色 外10YR8/2 灰白 色、10YR5/1 褐灰色、10YR2/1 黒色		内外面黒斑	
61	土師器	小皿	SX03西半	①(11.0) ②1.1 ③(7.5)	口縁部内面回転ナデ 他は調整不明	A:4mm以下の石英を少し、微細な白色砂 粒を多く含む B:やや不良 C:内外 10YR8/2 灰白色			

表6 牛頭本堂遺跡群第18次調査出土遺物観察表③

遺物番号	種類	器種	出土地点	法量 (cm・g)	形態・技法・文様の特徴	A:胎土 B:焼成 C:色調	備考
				①口径②器高③底径④高台径 ⑤最大径※(復元値)〈残存値〉			
62	土師器	小皿	SX03西半	①(11.0) ②1.4 ③(7.4)	外面調整不明 内面ナデ	A:3mm以下の白色砂粒、石英を多く含む B:良好 C:内外10YR8/2 灰白色	
63	土師器	小皿	SX03	①10.5 ②1.35 ③7.5	底部外面へラ切り 底部内面ナデ一部指オサエ 他は回転ナデ	A:3mm以下の白色砂粒、長石、雲母を含む B:良好 C:内外10YR8/2 灰白色～10YR6/3 にぶい黄橙色	
64	土師器	小皿	SX03	①10.8 ②1.2 ③7.2	底部外面ナデ 他は回転ナデ	A:5mm以下の白色砂粒、長石、石英を多く含む B:良好 C:内外10YR8/2 灰白色	
65	土師器	小皿	SX03西半	①(11.0) ②1.2 ③(8.0)	内外面調整不明	A:2mm以下の白色砂粒、石英を多く含む B:良好 C:内外10YR8/1 灰白色	
66	土師器	小皿	SX03	①10.8 ②1.65 ③7.9	底部外面へラ切り後ナデ 他は調整不明 底部外面板状圧痕あり	A:4mm以下の白色砂粒、長石、石英を多く含む B:良好 C:内外10YR8/2 灰白色	内面工具痕あり
67	土師器	小皿	SX03	①11.0 ②1.4 ③8.2	底部外面ナデ 他は回転ナデ	A:4mm以下の白色砂粒、長石、石英を多く含む B:良好 C:内外10YR8/2 灰白色	
68	土師器	小皿	SX03	①11.1 ②1.55 ③7.8	底部外面へラ切り後ナデ 底部内面回転ナデ一部指オサエ 他は回転ナデ 底部外面板状圧痕あり	A:微細な白色砂粒、雲母を含む B:良好 C:内外10YR8/2 灰白色～10YR6/1 褐灰色	口縁部内面～底部外面薄く煤付着
69	土師器	小皿	SX03西半	①(10.8) ②2.0 ③(8.4)	底部内外面ナデ 他は回転ナデ	A:1mm以下の白色砂粒、長石、雲母を少し含む B:良好 C:内外10YR8/2 灰白色	
70	土師器	小皿	SX03西半	①(12.7) ②1.12 ③(10.0)	内面回転ナデ 他は調整不明	A:2mm以下の白色砂粒、石英を多く含む B:良好 C:内外10YR8/2 灰白色	
71	土師器	丸底杯	SX03	①(14.8) ②3.4	底部外面へラ切り後ナデ 内面不定方向ナデ一部指オサエ 他は回転ナデ 底部外面板状圧痕あり	A:2mm以下の白色砂粒、長石、雲母を含む B:良好 C:内外10YR8/2 灰白色～10YR3/2 黒褐色	外面黒斑のようなものあり
72	土師器	丸底杯	SX03	①(15.0) ②(2.9)	内外面調整不明	A:3mm以下の白色砂粒、長石、石英を多く含む B:良好 C:内外10YR8/2 灰白色	
73	土師器	丸底杯	SX03	①15.2 ②3.2	底部一部指オサエ 他は調整不明	A:3mm以下の長石、石英、微細な白色砂粒を多く含む B:良好 C:内5YR7/6 橙色 外10YR8/3 浅黄橙色～5YR7/6 橙色	
74	土師器	丸底杯	SX03	①(15.4) ②3.3	底部外面へラ切り 内面不定方向ナデ 他は回転ナデ一部指オサエ	A:微細な白色砂粒、雲母を含む B:良好 C:内外10YR8/2 灰白色	
75	土師器	丸底杯	SX03東側	①(16.6) ②(3.2)	口縁部内面一部ヨコナデ 他はミガキか? 調整不明	A:微細な白色砂粒を少し含む B:良好 C:内外10YR8/2 灰白色	
76	土師器	丸底杯	SX03上面	②(1.3)	底部外面へラ切り 内面全面ナデ	A:2mm以下の石英、微細な白色砂粒を少し含む B:良好 C:内10YR8/1 灰白色 外2.5YR4/8 赤褐色	体部外面顔料付着
77	土師器	丸底杯	SX03	①(12.2) ②3.15	底部外面へラ切り後ナデ 底部内面ナデ一部指オサエ 他は回転ナデ 底部外面板状圧痕あり	A:2mm以下の白色砂粒、長石、雲母を含む B:良好 C:内外10YR8/2 灰白色	
78	土師器	丸底杯	SX03	①15.8 ②4.05	内外面調整不明	A:3mm以下の白色砂粒、長石を多く含む B:良好 C:内外7.5YR7/1 灰白色～7.5YR5/1 褐灰色	
79	土師器	丸底杯	SX03	①15.9 ②3.7	底部一部指オサエ 他は調整不明	A:3mm以下の白色砂粒、長石、石英を含む B:良好 C:内外10YR8/3 浅黄橙色	
80	土師器	丸底杯	SX03	①16.6 ②4.1	底部一部指オサエ 他は調整不明	A:3mm以下の長石、石英を少し、微細な白色砂粒を多く含む B:良好 C:内外10YR8/2 灰白色	
81	土師器	丸底杯	SX03	①15.3 ②4.2	底部外面へラ切り 内面ナデ 他は回転ナデ一部指オサエ	A:2mm以下の白色砂粒、長石、雲母を含む B:良好 C:内外10YR8/2 灰白色～10YR3/1 黒褐色	外面煤付着
82	土師器	椀	SX03	①14.5 ②5.3 ④7.1	底部外面へラ切り後回転ナデ 内面不定方向ナデ 体部外面回転ナデ一部指オサエ 見込み中央部に凹みあり	A:微細な白色砂粒、雲母、3mm以下の長石を含む B:良好 C:内外10YR8/2 灰白色	
83	土師器	椀	SX03	①15.6 ②5.2 ④6.9	底部外面へラ切り後回転ナデ 内面ナデ 体部外面回転ナデ	A:微細な白色砂粒を含む B:良好 C:内外10YR8/2 灰白色	内面工具痕あり
84	土師質土器	移動式カマド	SX03	②(20.0) 釜口径(34.2) 焚口最大幅(36.8)	外面ヨコナデ 内面ナデ 口縁部指オサエ	A:4mm以下の砂粒、白色粒をやや多く含む B:良好 C:内7.5YR6/6 橙色～7.5YR3/1 黒褐色 外5YR6/6 橙色～5YR4/1 褐灰色	口縁部内面上位工具痕あり 粘土細痕あり 外面煤付着 内面被熱による黒変 内面椀等の高台貼り付け痕あり

表7 牛頭本堂遺跡群第18次調査出土遺物観察表④

遺物番号	種類	器種	出土地点	法量 (cm・g)	形態・技法・文様の特徴	A:胎土 B:焼成 C:色調	備考
				①口径②器高③底径④高台径 ⑤最大径※(復元値)〈残存値〉			
85	黒色土器	椀	SX03	①15.2 ②6.3 ④6.7	底部外面ナデ 内面平滑に調整 体部外面下位指オサエ 他は回転ナデ	A:微細な白色砂粒、長石、雲母を含む B:良好 C:内10YR8/1 灰白色～N3/ 暗灰色 外10YR8/2 灰白色～N3/ 暗灰色	内面～口縁部外面黒色化 内面工具痕あり 黒色土器A類
86	黒色土器	椀	SX03	①15.8 ②6.35 ④7.45	内面ミガキ 体部外面下位指オサエ 他は回転ナデ	A:2mm以下の白色砂粒、長石、雲母を含む B:良好 C:内2.5Y8/1 灰白色～10YR3/1 黒褐色 外10YR8/2 灰白色～10YR4/1 褐色	内面工具痕あり 黒色土器A類
87	黒色土器	椀	SX03	①(15.8) ②5.85 ④6.8	底部外面ナデ 底部内面指オサエ 内面ミガキ 体部外面下位指オサエ 他は回転ナデ	A:微細な白色砂粒、長石、雲母を含む B:良好 C:内2.5Y8/1 灰白色～10YR3/1 黒褐色 外10YR8/2 灰白色～10YR4/1 褐色	内面工具痕あり 黒色土器A類
88	黒色土器	椀	SX03	①17.9 ②7.1 ④8.85	底部内面中心部指オサエ 内面～口縁部外面一部ミガキ残る 体部外面下位一部指オサエ 他は回転ナデ	A:微細な白色砂粒、長石、雲母を含む B:良好 C:内7.5YR5/1 褐色～7.5YR2/1 黒色 外7.5YR8/4 浅黄褐色～7.5YR3/1 黒褐色	内面～口縁部外面黒色化 黒色土器A類
89	黒色土器	椀	SX03	①15.1 ②5.95 ④6.7	底部外面へラ切り後ナデ 体部内面中位ミガキ 他は調整不明	A:2mm以下の白色砂粒を多く含む B:やや不良 C:内外10YR8/1 灰白色～10YR4/1 褐色、10YR3/1 黒褐色	内面工具痕あり 外面一部黒色化
90	黒色土器	椀	SX03西半	①(15.3) ②(6.15) ④6.2	底部内面ナデ 内外面ミガキ	A:微細な白色砂粒、雲母を含む B:良好 C:内外10YR2/1 黒色	黒色土器B類
91	黒色土器	椀	SX03	①15.6 ②6.15 ④6.9	底部外面へラ切り後ナデ 内外面ミガキ 体部外面下位指オサエ	A:微細な白色砂粒、雲母を含む B:良好 C:内外10YR8/1 灰白色～10YR3/1 黒褐色	見込み中央部が濃く、内外面半分淡く黒色化
92	黒色土器	椀	SX03	①15.75 ②6.05 ④7.05	底部外面へラ切り 内外面ミガキ 体部外面下位指オサエ	A:微細な白色砂粒を含む B:良好 C:内10YR2/1 黒色 外10YR8/1 灰白色～10YR2/1 黒色	内面平行な工具痕あり 黒色土器B類
93	黒色土器	椀	SX03	①15.75 ②5.9 ④6.4	底部外面へラ切り 底部内面調整不明 体部内外面ミガキ 体部外面下位指オサエ	A:微細な白色砂粒、雲母を多く、3mm以下の長石を少し含む B:やや不良 C:内外N3/ 暗灰色	黒色土器B類
94	黒色土器	椀	SX03	①(15.7) ②5.65 ④7.2	外面回転ナデ 内面ミガキ	A:微細な白色砂粒、雲母を含む B:良好 C:内7.5YR2/1 黒色 外10YR8/1 灰白色～10YR3/1 黒褐色	内面～口縁部外面黒色化 黒色土器A類
95	黒色土器	椀	SX03西半	①(15.8) ②5.25 ④(7.4)	体部下位内外面指オサエ 他は回転ナデ	A:2mm以下の白色砂粒、長石を含む B:良好 C:内10YR4/1 褐色～10YR2/1 黒色 外10YR7/2 にぶい黄褐色	黒色土器A類
96	黒色土器	椀	SX03	①(15.0) ②4.45 ④6.8	底部外面へラ切り後ナデ 体部外面中位一部ミガキ 他は調整不明	A:微細な白色砂粒を多く、2mm以下の長石を少し含む B:やや不良 C:内外10YR8/3 浅黄褐色～10YR3/1 黒褐色	口縁部内面一部黒色化 重ね焼き痕あり 黒色土器A類
97	黒色土器	椀	SX03	①(15.3) ②5.6 ④6.7	底部外面へラ切り後ナデ 内面調整不明 一部平滑 他は回転ナデか?	A:2mm以下の白色砂粒、長石を含む B:良好 C:内10YR8/2 灰白色～N4/ 灰色 外10YR8/3 浅黄褐色	口縁部内面黒色化
98	黒色土器	椀	SX03	①(16.8) ②5.75 ④(7.3)	底部外面へラ切り後回転ナデ 内面ミガキ 体部外面下位指オサエ 他は回転ナデ	A:微細な白色砂粒、雲母を含む B:良好 C:内10YR4/1 褐色～10YR2/1 黒色 外10YR8/1 灰白色～10YR3/1 黒褐色	内面～口縁部外面黒色化 黒色土器A類か
99	黒色土器	椀	SX03	①16.2 ②5.7 ④6.8	底部外面へラ切り後ナデ 他は調整不明	A:3mm以下の白色砂粒、長石を多く含む B:やや不良 C:内外2.5Y8/1 灰白色～N4/ 灰色	口縁部内面～口縁部外面一部黒色化
100	黒色土器	椀	SX03西半	①15.7 ②5.5 ④6.9	内外面ミガキ	A:微細な白色砂粒、雲母を含む B:良好 C:内外7.5YR2/1 黒色	黒色土器B類
101	黒色土器	椀	SX03	①16.3 ②5.7 ④7.4	底部外面へラ切り後ミガキ? 内外面ミガキ 体部外面下位指オサエ	A:微細な白色砂粒、3mm以下の長石を少し含む B:良好 C:内外7.5YR4/1 褐色～7.5YR2/1 黒色	黒色土器B類
102	黒色土器	椀	SX03	①15.75 ②5.25 ④(6.2)	内外面ミガキ 体部外面下位指オサエ	A:微細な白色砂粒を多く、3mm以下の長石、石英を少し含む B:良好 C:内N3/ 暗灰色 外N4/ 灰色	黒色土器B類
103	黒色土器	椀	SX03	①16.8 ②5.8 ④7.1	内外面ミガキか 体部外面下位指オサエ 他は回転ナデ	A:微細な白色砂粒、長石、雲母を含む B:良好 C:内10YR4/1 褐色 外10YR4/1 褐色～10YR2/1 黒色	内面平行な工具痕あり 黒色土器B類
104	黒色土器	椀	SX03西半	①(15.4) ②5.85 ④(6.2)	体部下位内外面指オサエ 内外面ミガキ	A:微細な白色砂粒、雲母を多く含む B:良好 C:内外10YR3/1 黒褐色	黒色土器B類
105	黒色土器	椀	SX03	①(15.8) ②5.35 ④(6.7)	底部外面ナデ 内面ミガキ 体部中位指オサエ 他は回転ナデ	A:2mm以下の白色砂粒、長石、雲母を含む B:良好 C:内10YR8/1 灰白色～10YR2/1 黒色 外10YR8/2 灰白色～10YR3/1 黒褐色	外面一部黒色化
106	黒色土器	椀	SX03東側	①(15.65) ②(3.2)	内外面回転ナデ	A:微細な白色砂粒を含む B:やや良好 C:内外10YR8/1 灰白色～10YR3/1 黒褐色	器面荒れ 内面～口縁部外面一部黒色化
107	黒色土器	椀	SX03東側	②(4.1)	内外面ミガキ	A:2mm以下の長石、微細な白色砂粒を含む B:良好 C:内外10YR2/1 黒色	黒色土器B類

表8 牛頭本堂遺跡群第18次調査出土遺物観察表⑤

遺物番号	種類	器種	出土地点	法量 (cm・g)		形態・技法・文様の特徴	A:胎土 B:焼成 C:色調			備考
				①口径②器高③底径④高台径 ⑤最大径※(復元値)〈残存値〉						
108	黒色土器	椀	SX03西半	②(4.9)		内外面ミガキ	A:微細な白色砂粒、雲母を含む B:良好 C:内外10YR3/1 黒褐色		黒色土器B類	
109	黒色土器	椀	SX03東側	②(5.2)		内外面ミガキ	A:微細な白色砂粒、雲母を含む B:良好 C:内10YR3/1 黒褐色 外10YR7/2 にぶい 黄褐色～10YR4/1 褐灰色		黒色土器B類	
110	黒色土器	椀	SX03東側	②(2.1) ④(7.45)		内面ミガキ? 外面回転ナデ 底部外面 板状圧痕?	A:微細な白色砂粒、雲母を含む B:良好 C:内10YR6/3 にぶい黄褐色～10YR2/1 黒色		黒色土器B類 歪みあり	
111	黒色土器	椀	SX03	②(3.65) ④6.15		内外面ミガキ 体部外面下位指オサエ 他は回転ナデ	A:微細な白色砂粒、雲母を含む B:良好 C:内10YR4/1 褐灰色 外10YR4/1 褐灰色 ～10YR3/1 黒褐色		内面工具痕あり 黒色土器 B類	
112	黒色土器	椀	SX03西半	②(3.45) ④6.7		底部内面ナデ 内外面ミガキ	A:微細な白色砂粒、雲母を含む B:良好 C:内外10YR2/1 黒色		黒色土器B類	
113	黒色土器	椀	SX03	②(4.5) ④6.8		底部外面ナデ 内面調整不明 外面ミガ キ 体部外面下位指オサエ	A:1mm以下の白色砂粒を多く含む B:や や良好 C:内10YR2/1 黒色 外10YR6/1 褐灰色～10YR2/1 黒色		黒色土器B類	
114	黒色土器	椀	SX03	②(4.3) ④6.9		底部外面へラ切り後回転ナデ 内外面ミ ガキ 体部外面下位指オサエ	A:微細な白色砂粒、雲母を含む B:良好 C:内外7.5YR2/1 黒色		底部内面工具痕あり 黒色 土器B類	
115	黒色土器	椀	SX03	②(4.05) ④6.8		底部外面へラ切り 底部内面指オサエ 内面ミガキか? 他は回転ナデ	A:微細な白色砂粒を多く、3mm以下の長 石、石英を少し含む B:やや不良 C:内 N5/ 灰色～N3/ 暗灰色 外2.5Y6/1黄灰色			
116	黒色土器	椀	SX03	②(3.9) ④7.3		内外面ミガキ 他は回転ナデ	A:微細な白色砂粒をやや多く、4mm以下の 長石を少し含む B:良好 C:内外N2/ 黒 色		内面工具痕あり 黒色土器B類	
117	黒色土器	椀	SX03西半	②(3.6) ④7.1		体部下位内外面指オサエ 内外面ミガキ 底部外面板状圧痕あり	A:1mm以下の白色砂粒、長石、雲母を多く 含む B:良好 C:内外10YR3/1 黒褐色		黒色土器B類	
118	黒色土器	椀	SX03上面	②(2.95) ④(7.5)		内外面回転ナデ	A:微細な白色砂粒、雲母を含む B:良好 C:内10YR6/1 褐灰色 外7.5YR7/3 にぶ い橙色～2.5YR7/4 淡赤褐色		内面不十分な黒色化	
119	黒色土器	椀	SX03西半	②(3.0) ④6.2		内面調整不明 外面回転ナデ	A:微細な白色砂粒、石英、雲母を含む B: 良好 C:内N4/ 灰色 外2.5Y7/1 灰白色 ～N4/ 灰色		黒色土器B類?	
120	須恵器	蓋	SX07南半	②(1.4)		天井部外面回転へラ削り 天井部内面不 定方向ナデ 他は回転ナデ	A:微細な白色・黒色砂粒を含む B:良好 C:内外2.5YR7/1 灰白色			
121	土師器	小皿	SX07	①(9.6) ②1.1 ③(7.1)		底部外面へラ削り 底部内面ナデ 他は 回転ナデ	A:2mm以下の白色砂粒を含む B:良好 C:内外10YR8/1 灰白色			
122	土師器	小皿	SX07上面	①(10.4) ②0.95 ③(8.6)		底部内外面ナデ 他は回転ナデ	A:3mm以下の白色砂粒、雲母を含む B: 良好 C:内10YR8/2 灰白色 外10YR8/1 灰白色			
123	土師器	小皿	SX07	①(10.6) ②(1.15) ③(8.2)		底部外面へラ削り 底部内面ナデ 他は 回転ナデ	A:1mm以下の白色砂粒を含む B:良好 C:内外10YR8/3 浅黄褐色			
124	土師器	杯	SX07	②(1.2) ③7.4		底部外面へラ削り 底部内面ナデ 他は 回転ナデ	A:1mm以下の白色砂粒を含む B:良好 C:内10YR8/1 灰白色 外10YR8/2 灰白色		底部外面工具痕あり	
125	土師器	杯	SX07上面	②(2.2)		底部外面へラ削り 他はナデ	A:2mm以下の白色砂粒を含む B:良好 C:内10YR8/2 灰白色 外10YR8/2 灰白色 ～10YR5/1 褐灰色		底部外面板状圧痕あり 外 面黒斑	
126	瓦	平瓦	SX07	残存長5.2 残存幅7.6 最大 厚1.8		凸面一部縄目叩き痕	A:1mm以下の白色砂粒を含む B:良好 C:凹面10YR8/2 灰白色 凸面10YR8/3 浅 黄褐色～10YR5/1 褐灰色		凸面一部黒斑	
127	黒色土器	椀	SX07	②(2.4)		内外面ミガキ	A:3mm以下の白色砂粒を含む B:良好 C:内外面10YR4/1 褐灰色～10YR3/1 黒 褐色		黒色土器B類	
128	黒色土器	椀	SX07上面	②(3.7)		外面ナデ 内面ミガキ	A:1mm以下の白色砂粒、雲母を含む B: 良好 C:内7.5YR5/1 褐灰色 外7.5YR3/1 黒褐色		外面工具痕あり	
129	黒色土器	椀	SX07上面	①(17.0) ②(4.5)		内外面回転ナデ?	A:2mm以下の白色砂粒、石英、雲母を含 む B:良好 C:内外7.5YR3/1 オリーブ黒 色		黒色土器B類	
130	黒色土器	椀	SX07上面	②(1.55) ④(6.0)		底部内外面ナデ 高台部回転ナデ	A:3mm以下の白色砂粒を含む B:良好 C:内10YR4/1 褐灰色 外10YR8/2 灰白色		内面黒色化	

表9 牛頭本堂遺跡群第18次調査出土遺物観察表⑥

遺物番号	種類	器種	出土地点	法量 (cm・g)	形態・技法・文様の特徴	A:胎土 B:焼成 C:色調	備考
				①口径②器高③底径④高台径 ⑤最大径※(復元値)〈残存値〉			
131	弥生土器	小形甕	SX08	②(3.5)	内外面不定方向ナデ	A:3mm以下の白色砂粒を多く含む B:良好 C:内外5YR3/1 黒褐色～5YR3/4 暗赤褐色	口縁部内面ハケメ状の調整痕
132	須恵器	杯蓋	SX12	②(1.1)	内外面回転ナデ	A:微細な白色砂粒を少し含む B:良好 C:内外N5/ 灰色	
133	須恵器	杯蓋	SX12	②(1.1)	内外面回転ナデ	A:微細な白色砂粒を少し含む B:良好 C:内外N7/ 灰白色～N6/ 灰色	
134	須恵器	杯蓋	SX12	②(0.9)	天井部外面回転ヘラ削り 他は回転ナデ	A:1mm以下の白色砂粒を含む B:良好 C:内外N7/ 灰白色～N6/ 灰色	
135	須恵器	杯身	SX12	②(2.75)	底部外面ヘラ切り後ナデ 他は回転ナデ	A:1mm以下の白色・黒色砂粒を含む B:良好 C:内5PB7/1 明青灰色 外5PB7/1 明青灰色～5PB6/1 青灰色	
136	瓦器	椀	SX13	②(3.3)	内外面回転ナデ	A:微細な白色粒子を含む B:良好 C:内N7/ 灰白色～N4/ 灰色 外N8/ 灰白色～N5/ 灰色	
137	瓦器	椀	SX13	②(1.0)	内外面ナデ	A:微細な白色粒子を含む B:やや不良 C:内7.5Y8/1 灰白色 外7.5Y8/1 灰白色～7.5Y3/1 オリーブ黒色	
138	土製品	不明	SX13	②2.75 最大径2.2 重さ7.0	ナデ成形	A:微細な白色砂粒、2mm以下の長石を含む B:良好 C:10YR8/2 灰白色	被熱痕あり
139	須恵器	杯身	SX15	②(2.45) ④(10.0)	底部内外面ナデ 他は回転ナデ	A:3mm以下の白色砂粒を含む B:やや良好 C:内10YR6/1 褐灰色 外10YR6/1 褐灰色～10YR4/1 褐灰色、7.5YR7/4 にぶい、橙色	焼成不良のため還元不十分
140	石製品	石庖丁	SP01	全長3.5 最大幅10.0 厚さ0.5 孔径0.6 重さ36.9	2ヶ所穿孔あり		頁岩
141	土師器	小皿	SP02	①(11.0) ②1.3	底部外面ヘラ削り 他は回転ナデ	A:2mm以下の白色砂粒、微細な雲母を少し含む B:良好 C:内外7.5YR8/3 浅黄褐色	底部外面付着物あり
142	須恵器	杯	SP04	①(15.2) ②(3.7)	内外面回転ナデ	A:3mm以下の白色砂粒、微細な黒色粒を含む B:良好 C:内外5PB5/1 青灰色	
143	土師器	小皿	SP10	①10.0 ②1.8	底部外面ヘラ削り 他は回転ナデ 底部外面板状圧痕あり	A:3mm以下の白色砂粒、雲母を少し含む B:良好 C:内外10YR8/3 浅黄褐色	口縁部内外面赤色顔料付着
144	土師器	小皿	SP10	①(10.4) ②(1.95)	底部外面ヘラ削り後ナデ 他は回転ナデ 底部外面板状圧痕あり	A:1mm以下の白色砂粒、微細な雲母を含む B:良好 C:内外7.5YR8/3 浅黄褐色	
145	土師器	小皿	SP12	①(9.2) ②0.9	底部外面ヘラ削り後ナデ 他は回転ナデ	A:1mm以下の白色砂粒、石英を含む B:良好 C:内外10YR8/2 灰白色	
146	黒色土器	椀	SP17	①(15.8) ②(4.45)	内外面ミガキ	A:1mm以下の白色砂粒、石英を含む B:良好 C:内外10YR1.7/1 黒色	黒色土器B類
147	須恵器	蓋	SP21	②(2.35)	天井部外面回転ヘラ削り 他は回転ナデ	A:2mm以下の白色・黒色砂粒を含む B:良好 C:内5Y5/1 灰色 外7.5Y4/1 灰色	外面降灰
148	須恵器	瓶	SP21	②(4.3) 頸部径(5.6)	肩部外面削り 他は回転ナデ	A:2mm以下の白色砂粒、石英を含む B:良好 C:内外10YR7/1 灰白色	
149	須恵器	杯身	SP22	①(13.0) ②3.2 ④(7.8)	底部内外面ナデ 他は回転ナデ	A:微細な白色粒子を含む B:良好 C:内N7/ 灰白色 外N7/ 灰白色～N6/ 灰色	粘土痕あり
150	須恵器	杯身	SP22	①(19.2) ②6.3 ④(14.0)	底部内外面ナデ 他は回転ナデ	A:2mm以下の白色粒子を含む B:良好 C:内N6/ 灰色 外N7/ 灰白色	底部外面ハケ状の痕跡あり
151	ガラス製品	小玉	SP26	長さ0.38 径0.38 厚さ0.2 孔径0.2 重さ0.1		C:青緑色半透明	
152	須恵器	甕	SP47	②(6.0)	内外面回転ナデ 外面下位斜線文	A:2mm以下の白色粒子を含む B:良好 C:内N5/ 灰色 外N6/ 灰色	
153	黒色土器	椀	SP55	①(14.8) ②4.3	底部外面ヘラ削り 底部内面、口縁部外面ミガキ 体部外面調整不明 体部内面ナデ	A:2mm以下の白色砂粒を含む B:良好 C:内5Y4/1 灰色 外7.5Y5/1 灰色～7.5Y3/1 オリーブ黒色	黒色土器B類

表 10 牛頭本堂遺跡群第 18 次調査出土遺物観察表⑦

遺物 番号	種類	器種	出土地点	法量 (cm・g)	形態・技法・文様の特徴	A:胎土 B:焼成 C:色調	備考
				①口径②器高③底径④高台 径 ⑤最大径※(復元値)〈残 存値〉			
154	土師器	甕	SP71	②(5.5)	内外面調整不明	A:2mm以下の白色砂粒を多く含む B:良好 C:内7.5YR6/4 にぶい橙色 外7.5YR6/6 橙色	
155	土師器	甕	SP71	①(15.2) ②(4.5)	外面回転ナデ 体部内面ナデ 口縁部内 面調整不明	A:2mm以下の白色砂粒を多く含む B:良好 C:内外10YR7/2 にぶい黄橙色	
156	須恵器	杯蓋	SP77	②(1.7)	天井部外面回転ヘラ削り 他は回転ナデ	A:1mm以下の白色・黒色砂粒を含む B:良好 C:内N5/ 灰色 外N4/ 灰色	
157	須恵器	杯身	SP82	①(13.2) ②3.9 ④(8.7)	内外面回転ナデ	A:1mm以下の白色・黒色砂粒を含む B:良好 C:内7.5YR5/1 褐灰色 外N6/ 灰色 ~N4/ 灰色	
158	土製品	棒状土製品	SP125	残存長5.2 最大幅2.7 厚さ 2.4	ナデ成形	A:2mm以下の白色砂粒を含む B:良好 C:10YR8/2 灰白色~10YR8/3 浅黄褐色	
159	弥生土器	壺	SP128	②(2.5)	内外面ナデ	A:3mm以下の白色砂粒を含む B:やや良好 C:内10YR8/2 灰白色 外10YR8/2 灰 白色~5YR7/8 橙色	
160	土師器	小形甕	SP132	②(10.3)	体部内面ハケメ 他は調整不明	A:2mm以下の白色砂粒を含む B:やや良好 C:内10YR8/2 灰白色~10YR4/1 褐灰 色 外10YR8/1 灰白色~10YR8/3 浅黄橙 色	内面煤付着
161	石製品	削器?	SP142	全長4.7 最大幅5.2 最大厚1.3 重さ32.8			安山岩製
162	瓦器	椀	SP162	①(17.0) ②(4.5)	内外面回転ナデ後ナデ	A:微細な白色粒子、雲母、石英を少し含む B:やや良好 C:内外10YR8/1 灰白色~ 10YR3/1 黒褐色	高台剥離
163	瓦器	椀	SP196	①(17.0) ②5.5 ④6.25	内外面回転ナデ	A:微細な白色・黒色粒子、雲母を少し含む B:やや良好 C:内外N7/ 灰白色~N3/ 暗 灰色	
164	土師器	高杯	SP244	②(5.0)	内外面調整不明 内面下位シボリ痕あり	A:1mm以下の白色砂粒、雲母を含む B: 良好 C:内外7.5YR7/6 橙色	丹塗り
165	土師器	高杯	SP244	②(4.3)	内外面調整不明	A:2mm以下の白色・黒色砂粒、石英を含む B:良好 C:内外2.5YR8/2 灰白色	
166	土師器	甕	SP244	②(19.05) ⑤(21.0) 頸部径 (11.1)	外面調整不明一部ナデ・ハケメ 内面上 位指オサエ後ハケメ 内面下位調整不明	A:4mm以下の砂粒・長石を含む B:良好 C:内10YR7/3 にぶい橙色~10YR2/1 黒 色 外7.5YR7/3 にぶい橙色~7.5YR3/1 黒褐色	底部内面~肩部外面煤付 着
167	土師器	椀	SP246	②(3.25)	内外面ヨコナデ	A:微細な白色粒子を含む B:良好 C:内 外10YR8/4 浅黄褐色~10YR6/6 明黄褐色	
168	須恵器	杯蓋	SP248	②(1.65)	内外面回転ナデ	A:2mm以下の白色砂粒を含む B:良好 C:内10YR6/8 明黄褐色 外10YR7/4 浅黄 褐色	外面ヘラ記号あり
169	須恵器	甕	SP255	②(1.7)	内外面回転ナデ	A:微細な砂粒を含む B:良好 C:内外 10YR4/1 灰色	
170	須恵器	杯蓋	SX03 周辺包含層	②(1.9)	内面ナデ 他は回転ナデ	A:1mm以下の白色砂粒を多く含む B:良 好 C:内外N3/ 暗灰色	
171	須恵器	杯身	SX03 周辺包含層	②(1.75) ④(8.0)	底部内面ナデ 他は回転ナデ	A:1mm以下の白色砂粒を多く含む B:良 好 C:内N6/ 灰色 外N5/ 灰色	
172	須恵器	杯身	SX03 上、包含層	②(2.7) ④(8.0)	内面ナデ 外面回転ナデ	A:微細な白色砂粒、2mm以下の石英を多く 含む B:良好 C:内N5/ 灰色 外N5/ 灰 色、N6/ 灰色	
173	須恵器	杯身	SX03 周辺包含層	②(1.45) ④(7.0)	内外面回転ナデ	A:1mm以下の白色砂粒を多く含む B:良 好 C:内N4/ 灰色 外N6/ 灰色~N4/ 灰 色	
174	須恵器	甕	SX03 上、包含層	②(2.6)	内外面回転ナデ	A:2mm以下の白色砂粒、石英を少し含む B:良好 C:内2.5Y6/1 黄灰色~2.5Y7/1 灰白色 外2.5Y7/1 灰白色	
175	須恵器	甕	SX03 周辺包含層	②(2.5)	外面カキメ 内面回転ナデ	A:3mm以下の白色・黒色砂粒、石英を多く 含む B:良好 C:内外N6/ 灰色	
176	須恵器	甕	SX03 周辺包含層	②(4.9)	頸部外面叩き後カキメ 頸部内面当て具 痕 他は回転ナデ	A:2mm以下の白色砂粒を少し含む B:良 好 C:内N5/ 灰色~2.5YR5/6 明赤褐色 外N6/ 灰色	

表 11 牛頭本堂遺跡群第 18 次調査出土遺物観察表⑧

遺物 番号	種類	器種	出土地点	法量 (cm・g)	形態・技法・文様の特徴	A:胎土 B:焼成 C:色調	備考
				①口径②器高③底径④高台 径 ⑤最大径※(復元値)<残 存値>			
177	土師器	杯	SX03 上、包含層	①(15.0) ②(3.5)	外面調整不明 内面回転ナデ	A:微細な白色砂粒を少し含む B:やや不 良 C:内外7.5YR7/4 に近い橙色	
178	瓦器	椀	SX03 上、包含層	②(3.2)	内外面回転ナデ	A:微細な白色砂粒、長石を含む B:良好 C:内外10YR8/1 灰白色～N4/ 灰色	重ね焼き痕あり 歪みあり
179	瓦器	椀	SX03 上、包含層	②(2.4) ④(7.0)	内面ミガキ 外面ナデ	A:2mm以下の白色・黒色砂粒を多く含む B:良好 C:内N5/ 灰色 外N5/ 灰色、N7/ 灰色	内面重ね焼き痕あり
180	須恵器	杯蓋	検出面	②(1.1) つまみ径2.4 つまみ高0.3	天井部外面ヘラ削り・ナデ 他はナデ	A:2mm以下の白色砂粒、長石、石英を多く 含む B:良好 C:内外N7/ 灰白色	
181	須恵器	杯蓋	検出面	②(1.25)	内外面回転ナデ	A:微細な白色砂粒を多く含む B:良好 C:内N6/ 灰色 外N5/ 灰色	
182	須恵器	杯身	調査区壁面	②(2.05) ③(8.8)	底部内外面ナデ 体部内外面回転ナデ	A:2mm以下の白色砂粒を少し含む B:良 好 C:内外N6/ 灰色	
183	須恵器	杯身	調査区東壁 (拡張時)	②(1.5) ④(9.5)	底部外面回転ヘラ削り後ナデ 底部内面 ナデ 体部外面下位回転ヘラ削り 他は 回転ナデ	A:微細な白色砂粒、雲母を含む B:良好 C:内2.5Y8/1 灰白色 外2.5Y7/1 灰白色	
184	須恵器	杯身	調査区壁面	②(1.9) ④(9.8)	底部ナデ 他は回転ナデ	A:2mm以下の白色砂粒、長石、雲母を含 む B:不良 C:内2.5YR4/3 に近い赤褐色 外2.5YR5/2 灰赤色	
185	須恵器	小形鉢?	壁面清掃 SC02周辺	②(1.9)	内外面回転ナデ	A:2mm以下の白色砂粒を多く含む B:良 好 C:内外5Y5/1 灰色	
186	須恵器	鉢	調査区東壁 (拡張時)	②(6.2)	内外面回転ナデ	A:微細な白色砂粒を少し含む B:良好 C:内N5/ 灰色 外N4/ 灰色	
187	土師器	鍋	調査区壁面	②(5.15)	内外面ヨコナデ	A:2mm以下の白色砂粒を少し含む B:良 好 C:内外N6/ 灰色	外面煤付着
188	瓦器	椀	検出面	②(1.2) ③(6.9)	内外面ナデ	A:白色砂粒を少し含む B:良好 C:内 5Y2/1 黒色 外5Y7/1 灰白色	
189	青磁	椀	調査区東壁 (拡張時)	②(2.7)	内外面施釉 外面櫛目文	A:精良 B:良好 C:釉7.5Y6/3 オリーブ黄 色～2.5GY7/1 明オリーブ灰色 胎土N8/ 灰白色	同安窯系椀
190	青磁	椀	調査区東壁 (拡張時)	②(2.8)	内外面施釉 口縁部内面に圏線が巡る	A:精良 B:良好 C:釉2.5GY6/1 オリーブ 灰色 胎土N8/ 灰白色	
191	白磁	椀	調査区壁面	②(1.1)	内外面施釉	A:精良 B:良好 C:釉7.5Y8/1 灰白色 胎 土5Y8/1 灰白色	
192	白磁	椀	調査区東壁 (拡張時)	②(1.9)	内外面施釉 外面ヘラ描き文	A:精良 B:良好 C:釉10Y8/1 灰白色 胎 土N8/ 灰白色	太宰府分類V-2b類
193	白磁	椀	調査区壁面	②(3.5)	内外面施釉	A:精良 B:良好 C:釉10Y7/1 灰白色 胎 土5Y7/1 灰白色	
194	白磁	椀	調査区東壁 (拡張時)	②(3.2)	内外面施釉	A:やや良 B:良好 C:釉7.5Y7/2 灰白色 胎 土7.5Y8/1 灰白色	太宰府分類IV類 器面に気 泡が目立つ
195	陶器	小壺?	調査区壁面	②(2.55)	内外面施釉	A:精良 B:良好 C:釉5Y6/2 灰オリーブ 色 胎土2.5Y6/3 に近い黄色	
196	土製品	不明	検出面	②3.05 残存最大径2.3 重さ11.1	ナデ成形	A:4mm以下の長石、微細な白色砂粒、石 英、雲母を含む B:良好 C:内外 7.5YR8/2 灰白色～7.5YR6/1褐色	被熱痕あり
197	ガラス製品	小玉	検出面	長さ0.3 径0.35 厚さ0.3 孔径0.15 重さ0.1		C:青緑色半透明	

表 12 牛頭本堂遺跡群第 18 次調査掘立柱建物の柱穴と柱間変異

【柱穴サイズ】												
SB No.	SP No.											
SB01	SP161	SP230	SP238	SP237	SP159	SP160	平均					
桁行径 (cm)	62.4	—	62.4	91.0	60.8	67.4	68.8					
梁間径 (cm)	77.4	—	59.2	71.0	73.2	58.0	67.8					
SB02	SP182	SP205	SP204	SP234	SP74	SP122	平均					
桁行径 (cm)	56.0	72.8	66.0	56.5	69.6	54.0	62.5					
梁間径 (cm)	58.0	69.0	58.4	54.5	68.4	49.4	59.6					
SB03	SP224	SP223	SP222 (SX06)	SP221	SP220	SP267	平均					
桁行径 (cm)	81.8	90.6	96.6	71.1	96.8	93.8	88.5					
梁間径 (cm)	—	76.2	79.9	62.1	—	98.9	79.3					
SB04	SP45	SP56	SP25	SP23	平均							
桁行径 (cm)	82.4	76.7	44.9	—	68.0							
梁間径 (cm)	89.8	66.7	44.8	58.3	64.9							
SB05	SP148	SP173	SP213	SP177	SP180	SP202	SP195	No.num 1	No.num 2	SP155	平均	
桁行径 (cm)	41.9	52.7	—	—	35.0	52.4	47.4	56.3	25.0	43.8	44.3	
梁間径 (cm)	—	51.6	—	45.5	35.2	44.9	50.9	59.0	31.4	43.9	45.3	
SB06	SP67	SP134	SP137	SP187	SP178	SP175	SP227	SP172	SP32	SP41	平均	
桁行径 (cm)	31.7	29.5	31.4	29.0	32.3	32.7	36.4	32.4	31.8	35.6	32.3	
梁間径 (cm)	37.2	33.0	28.5	30.4	28.6	38.6	28.3	45.4	33.9	38.3	34.2	
SB07	SP247	SP86	SP88	SP65	No.num1	SP51	No.num2	平均				
桁行径 (cm)	42.8	26.3	33.3	34.4	23.3	28.2	25.2	30.5				
梁間径 (cm)	47.3	27.9	29.9	40.1	27.8	24.7	20.4	31.2				

【柱間】												
SB No.	柱間											
SB01	SP161-230	SP230-238	SP238-237	SP237-159	SP159-160	SP160-161	SP160-238	平均				
桁行間 (cm)	—	207.0	208.8	—	208.6	207.6	—	208.0				
梁間間 (cm)	280.0	—	—	280.4	—	—	269.4	276.6				
SB02	SP74-122	SP122-182	SP182-205	SP205-204	SP204-234	SP234-74	平均					
桁行間 (cm)	243.8	246.0	—	231.1	258.7	—	244.9					
梁間間 (cm)	—	—	286.8	—	—	298.4	292.6					
SB03	SP220-267	SP267-224	SP224-223	SP223-222	SP222-221	SP221-220	平均					
桁行間 (cm)	284.8	276.9	—	291.9	269.2	—	280.7					
梁間間 (cm)	—	—	321.6	—	—	322.8	322.2					
SB04	SP45-56	SP56-25	SP25-23	SP23-45	平均							
桁行間 (cm)	229.7	—	219.8	—	224.8							
梁間間 (cm)	—	344.8	—	345.2	345.0							
SB05	SP148-173	SP173-213	SP213-177	SP177-180	SP180-202	SP202-195	SP195- No.num1	No.num1- No.num2	No.num2- 155	SP155-148	平均	
桁行間 (cm)	—	—	130.8	165.6	146.0	—	—	139.2	143.8	158.2	147.3	
梁間間 (cm)	155.5	191.9	—	—	—	183.9	186.0	—	—	—	179.3	
SB06	SP67-134	SP134-137	SP137-187	SP187-178	SP178-175	SP175-227	SP227-172	SP172-32	SP32-41	SP41-67	平均	
桁行間 (cm)	235.6	219.8	236.5	—	—	231.4	232.4	226.5	—	—	230.4	
梁間間 (cm)	—	—	—	200.2	202.3	—	—	—	199.9	209.8	203.1	
SB07	SP247-86	SP86-88	SP88-6	SP65- No.num1	No.num1- 51	SP51- No.num2	No.num2- 247	平均				
桁行間 (cm)	174.1	123.7	—	—	129.2	—	117.0	136.0				
梁間間 (cm)	—	—	215.9	—	—	203.9	—	209.9				

3. まとめ

(1) 遺構の時期

遺構の時期を検討するにあたり、まず掘立柱建物および性格不明土坑については、出土土器並びに前者に関しては柱穴規模と柱間の間隔について検討を行い、時期比定の根拠としたい。

SC01～03の時期について

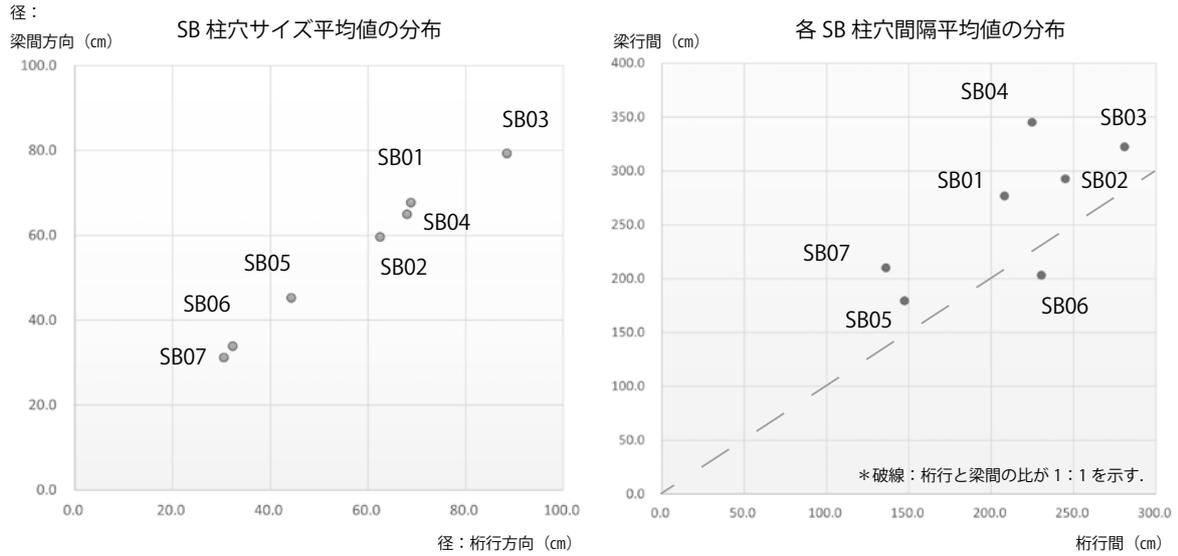
SC01からは時期を確定できる遺物は出土していない。SC02からはやや丸みを帯びた平底を呈する壺底部や粗い胎土で色調が灰白色を帯びる鉢形土器が出土している。鉢形土器については薬師の森遺跡、御手洗遺跡などで類例が確認されている。弥生時代後期後半ごろと考えられる。SC03についても出土遺物は少なく、時期比定は難しい。しかし、丸みを帯びる平底の壺底部片が出土していることから、SC02とほぼ同時期と考えられる。SC01は遺物から時期を比定できないが、SC03と平面プランが方形で類似している。そのためSC02と近い時期の遺構であろう。

SB01～07の時期について

掘立柱建物の時期について、まず各建物の柱穴から出土している遺物について整理すると以下のとおりである。SB01、SB02、SB05、SB07で須恵器が出土している。須恵器の時期はおおよそⅦ期である。このうちSB05やSB07から出土した遺物は杯身の比較的大きな破片であるが、その他のSB01やSB02から出土したのは杯蓋の口縁部細片であり、器面の摩耗もかなり進んでいる。その他の建物についてみると、SB03、SB04、SB06で11～12世紀の遺物が出土している。このうちSB03からは土師器碗が出土している。SB04やSB06では小皿や碗の小片が出土するが、須恵器は杯蓋の細片がみられる程度である。これらの出土資料からは、SX05・07を8世紀代、SB03を中世初頭頃の時期と考えることができる。その他の建物について遺物から時期を確定するには資料が細片であるため困難を伴う。

一方、調査時から柱穴サイズや柱間の間隔、また建物主軸の方向などにより、大きく2時期に建物の時期が分かれるものと想定されていた。そのため、柱穴規模と柱間間隔について散布図を作成した。柱穴サイズではSB05・06・07が比較的小規模な柱穴で構成される建物、SB01・02・03・04がより大きな規模の柱穴で建物が築かれていることがわかる(図44:左)。柱間の間隔をみると、SB05・07で柱間のスパンがより狭く、SB01・02・03・04で柱間隔が広い。SB06もSB05・07に比べ柱間隔は広いが、SB01・02・03・04など柱間隔の広い一群の建物に比べると桁行間隔のほうが梁行間隔より広い点で異なる(図44:右)。

建物の柱穴サイズおよび柱間隔による群別と出土土器の対応関係をみると、より小規模な柱穴・狭い柱間隔をとる建物のうち、SB05・07は上記のように8世紀代の遺物が出土している。一方、よりサイズの大きな柱穴で柱間隔の広い一群の建物のうちSB03・04では11～12世紀の遺物が出土している。SB01・02からはⅦ期の須恵器小片が出土するが、柱穴規模と柱間隔からSB03・04とほぼ同じ時期の建物である可能性が高い。これらの一群の建物は、調査地内での主軸の方向もほぼそろっており、矛盾はないであろう。一方、SB06については判断が難しい。柱穴規模はSB05・07などと同様に比較的小さいが、11～12世紀代の遺物が出土しており、柱間隔が



第 44 図 掘立柱建物の柱穴と柱間変異の分散図

SB03・04 と近いため 11～12 世紀の建物と考えておく。

性格不明土坑の時期

遺物が出土している性格不明の土坑について時期をみると以下のとおりである。

SX03 からは粘土に加え、土師器小皿・丸底杯と黒色土器碗を中心に多量の土器が出土している。これら土器の法量をみると (図 45)、杯は口径 14.8～16.6cm、器高 2.9～4.2cm に多くの資料がまとまる (山本 1990: XII B 期)。小皿は 55・70 等いくつかまとまりから外れる資料があるものの、口径 10～11.1cm、器高 1.1～1.65cm に多くの資料が収まる (山本 1990: XI～XII 期)。

土師器、黒色土器の碗は口径 14.5～16.8cm、器高 5.2～6.4cm、底径 6.2～7.5cm の範囲に多くがまとまる。また、土師器碗と黒色土器碗の各法量の分散範囲は重複し、明瞭な差はみられない。さらに上でみた土師器の丸底杯の口径の分散範囲ともほぼ重複していることがわかる。黒色土器の形態的特徴をみると、その多くにはやや低い高台がつく。口縁端部の外反する資料もみられるが、外反は概して弱い。丸い体部にはすべてではないが原形となる杯の底部と体部の境が稜として残るものがあり、一部は押し出し技法によって製作されていることがわかる。これらの特徴から中島氏の分類による黒色土器 A・B 類の碗Ⅲ類-4・5 類に相当する。以上から 11 世紀後半から 12 世紀前葉頃と推定でき、土師器の小皿や丸底杯の年代とも大きな齟齬はないであろう。

SX07 からはⅦ期の須恵器杯蓋や縄目叩きの残る平瓦片が出土するが、その他に土師器小皿と黒色土器 B 類の碗等が出土している。小皿の口径や器高から山本氏の XI～XII 期 (山本 1990) に収まるもので 11 世紀～12 世紀前葉頃の時期である。黒色土器 B 類碗は口縁部端部の外反が明瞭ではなく、丸い体部に稜が残る点や高台がやや低い点など中島氏のⅢ類-4・5 類 (中島 1992) の特徴と共通する。そのため 11 世紀後半から 12 世紀前葉に比定でき、土師器小皿の年代観とも矛盾ない。

SX08 は弥生土器小片が 1 点出土するのみであるが、SC01 に付随する可能性がある土坑であり、機能などは不明であるが SC01 と同時期と考えておく。

SX12 からはいずれも小片であるが、VI期からVII期にかけての須恵器の杯が出土している。小片であるため確実ではないであろうが、一応7世紀後葉から8世紀の土坑と考えておく。

SX13 出土遺物には円錐状土製品以外に瓦器碗の小片が出土している。底部には断面三角形の委縮した小さな高台がつく。口縁部片の端部は外反せず、ミガキも確認できない。瓦器碗Ⅱ類(Ⅱ類-3:中島1992)に比定できる。小片のため時期の確定にはやや不安が残るが、13世紀前後の時期を比定できようか。

SX15 からはVII期後半あるいはVIII期の須恵器杯底部片が出土するが、この土坑は粘土が充填しており、土器生産と関連する遺構である可能性が高い。また、SX03 や SX07 から

も粘土が土師器皿や黒色土器とともに出土していることから、本土坑についてもこれらの土坑と同

時期と考えられる。

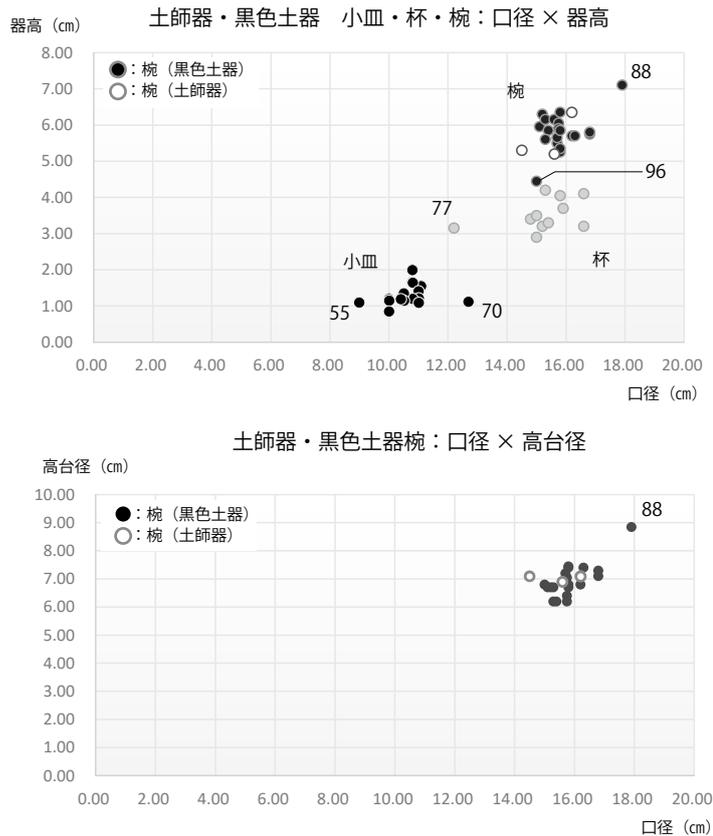
以上にもとづき、遺構の時期は以下のとおりに整理できる。

- 弥生時代後期：SC01～03
- 古代(8世紀代)：SB05、SB07、SX12
- 古代末～中世前半(11世紀～13世紀)：SB01、SB02、SB03、SB04、SB06、SX03、SX07、SX13、SX15

(2) SX03 出土土器と粘土

本堂遺跡群第18次調査では、これまでみたように弥生時代後期以降中世までを中心とした遺構、遺物が確認された。本調査区の東に隣接する上園遺跡や近隣の天神田遺跡では土器の生産に関連した遺構や遺物が確認されており、上大利周辺の中世遺跡の性格を考えるうえで重要となる。今回の調査でも、ほぼ同じ時期の土師器、黒色土器と土器製作に使用したと推測される粘土が複数の土坑から出土した。そのため、この地域を中心とした中世初頭の土器の生産についてみることで、本遺跡の性格の一端について考えてみたい。

本調査区で土器生産に直接かかわる可能性が高い遺構・遺物は SX03・07・15 で確認されてい



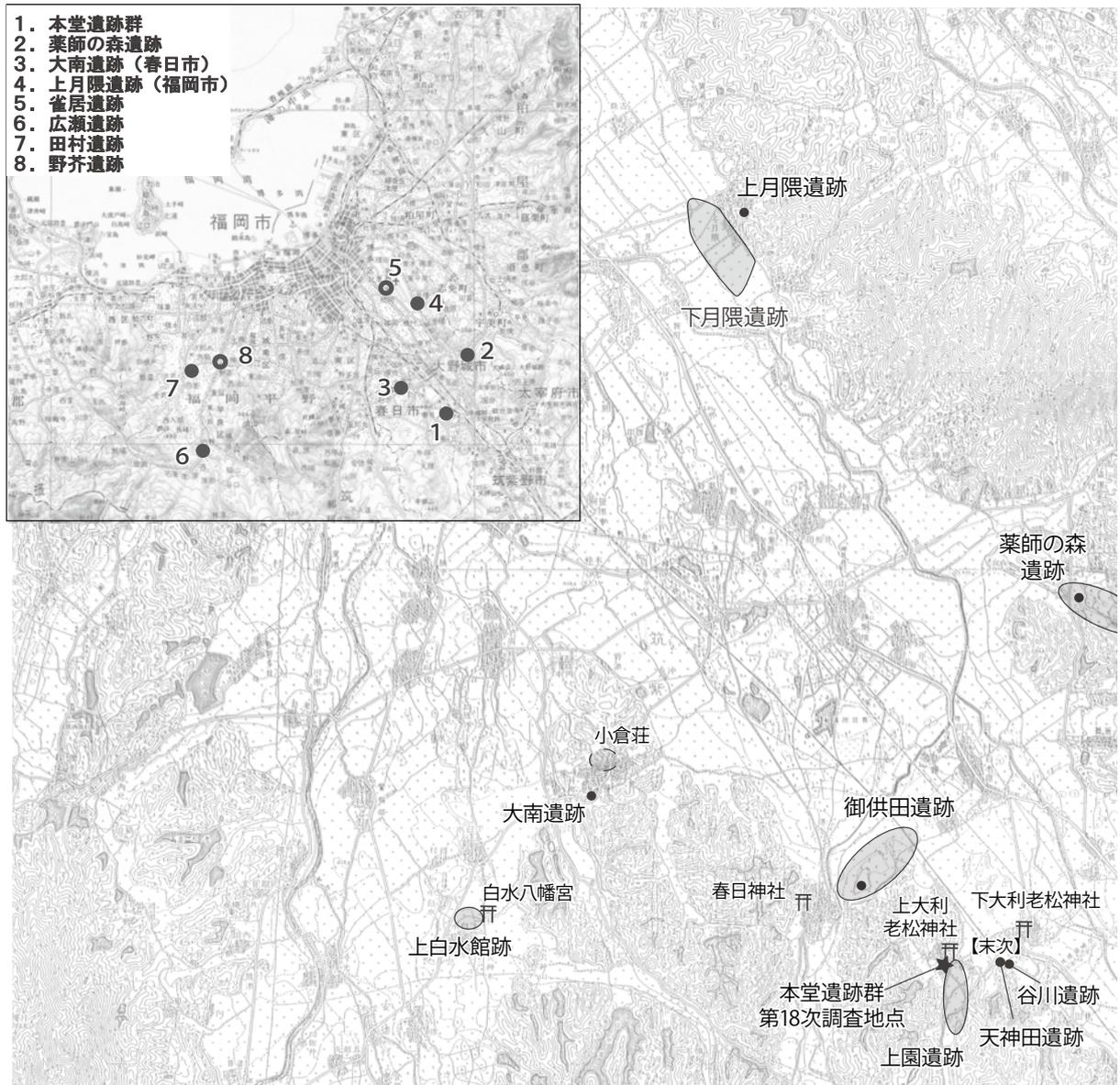
第45図 土師器と黒色土器の口径・器高と高台径の分散図
(* 図中の番号は報文中遺物番号と対応)

る粘土であろう。その他には棒状土製品などがこれまで周辺遺跡の調査で注目されているが、本堂遺跡群第 18 次調査区ではわずかに 1 点出土するのみである。本堂遺跡群ではこれまでも SX15 等と類似した粘土の出土した土坑が複数基確認されている。それらには 8 世紀中頃から後半の粘土を貯留した遺構（1 次調査 SX02/SP438）など古代の遺構も含まれるが、9 次調査 SX01、12 次調査 SX04 などは今回の調査で確認された土坑とほぼ同時期の 11 ～ 12 世紀のものである（石木他 2008a）。9 次、12 次調査区ともに本調査区の南側の丘陵裾部に位置し、立地も本調査地と類似している（第 12 図参照）。第 18 次調査 SX15 など粘土が充填していた土坑は、第 9・12 次で確認された粘土貯留のための土坑と同様の性格と考えられる。一方、SX03 や SX07 については土坑内に粘土が充填した状態ではなく、粘土塊と土器が土坑床面に遺棄・廃棄された状況といえる。おそらく、本来は SX15 と同様に粘土を貯留した土坑であったが、土器製作に伴う使用の後に残置あるいは廃棄された粘土と考えることができるであろう。このような粘土の貯留に使用していた土坑に最終的に土器が短期間に廃棄されたのが SX03 といえる。土器廃棄の契機については不明であるが、土坑床面から出土した土器の一部は移動式カマドの破片の上ののった状態であった。この移動式カマドの破片には土師器あるいは黒色土器碗の高台の圧着痕が残っており間に間層を挟むような状況ではないことから、移動式カマドとその他の床面出土土器の廃棄のタイミングは同時と考えてよいであろう。

次に、貯留されていた粘土の用途について検討したい。周辺遺跡をみると、市域では薬師の森遺跡と天神田遺跡で 12 世紀代の瓦器焼成遺構が確認されている（齋藤 2014; 澤田 2017）。また、上大利地区の北側に位置する御供田遺跡でも瓦器の焼成に関わる棒状土製品、円柱状の支脚、焼けひずんだ瓦器碗が多く出土している。また、本調査区の東に隣接する上園遺跡では焼けひずんだ瓦器に加え、棒状土製品やスサ入りの粘土塊が出土しており、焼成遺構などは確認されていないが、土器生産が近くで行われていたものと想定されている（石木 2022）。さらに、これまでの調査成果に基づき区画溝から焼けひずんだ瓦器類がかなり出土することなどからこの区画溝内の生活域で焼成が行われていた可能性が指摘されている（山元 2022）。このような点から、瓦器の生産が上園遺跡や薬師の森遺跡、あるいは御供田遺跡などで行われていたと考えられる。今回の調査地からは瓦器はわずかに小片が出土するにとどまる。そのため SX03 で出土した黒色土器や土師器などの生産のための粘土ということが一つには考えられる。あるいは、この時期は黒色土器の生産から瓦器生産への過渡期ともいえる時期であるため、瓦器の生産に使用された粘土と考えることもできよう。

(3) 福岡平野周辺における土器焼成の様相について

大野城市周辺でこれまで確認されている土器焼成遺構の分布をみると、山間部や丘陵地の裾部に点在することがわかる（第 46 図：左上）。市域の土器焼成遺構の確認された遺跡は先に述べたように、市東部の乙金山山麓丘陵上に位置する薬師の森遺跡第 33 次調査で 12 世紀前半から後半にかけての瓦器焼成遺構が複数基確認されている（齋藤 2014）。市中央部では、牛頸山から派生する丘陵末端部に位置する天神田遺跡で 11 世紀末から 12 世紀前半にかけての瓦器焼成遺構が



第 46 図 本堂遺跡周辺における土器製作関連遺跡

検出されている（澤田 2017）。

より広く周辺域まで目を転じると、春日市の大南遺跡で 12 世紀前半までに収まる土器焼成遺構の可能性のある土坑が確認されている（井上 2004）。福岡市内では、市の東部・月隈丘陵から舌状に派生する支丘上の上月隈遺跡で 12 世紀代の瓦器焼成遺構（SX036）が確認されている（榎本 2000）。一方、福岡市の西部・早良平野周辺では、背振山麓近くの室見川上流域右岸に位置する広瀬遺跡で、12 世紀後半から 13 世紀の土器焼成遺構（SK11）が検出されている（加藤 2005：2006）。さらに室見川の中流域の平野上に位置する田村遺跡でも 11 世紀末～12 世紀初頭の土器焼成遺構（SK15・16・23）が複数基確認されている（加藤 2009）。

以上のように、必ずしも多いわけではないが、11 世紀末から 13 世紀初頭までの土器焼成に関連した遺構が福岡平野の縁辺部を中心に確認できる。また、福岡市田村遺跡などを除くと、丘陵上

あるいはその縁辺部に位置している場合が多く、燃料材の入手など遺構の性格と関連した遺跡立地であることがうかがわれる。また、土器の生産に必要な粘土や燃料材などの入手の容易さといった条件に加え、これらのうちには荘園との関連を想定できる遺跡が少なくない。上でみた土器焼成遺構の時期は11世紀から12世紀代を中心とした時期の瓦器の焼成を中心としていたものであろうが、この時期は初期荘園から中世的荘園制社会の完成をみる時期でもある(工藤2022)。そこで、荘園に関わる文書類の初出年なども含め簡単にみしてみる。

まず、上月隈遺跡であるが、9世紀中頃(貞観年間)に内蔵寮博太荘と観世音寺の一切経料田をめぐって、両者間で相論が起こっている。そしてこの係争地が、上月隈遺跡から程近い雀居遺跡近傍であることが指摘されている(坂上2022)。内蔵寮博太荘はもともと皇室領(高子内親王領)であることから、下月隈C遺跡第7次調査出土「皇后官職」木簡との関連が検討されたという経緯がある(坂上2006)。中世の上月隈遺跡の性格の評価に直結させることはできないであろうが、至近の距離に9世紀には皇室領や寺社領が錯綜しつつ存在している点は注目される。さらに、この月隈周辺域の様相に関しては、8世紀末～9世紀初頭の大規模な洪水の後、しばらく荒地のまま放棄されていた土地の再開発が11世紀以降本格的に進むとする見解もあり(坂上2022)、上月隈遺跡での土器焼成遺構の時期と近く興味深い。

早良平野に位置する田村遺跡は、安元2(1176)年の八条院領目録に初出する野芥荘に属する可能性が想定されている(佐藤1988)。この田村遺跡からさらに室見川の上流域の広瀬遺跡が位置する脇山・横山地区は、嘉保3(1096)年背振上宮東門寺領に寄進されたことが知られる(加藤2006)。さらに荘園制との関連をみてゆくと、春日市・大南遺跡の所在地は小字名からもわかるとおり小倉荘が近くに存在していた可能性が高い。小倉荘は鎌倉時代初期の文書とされる「弥勒寺喜多院所領注文」(『石清水文書』二卷四三二号)に筑前国小倉庄として記されている(春日市史編さん委員会1995)。

大野城市域の遺跡について同様にみていくと、薬師の森遺跡の所在する乙金は周布氏の所領であることが1523(大永3)年の史料(『萩藩閥閥録』)で確認できる(服部2005)。ただし、中世前期に相当する時期の荘園制に関連する史料は今のところみられない。そのため直接この地と荘園との関連を示す文献はないが、薬師の森遺跡の調査成果からは、12世紀中頃から当地の開発が大規模に進むことが指摘されている(上田2017)。上記の月隈周辺と同様に中世初頭に新たな土地開発が本格的に進むなか、薬師の森遺跡第33次調査で確認された瓦器の生産もこのような開発の活発化の動きと無関係ではないであろう。御笠川をはさんで牛頸山から派生する丘陵末端部に位置する天神田遺跡については、すでに指摘されている通り、本遺跡のすぐ北の小字名である末次が安楽寺領として1352(観応3)年の安楽寺領注進目録にみられる(服部2005, pp.528-529)。安楽寺領である点をふまえると、遺跡の所在する地の東にある天神田という小字名に加え、天神田遺跡の位置する下大利と本堂遺跡群・上園遺跡の位置する上大利の両地区に所在する下大利老松神社、上大利老松神社が天満宮領であったことに由来するとの指摘(服部2005, pp.532-533)も荘園の広がりを考えるうえで参考となるであろう。このような点から、本堂遺跡群と上園遺跡周辺が14世紀には安楽寺領であったことは確認できる。安楽寺領となるのがどのくらいさかのぼるか

は不明である。しかし、本堂遺跡群および上園遺跡の遺跡形成過程からは、上園遺跡で 11 世紀後半から 12 世紀前半代に人的活動が拡大したと指摘され（齋藤・山元 2022）、そのような再開発を安楽寺が果たしたとの指摘もある（石木 2022）。同様に本堂遺跡群でも、9 世紀から 10 世紀前半の衰退後、11 世紀後半から 12 世紀前半にかけて遺跡形成が再度活発になることが明らかにされている（石木他 2008b）。中世的荘園制が確立してゆく時期に、土地開発が活発化し、その過程で土器生産が行われている点は注目されよう。

大野城市域における土器焼成遺構に関しては、荘園に関する文献史料で遺構の時期に近いものは現状ではみられない。しかし、近隣地域に所在する遺跡では少なからず土器生産にかかわる遺構、遺跡の時期と近い時期あるいはそれをさかのぼる頃の荘園に関わる史料が散見される。また、天神田遺跡や薬師の森遺跡でも、11 世紀後半以降の遺跡形成が活発になる様相からは、この頃に土地開発が盛んになっていることがうかがわれる。

これまで上園遺跡や本堂遺跡群周辺での瓦器を中心とする生産活動は、周囲の森林資源や粘土採集など土器生産に必要な物資を獲得するうえで条件的に適した地である点が言及されてきた。もちろん、このような環境的な条件は生産活動を行う場を規定する最も重要な要件であることは再度強調するまでもない。このことは先にみた福岡平野に点的に確認されている土器焼成遺構の分布からも推察されるところであろう。これまでの調査によって本堂遺跡群の所在する上大利地区およびその周辺における中世の土器生産の様相を考える材料は増加してきている。焼成遺構の調査・確認事例こそ必ずしも多くはないものの、それにかかわる遺構・遺物の調査・研究事例は調査回数を重ねるにつれ充実してきている。今後は上でみたような古代末から中世への過渡期における荘園制の変遷・変質といった社会・経済情勢の推移も視野に入れ、土器生産に関する研究が進められることを期待したい。

【文献】

- 石木秀啓・久住愛子・北川貴博・上田龍児・大里弥生 2008a 『牛頸本堂遺跡群Ⅵ（大野城市文化財調査報告書第 80 集）』大野城市教育委員会
- 石木秀啓・大里弥生・中島圭・遠藤茜 2008b 『牛頸本堂遺跡群Ⅶ（大野城市文化財調査報告書第 81 集）』大野城市教育委員会
- 石木秀啓 2022 『上園遺跡 10（大野城市文化財調査報告書第 198 集）』大野城市教育委員会
- 井上義也 2004 『大南遺跡 B 地点 福岡県春日市小倉所在遺跡の調査（春日市文化財調査報告書第 38 集）』春日市教育委員会
- 上田龍児 2017 『乙金地区遺跡群 21（大野城市文化財調査報告書第 157 集）』大野城市教育委員会
- 榎本義嗣 2000 『上月隈遺跡群 2 第 2 次調査報告（福岡市埋蔵文化財調査報告書第 633 集）』福岡市教育委員会
- 春日市史編さん委員会 1995 『春日市史（上巻）自然、原始・古代、中世・近世』春日市
- 加藤良彦 2005 『広瀬遺跡 1 広瀬遺跡第 1 次調査 1（福岡市埋蔵文化財調査報告書第 865 集）』福岡市教育委員会
- 加藤良彦 2006 『広瀬遺跡 3 広瀬遺跡第 3 次調査（福岡市埋蔵文化財調査報告書第 902 集）』福岡市教育委員会
- 加藤良彦 2009 『田村 15 田村遺跡第 21 次調査報告（福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1031 集）』福岡市教育委員会
- 工藤敬一 2022 『荘園の人々』ちくま学芸文庫

- 齋藤明日香・山元瞭平 2022 『上園遺跡9（大野城市文化財調査報告書第 193 集）』大野城市教育委員会
- 齋藤友紀・作田清恵 2014 『葉師の森遺跡第 33 次調査 1（大野城市文化財調査報告書第 117 集）』大野城市教育委員会
- 坂上康俊 2022 「福岡市域における 8～9 世紀集落の変貌とその背景」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 232 集, pp.59-112.
- 佐藤一郎 1988 『田村遺跡V（福岡市埋蔵文化財調査報告書第 192 集）』福岡市教育委員会
- 澤田康夫 2017 『天神田遺跡 1（大野城市文化財調査報告書第 149 集）』大野城市教育委員会
- 中島恒次郎 1992 「大宰府における椀形態の変遷」『中近世土器の基礎研究Ⅷ』日本中世土器研究会
- 服部英雄 2005 「中世史料に登場する大野城市域」（大野城市史編さん委員会編）『大野城市史（上）』
- 山本 1990 「統計上の土器」『乙益重隆先生九州上代文化論集』乙益重隆先生古稀記念論文集刊行会

圖 版



(1) 村下遺跡 O 地点
北西部全景 (南東から)



(2) 村下遺跡 O 地点
南東部全景 (北西から)



2



P-2 出土石炭

(3) 村下遺跡 O 地点出土遺物

図版 2



(1) 松ノ木遺跡調査区
北半部全景（西から）



(2) 松ノ木遺跡調査区
南半部全景（北西から）



(3) 松ノ木遺跡竪穴状遺構
完掘状況（北西から）



(1) 松ノ木遺跡周溝状遺構完掘状況 (南西から)



3



5



4



11

(2) 松ノ木遺跡出土遺物

図版 4



(1) 本堂遺跡群第 18 次調査区全景 (南西から)



(2) 本堂遺跡群第 18 次調査区北半部全景 (南西から)



(1) 本堂遺跡群第 18 次調査 SC01 (南から)



(2) 本堂遺跡群第 18 次調査 SC02 (南西から)

図版 6



(1) 本堂遺跡群第 18 次調査
SC01 炭化物検出状況



(2) 本堂遺跡群第 18 次調査
SC03 炭化物検出状況



(3) 本堂遺跡群第 18 次調査
SC03 (西から)



(1) 本堂遺跡群第 18 次調査 SB01 : SP159



(2) 本堂遺跡群第 18 次調査 SB01 : SP160



(3) 本堂遺跡群第 18 次調査 SB01 : SP161



(4) 本堂遺跡群第 18 次調査 SB03 : SP220



(5) 本堂遺跡群第 18 次調査 SB03 : SP224



(6) 本堂遺跡群第 18 次調査 SB03 : SP267



(7) 本堂遺跡群第 18 次調査 SP01 遺物出土状況



(8) 本堂遺跡群第 18 次調査 SP10 遺物出土状況

図版 8



(1) 本堂遺跡群第 18 次調査
SX03 半裁状況 (東から)



(2) 本堂遺跡群第 18 次調査
SX03 遺物出土状況
(北東から)



(3) 本堂遺跡群第 18 次調査
SX03 (南西から)



(1) 本堂遺跡群第 18 次調査
SX07 粘土検出状況
(東から)



(2) 本堂遺跡群第 18 次調査
SX15 検出状況
(北西から)



(3) 本堂遺跡群第 18 次調査
SX15 土層 (北東から)







84



151



158



138



160



143



163



150



166

報告書抄録

ふりがな	むらしたいせき7 まつのきいせき うしくびほんどういせきぐん10							
書名	村下遺跡7 松ノ木遺跡 牛頭本堂遺跡群10							
副書名								
巻次								
シリーズ名	大野城市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第216集							
編著者名	石川健							
編集機関	大野城市							
所在地	〒816-8510 福岡県大野城市曙町2-2-1 電話 092 (501) 2211							
発行年月日	2024/3/31							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯 。'。"	東経 。'。"	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
むらしたいせき ちてん 村下遺跡O地点 の調査	ふくおかけんおおのじょうし 福岡県大野城市 つつい ちょうめ 筒井1丁目770-4、5、8	402192		33° 32' 21"	130° 28' 35"	1997/3/3 ~20	106㎡	共同住宅建設
まつ きいせき 松ノ木遺跡	ふくおかけんおおのじょうし 福岡県大野城市 にしきまち ちょうめ 錦町4丁目5-1、5-2	402192		33° 32' 3"	130° 28' 48"	1998/2/4 ~19	415㎡	立体駐車場建設
うしくびほんどういせき 牛頭本堂遺跡 ぐんたい じちようさ 群第18次調査	ふくおかけんおおのじょうし 福岡県大野城市 かみおおり ちょうめ 上大利2丁目560、561- 1、563	402192		33° 30' 50"	130° 29' 3"	2007/1/29 ~3/15	320㎡	共同住宅建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
村下遺跡O地点 の調査	集落	縄文時代、弥生 時代、古墳時 代、江戸時代	ピット	土器細片				
要約	O地点の調査では、不整形のピットを複数確認した。出土遺物は少量出土したが、いずれも細片で時代、時期を明確にできる状況にはなかった。ただし、弥生土器、須恵器の細片や近世以降の陶磁器片、石炭などが出土しているため、近世まで断続的に人々の活動の場であったと考えられる。							
松ノ木遺跡	集落	弥生時代~中世	堅穴状土坑 周溝状遺構	縄文土器・弥生土器 土師器・輸入陶磁 器・石器	弥生時代後期の周溝状遺構を確認した。			
要約	弥生時代後期の周溝状遺構を確認した。近隣に位置する村下遺跡L地点で同様の遺構が確認されており、その性格を含めて今後の調査に期待したい。また、古墳時代後期から古代にかけての時期の堅穴状遺構も確認した。柱穴等が明確ではなく、遺構の性格は不明とせざるをえなかった。 包含層からは、古くは縄文時代早期の押型文土器が1点ではあるが確認できた。合わせて、石鏃や磨石・敲石も出土した。縄文時代の早い段階で沖積平野の微高地上に生活範囲が広がっていることを確認できた。一方、中世の磁器や瓦質土器なども出土しており、中世まで断続的に人々の生活の場であったことがわかる貴重な成果である。							
牛頭本堂遺跡 群第18次調査	集落	縄文時代、弥生 時代、奈良時 代、平安時代	堅穴状遺構 掘立柱建物 溝 土坑	縄文土器・弥生土器・ 須恵器・土師器・黒 色土器・輸入陶磁器・ 瓦・石器	弥生時代後期の堅穴状遺構を3基確認した。また、奈良時代の掘立柱建物2棟、平安時代の掘立柱建物4棟、土坑を確認した。平安時代の土坑には粘土が充満したものや、粘土と土器がともに出土したものがある。土器製作のための粘土貯留施設と考えられる。			
要約	弥生時代後期と考えられる堅穴状遺構を計3基確認した。また、奈良時代の掘立柱建物2棟を確認した。平安時代以降には奈良時代の掘立柱建物に比べ、柱穴規模が大きく、柱穴間隔の広い建物4棟を確認した。これらの他に両者の中間的特徴をもつ建物1棟を加えた合計7棟の掘立柱建物が確認できた。 また、性格不明の土坑を合計15基確認したが、そのうち遺物が出土した遺構は、ほぼ平安時代のものであった。なかでも土坑内に白色粘土が充填していたものをはじめ、粘土塊と土器が土坑床面から出土した土坑2基については、土器製作のための粘土貯留の土坑と推定した。 このような粘土を保存・貯留する施設を第18次調査地点で検出したが、東に隣接する上園遺跡などでは、既往調査で瓦器が生産されていたことが各種関連遺物によって推定されている。このような周辺遺跡の調査成果を考えると、本調査で確認した粘土貯留施設は古代末から中世初頭にかけての土器生産の様相をより具体的に復元するうえで重要である。							

大野城市文化財調査報告書 第216集

**村下遺跡7 松ノ木遺跡
牛頸本堂遺跡群10**

令和6年3月31日

発行 大野城市
〒816-8510
福岡県大野城市曙町2-2-1
印刷 有限会社 成光社
〒815-0082
福岡市南区大楠1-29-33